

昭和五十六年三月

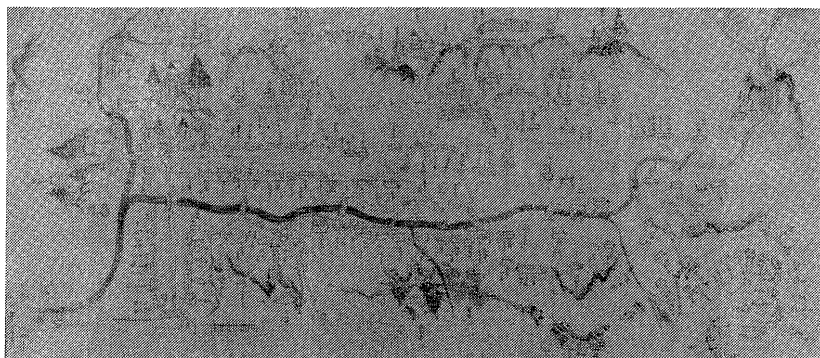
史料館所藏史料目錄

第三十三集

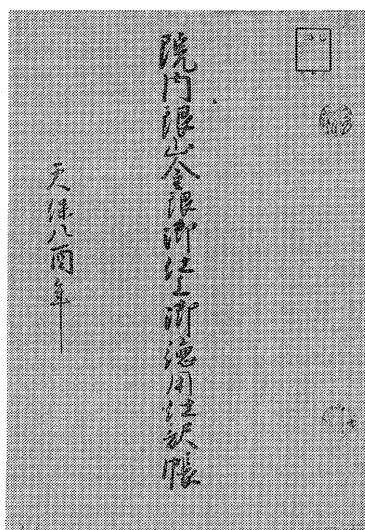
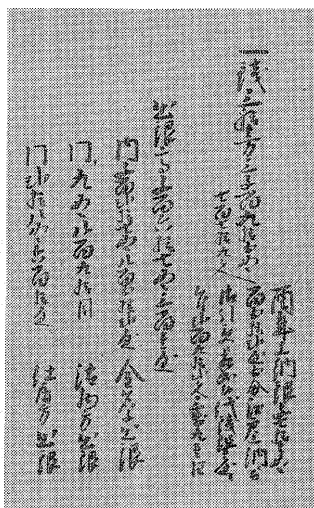
史料館

史料館所藏史料目錄

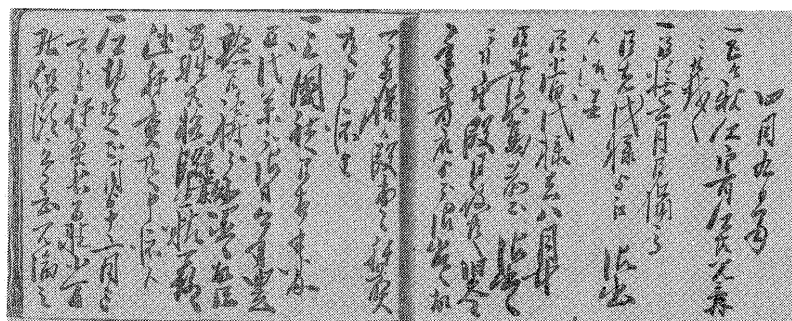
第三十三集



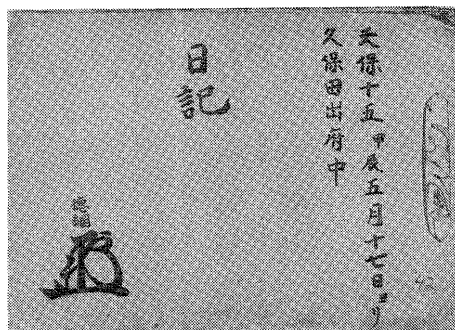
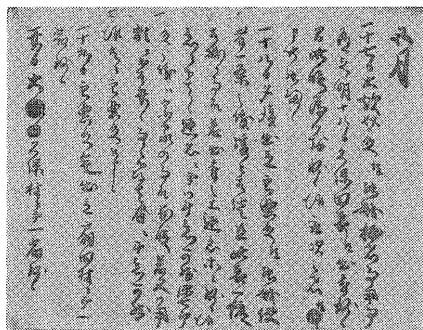
院内銀山町絵図〔小貫家文書421〕



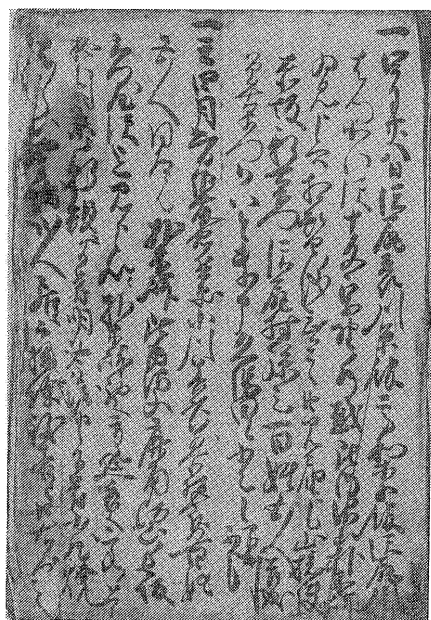
院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳 天保8年〔小貫家文書33〕



支配処記事 慶応3年〔小貫家文書316〕



久保田出府中日記 天保15年〔武茂家文書5〕



御境目御論地万日帳之覚 延宝3年〔岡本家文書12〕

凡 例

一 本目録は『史料館所蔵史料目録』第三十三集として、出羽国久保田佐竹家家中小貫家文書・出羽国秋田郡大館佐竹家家中武茂家文書・出羽国秋田郡十二所佐竹家家中岡本家文書の各目録を収めた。

一 史料は利用上の便宜を考慮して、その内容・性格等に応じ、大・中・小の項目を立てて分類配列した。大項目は一〇ポイント・ゴチック活字、中項目は九ポイント・ゴチック活字、小項目は八ポイント活字で示した。但し、内容が多岐にわたり他の項目中にも掲げることが妥当と考えたものは＊印を付して重出した。また必要に応じて○印で細項目を示した。

一 史料目録の記載欄はほぼ、(一)表題 (二)作成者または差出人 (三)宛名 (四)作成年月日 (五)形態 (六)数量 (七)整理番号の順である。

一 表題(史料名称)は原則として原表題を採った。原表題の無いものおよび原表題を改変したものは仮に命名して掲げ、(一)を付して前者と区別した。また必要に応じて内容摘記を付したものが若干あり、これは「」内に八ポイント活字をもって併記した。

一 写・控・下書等の区別は、原表題のあるものはその下に(一)を付して、また仮表題のときは(一)内に表題に続けて八ポイント活字で示した。

一 作成者または差出人および宛名は、表題から推知しうるもの、項目によって判明しうるものは適宜省略したものもある。

一 作成年次は年月日・干支を採り、推定年次は(一)を付した。また「」内年次は内容記述年代である。

一 史料の形態は、簿冊類では半(半紙判)、美(美濃判)、美大(美濃大判)、半半(半紙半截判)、美半(美濃半截判)、横長半(半紙横長判)、横長美(美濃横長判)、横長美大(美濃大横長判)、横半半(半紙半截横長判)、横美半(美濃半截横長判)、などによって原書の大きさの大概を示すにとどめた。また一紙書付類は通をもって数量を示し、紙形の大小・寸法などは省略した。絵図類は縦横の寸法をセンチメートル単位で示した。

一 数量の上部に示した板は木版物である。また仮は仮綴本、合は合綴本を示した。

一 最下欄の数字は、各史料の整理番号を示す。照会・閲覧・引用の場合に利用されたい。

一 巻末に簡単な解題を付した。

目次

凡例	口繪	頁
出羽国久保田家佐竹家 中 小貫家文書目錄	一
目次	三
目錄	五
出羽国秋田郡大館家佐竹家 中 武茂家文書目錄	三
目次	五
目錄	五
出羽国秋田郡十二所家佐竹家 中 岡本家文書目錄	五
目次	五
目錄	五
小貫家文書目錄解題	三
武茂家文書目錄解題	八
岡本家文書目錄解題	九

出羽国久保田佐竹家小貫家文書目錄

出羽国久保田家佐竹家中小貫家文書目録目次

佐竹家	頁	米、貸付米、春農米、救米、開発、水利、山林、漁業	税、家計、盜難、売買、貸借、その他
藩侯	五	交通	日記
入部、参勤・上洛供奉、法事、文芸、系図	五	街道、宿駅、難船一件	書状
法令	六	財政	小貫書状、小貫宛書状
触書、仰渡・申渡、制規	六	勘定方	写本・絵図
記録	七	意見書、請払、扶持米・給銀、合力金	三
米、炭	七	米、炭	
鈱山支配	八	湊出入	二〇
鈱山支配	八	作事	二〇
記録・日記、山法、見分・検使、役人・山師、願・書上、出銀勘定、出銀人別、吹分仕法、入料、差引勘定、普請掛、移出、公儀拝借	八	軍事	三
絵図	三	軍制	三
大葛金山、阿仁銅山、八盛銀山、畠銀山、院内銀山、その他	三	海防	三
郷村支配	三	蝦夷地	三
郡方	三	久保田藩	三
演説書、支配所、収納、調達金・御用金、貸付金、渡金、扶持米、備米、払	三	布達	三
		官制	三
		風聞	三
		小貫家	三
		家政	三
		戸籍、知行所、公債、土地、家屋、租	三

出羽国久保田家佐竹家中 小貫家文書目錄

(文書記号 25-1C)

佐竹家

藩候

入部

(御屋形様入部記録) 文政八年五月一七日―七月半 仮一冊 四
義就公御入部御用係之部 安政六年三月晦日―五月十九日 横半半 仮一冊 三九

参勤・上洛供奉

江戸 登被下金異例 (小貫頼誠) 文政一二年二月改半 一冊 二九
―文久三年

道中弘受取 卯二月―三月

人馬向触(写) 小貫東馬内堀松源介外 卯三月

(参府道中御泊付)

道中記 (小貫頼誠) 安政二年三月一〇日 横半半 一冊 三〇九

(人馬駄賃旅籠代物差引勘定覚) 堀松儀平・佐々木官治 卯四月 一通 四〇

御参観御供登ニ付書留 (小貫) 頼誠 文久元年一二月一三日―三年一月八日 横半半 一冊 三九

御参観御道中御供登リ万扣 (小貫) 頼誠 文久二年三月 横長半 二冊 三〇

御供方被仰渡覚 (小貫) 頼誠 文久二年 半 仮一冊 三九
附御櫓御合図定

心得形扣 東都詰合中 (小貫) 頼誠 文久二年四月 横半半 一冊 三〇
―九月

諸品扣 東都詰中 (小貫) 頼誠 文久二年五月―六月 横半半 一冊 三三

金錢受払帳 東都詰中 (小貫) 頼誠 文久二年八月 横半半 一冊 三三
―閏八月

江戸御荷物方 (小貫頼誠書) 半 仮一冊 三〇

(来春御上京ニ付御道中御供々面々心得覚写) 二月(文久二年) 一通 四四

(御屋形様御上洛道中法度) 三月 一通 四七

(御屋形様道中御供方心得覚) 三月 一通 四八

御上京御供被仰付候ニ付取調 横長半 仮一冊 三七

(御上洛御休泊附) 一通 四〇

(御上洛御休泊附) (文久三年) 一通 四〇

御上京御供帳 元治元年七月 横半半 一冊 三三

平元貞治建白書写(藩主上京ニ付) 平元貞治 一綴 三三
七月三〇日・八月(元治元年)

(御屋形様御供奉之覚) 頼誠書 一通 四四

(刀拵ニ付覚) 一通 四四

法事

天樹院様御葬礼御行列帳	文化一二年八月	袖珍	一冊	三〇五	御条目	天保四年一月	半	飯一冊	七
御榮棺 御行列帳 (弘化三年力)		袖珍	一冊	三〇六	(御財政難渋ニ付質素儉約仰渡并御条目寫)	天保五年九月二日—六年十二月三日	半	綴一冊	六
天樹院様 臨産院様 七月七日御法事ニ付日記 (小貫頼誠)	元治元年	横長半	一冊	三〇六	御年限中御省略被仰渡候	天保九年一月	半	一冊	九
来月十二日十三日於天徳院仙松院様五十回御忌 真誠院様七回御忌御法事ニ付日記 (小貫) 頼誠 慶応元年四月二十六日—九月九日		横半半	一冊	三〇四	(御家中町家百姓衣服儉約仰渡)	(天保力)	半	飯一冊	一〇〇
文 芸					御省略御伺御附札寫	(嘉永六年) 一〇月	半	一冊	一〇一
文化五辰年初春三ヶ度御夢御覽被遊候由御直筆 寫 (佐竹義和力)	天保二年		一通	三〇七	御改革ニ付被仰渡之根元	吟味役清水五郎兵衛・ 根本為・古宇田藏 嘉永六年二月	半	飯一冊	一〇三
(佐竹公御筆并題詩寫)		半	飯一冊	三〇八	寛政度嘉永年中迄被仰渡扣	(小貫) 頼誠	半	飯一冊	一〇三
(佐竹四分家略系図)			綴一冊	三〇九	去卯十二月衣食住御製度之儀被仰渡候ニ付当二 月中御目付御伺へ御附札ヲ以御渡候御ケ条 (小貫頼誠) 安政三年二月		半	飯一冊	一〇四
諸士伝系 小貫頼匡誌	宝暦四年一二月	半	一冊	三〇三	御家相統御改革ニ付仰出寫	(佐竹義幾) 九月 (二月仰渡) (安政四年力)	半	飯一冊	一〇五
法 令					(御境口通行ニ付達書寫)	(御境口調役所宛) 五 月(安政四年力)	半	飯一冊	一〇七
触 書					(御境口通行ニ付達書寫)	(御境口調役所宛) 四 月(安政四年以降)	半	飯一冊	一〇八
(參觀交替并衣服制変革ニ付御触書) 戊閏八月 (文久二年)		半	綴一冊	三〇九	(御家中并百姓町人衣服其外儉約申渡条々)	三 月(文久二年力)	半	飯一冊	一〇六
仰渡・申渡					(御借上其外被仰渡寫)	壬戌三月(文久二年)	半	飯一冊	一〇四
御本田給人知行定 寛延三年		一通	一冊	三〇二	(郡奉行御勘定奉行申渡寫)	亥一〇月(文久三年)	半	飯一冊	一〇五
(御時服并御上下子孫拝着ニ付申渡控) 文化二 年三月・四月		一通	一冊	三〇七	諸向被仰渡控 (小貫) 頼誠	文久四年(元治元 年)一(慶応元年) 一一月	横半半	一冊	一〇七
御製服被仰渡御簡条 文化一二年九月		半	一冊	三〇八	諸向被仰渡控(前後欠)	(小貫頼誠) 丑(慶応 元年) 一二月—明治四年八月	横半半	一冊	一〇八

(給分小役銀頂代銀其外諸上納物御渡物双替ニ付申渡写) 卯九月(慶応三年)		半	假一冊	二七
御条目 一二月		半	假一冊	二七
(御家中質素儉約仰渡) 一二月・一月		半	假一冊	二六
(米代代錢を以可相渡ニ付御勘定奉行申渡写) 支配役々宛 八月		半	假一冊	二六
(絹細木綿麻并古手類之町送積荷冲入差留申渡) 湊問屋・小宿・能代問屋・小宿・御境口出入調役・町奉行・郡奉行宛 一二月		半	一冊	三三
(養蚕ニ付申渡控) 一二月			一通	三〇
(百姓公事訴訟等ニ付郡方々村々江達書控)			一通	三〇
(御帛府後相談ニ付罷出候様廻達) 佐竹河内以下一門廻座宛 六月			一通	三二
(役儀勤向ニ付演說覚) 安政五年質素形申合 一月 後書二月一日		半	假一冊	二〇
制 規			一通	三六
刑罰式・同附録 (文政五年以降)			三	
1 刑罰式 同附録目錄 全		半	一冊	
2 刑罰式 上・下 全		半	一冊	
3 刑罰式附録 上ノ一・上ノ二 全		半	一冊	
4 刑罰式附録 下		半	一冊	
家督定 (文政五年以降)		半	一冊	二〇
当用式 小貫頼編誌 文政九年九月		半	一冊	二二

記 録

遺跡並隠居定 小貫頼観 文政十一年五月二六日	半	一冊	二三
役前当用式 小貫頼 (誠) (嘉永六年以降)	半	一冊	三三
年中式 (小貫頼誠写)	横美半	一冊	三六
諸例書例 (小貫頼誠) (文久四年以降)	半	假一冊	三三
新役料定			
諸役御仕切			
看病御暇ニ而江戸表へ罷下リ候節路用不被下段仰渡 小貫頼誠撰之	半	一冊	二八
遺跡願書雛形		一通	三七
梅津主頭政景日記之内抜書(後欠) 慶長一七年二月二八日一元和八年一〇月二九日	半	假一冊	元
秋藩事録(写) (前後欠) 寛文一〇年一十元禄八年	半	一冊	三
国典類集抜書 中・下	半	假二冊	三〇
若殿様修理大夫義苗公 御懷中為御用元禄五壬申年梅津半右衛門指上候覚書(写)	半	一冊	三
宝永二酉年調ヲ以考檢地之超本生米調 秋田領郷帳(写) 吉川十郎右衛門奉行中取調芳賀官助考・佐竹右京太夫 享保一六年三月	半	假一冊	二七
* (紙背) 当国口米之起内外四六伝四季役配分之次第		一通	四三
下野御領分御高并肝煎名前帳 地方役 安政三年四月	半	一冊	三三

(北浦船越新屋土崎湊侍屋敷表間裏行取調)	横長半	一冊	三六五
(久保田城御座之間御目見次第図)		一枚	四三
(能代町図)		一枚	四三

鉾山支配

鉾山支配

記録・日記

院内銀山記 上・中 万治三年六月・下 (宝永元年頃)	半	三冊	四
龜田郡阿仁銅山次第 秋山喜右衛光春 享保一〇年一〇月 (天明六年以後の写)	半	一冊	五
履尾巖秘録 全 (銅山御引上一件寛書) 宝曆一四年五月一六月	半	一冊	六
上野下野 越後奥州 出羽金銀銅鉛山処々控 文政元年八月	横半半	一冊	三八
金山俚言	横半半	一冊	三七
(御山万才)		一枚	四四
(金吹道具図絵)	半	仮一冊	六
山中万記録 真木御山茶久平仁右衛門他 杉木沢・真木沢・三枚御山四役戸賀嶋平右衛門他宛 明和六年一月一二日	半	仮一冊	五
院内銀山諸日記 小貫頼誠 天保九年四月一〇年	横半半	一冊	三五
銅山色々日記 (小貫) 頼誠 安政三年七月	横半半	一冊	三六

不思議心懸手廻共ニ大義ニ苦勞相懸候手控 工
藤紀太郎 (慶応元年以後)

山 法

山法五拾ニケ条 (写) 家康 本多中務少輔宛 天
正五年閏五月 (偽文書)

院内銀山明和四年九月の御条目之写 寅九月

御山法式拾三ケ条 寛政二一年九月

御製札 文化九年一月二六日

目安札 文化二年二月

御足輕勤方定書 文化二年一〇月

山方定書 (控) 町田大之進・森川東兵衛・介川東
馬・金易右衛門・瀬谷小太郎 文政四年三月

(金名子家業出精申渡写) 文政一一年一月
(銅山方山駕籠往来御免被仰渡寫) (文政一
一以降)

御省略取調書上 院内銀山 申六月 (天保七年九)

御改革ニ付再度被仰渡書控 銅山御附吟味役清水
五郎兵衛他二名 嘉永七年二月二二日

御改革ニ付鋪主御仕向申渡書 安政二年三月

御改革ニ付吟味役諸向へ品々申渡ノ次第 吟
味役清水五郎兵衛他二名

銅山下夕代 御手代鋪主へ被仰渡控 仰渡奉行信太
支配人 安政二年三月二五日

理兵衛他三名 安政二年三月二五日

支配人床屋沢山屋へ演舌 安政二年三月

山内一同米錢諸品御取扱之分御見濟御嚟被成下
候箇条 安政二年三月

御伺へ御指揮之ケ条 小沢真木三枚支配人吟味
支配人申会定之ケ条 役清水五郎兵衛他二名 安
政二年四月五日一七日

加護山銀絞方御仕法 辰九月 (安政三年九)

見分・検使

(御屋形様院内銀山御見分ニ付御伺書)
(書上候分)

(女中銀山江立寄之節取扱日記) 院内銀山 天保
一〇年八月

(御屋形様院内銀山御立寄諸事控) 五月二日一
一六日

山中御検使願並先例願申上扣 (院内銀山) (天
保八年九)

(後藤三右衛門金銀銅鉛山見分役人江元百姓
平左衛門差加度儀身元取調ニ付返答書状) 卯
三月

役人・山師

(松岡銀山師仁右衛門隠居甥孫相統并拝借延納
願書)

付松岡銀山差引勘定書 松岡銀山師庄内仁右衛門
・甥龜太郎・孫竹之助・堀松善助・同喜治助 杉原
治長・安藤三右衛門宛 寅四月 (文政一三年九)

(院内銀山重手代工藤万之助出精勤ニ付褒賞願
書) 院内銀山支配人山崎權六 未六月 (天保六年
九)

御手代並金名子人別御手代宛行
御手代拝借定 院内銀山 戌七月 (天保九年)
御手代戌年御給御合力之内正金錢渡大凡調

銅山下タ代御懸山方 御賞先例 辰一二月
支配人御手代役人 (安政三年九)

(銅山減少人別積取調控) 銅山小沢分・真木沢・
三枚山 横長半 飯一冊 三三

願・書 上

銅山御逼迫之節諸品御覽願願書 阿仁銀山 午
(安永三年九) 七月二一日 (天保三年写)

御直山以采鋪内働方書上 (院内銀山) 山方主役
平野卯兵衛 寅一二月 (天保元年) 半 飯一冊 六

(仙北郡荒川村式ヶ山島銀山江永代地所讓渡ニ
付願書写) 日野兵衛 天保一二二年六月五日

(永代壳渡証文写) 肝煎与平太 日野源右衛門宛
文化一二年七月一七日 継一通 四二

(林役錢指出証文写) 根本多郎右衛門外五人 日
野門十郎宛 文政元年五月 (此度林役引受候証文写) 須田直之進外二人
畑銀山主役平野具兵衛宛 天保一二二年六月

出 銀 勘 定

院内銀山金銀御仕上中勘御徳用仕訳書上 天保
四年五月 半 飯一冊 三

院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳 天保七年一
二月 半 一冊 三

院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳 天保八年一
二月 半 一冊 三

院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳 天保九年一
二月 半 一冊 三

院内銀山金銀御仕上御徳用調帳 天保一二二年一
二月 半 一冊 三

院内銀山金銀御仕上御徳用調帳 天保一三年一
二月 半 一冊 三

金銀吹分御徳用控(写) (御改已来金銀吹分御仕揚
御徳用) 横手町善之助手控 文化一四年一 天保四年 半 飯一冊 三

天保二卯年迄出銀并御仕入錢纏 申一二月
同 五巳年迄 天保七年 半 飯一冊 三

文化十四丑年自天保八酉年迄金銀出減試 院内
銀山 半 一冊 三

文化十四丑年天保九戌年迄出銀書上 院内銀
山 (天保九年以後) 半 飯一冊 三

天保三辰分同九戌年迄出金銀高御仕上并御米払
高書上 院内銀山 亥三月 (天保一〇年) 半 飯一冊 三

天保四巳年々々出銀千貫目以上御拜領物覚
院内銀山 天保四年一月二一 九年七月二七日 半 一冊 三

天保四巳年より未年迄御徳用書拔 (天保六年
以後) 半 飯一冊 三

天保九戌年御積御徳用 半 一冊 三

仕屑汰物方出銀御仕上調書上 仕屑汰物方役堀松
權助 戌二月 (天保九年) (天保五年八月一六日一
八年中) 半 飯一冊 三

院内銀山 灰吹金銀請払并 御末書帳 半 一冊 三

院内銀山 灰吹銀御仕上御勘定 天保一二年一二月 横長半 一冊 三

天保六未年ニ見競正金出銀中勘調帳 弘化二年 横長半 一冊 三

出 銀 人 別
天保四巳年同十亥年十一月迄七ヶ年金名子出
銀人別帳 院内銀山扣 横長半 一冊 三

寅年分出銀并巳年十一ヶ年出銀人別帳 院内
銀山 寅一二月(天保一三年) 横長半 一冊 三七

天保四巳年弘化三年迄十四ヶ年出銀纏
天保四巳年嘉永元年申迄十六ヶ年分出銀人別 横長半 一冊 三七

吹分仕法

先ノ中川左兵衛勤中覚(天保一四年) 半 一冊 五

中川左兵衛吹分仕法御益筋調書上 院内銀山 半 一冊 四

中川左平吹分ヶ仕法御徳用調書上 院内銀山 半 一冊 四

中川左平吹分仕法御徳用調書上 院内銀山 天保 半 一冊 五

御普請間代並樋引質樋敷山中小屋敷惣人数金名
子銀老實目江正金錢渡来候中考 院内銀山支配人 半 一冊 五

千貫目出正金御仕入並正金預入交御仕入並正金
三双倍増預御渡之考 院内銀山 天保七年 横長半 一冊 五

入料

金名子百貫目出銀ニ而諸色差引覚 巳四月(弘化
二年カ) 横長半 一冊 五

金名子百貫目出銀十三双倍差引帳 巳四月(弘化
二年カ) 横長半 一冊 五

巳年出金銀御入料正錢預仕訳書上 院内銀山 半 一冊 四

文政十三寅年弘化二巳七月迄御普請鋪御入料
覚 横長半 一冊 五

塩詰入料書上帳 金方 天保一五年五月 半 一冊 四

塩詰仕上り勘定書上 金方 嘉永四年一〇月 半 一冊 四

樋引入料見競帳 弘化二年七月 横長半 一冊 五

差引勘定

御飯料御取調減石錢見競書上 院内銀山 亥三月 半 一冊 五

御金割合見競(弘化頃) 横長半 一冊 五

正金錢老ヶ月分出銀中勘積見済 寅八月(嘉永七
年カ) 横長半 一冊 五

寅卯辰三ヶ年出銀高御仕入金錢預仕訳帳(嘉
永七年安政三年) 横長半 一冊 五

猷納銀七拾貫目懸物覚 院内銀山 卯二月(安政
二年カ) 横長半 一冊 五

猷納銀七拾貫目殘錢仕訳覚 院内銀山 卯二月 半 一冊 五

文政九年戌九月御立寄御入方書上 院内銀山
天保一〇年六月 半 一冊 五

御備錢受払書上 院内銀山帳元 天保一二年七月 横長半 一冊 五

(院内銀山預金錢差引払取扱願) 院内銀山本番
万延元年六月二八日・九月二八日 一通 四

一ヶ年米鉛荒物売場物御渡高并御払諸品御損分
調覚 巳四月(弘化二年カ) 横長半 一冊 五

申年より巳年迄十ヶ年御廻米請取調覚(小沢
・真木) 米方 巳三月 横長半 一冊 五

預錢并諸方貸之内拔書覽 亥暮調分(嘉永四年
力)

亥暮殘物金錢調覽 橫長半 一冊 三六

(院内山神札料増米并御酒御肴代被下ニ付御書
付及廻札之覺) 茂木筑後 院內御米蔵衆宛 天保
五年一月・六年五月一九日 一綴 四〇

普 請 目 横長半 一冊 三六

永御普請 八本樋・六番鋪漆ノ木・相野山 六ヶ処
卍書上 辰七月 半 一冊 六

移 出 半 一冊 六

丑年銅鉛物数取調 能代 丑九月 半 一冊 三

公儀 拝 借 半 一冊 三

銅山ニ付御前金貳万兩御拝借御願書 佐竹次郎
家来田代兵部 阿部伊勢守宛 嘉永七年一月一五日 半 一冊 六

銅山御前貸金貳万兩御拝借御願書並被仰渡書写
田代兵部 嘉永七年一〇月 半 一冊 六

(院内銀山普請ニ付前貸金五万兩拝借願書控)
佐竹右京太夫内飯塚伝也(留守居) 安政三年五月 半 一冊 六

公儀江院内銀山御前貸御願書写 小貫(頼) 天
保一三年以降) 半 一冊 六

繪 図

大 葛 金 山

大葛金山絵図下図 天保一一年五月 88×132 一 鋪 三六

阿 仁 銅 山

真木銅山領砒通略絵図 天保一二年六月写 100×102 一 鋪 三六

阿仁銅山片附木山沢絵図 七十二翁其築書 安政
二年改 78×92 一 鋪 三六

三枚銅山砒通凡図 安政三年九月認 82×92 一 鋪 三六

三枚銅山砒通絵図面書 嘉永六年改八枚ノ内安政
四年五月写 71×92 一 鋪 三六

小沢銅山砒通り凡絵図面 安政四年五月写 70×92 一 鋪 三六

真木沢銅山砒通り凡絵図面 (安政四年写) 51×71 一 鋪 三六

市ノ又銅山砒通り凡絵図面 (安政四年写) 71×51 一 鋪 三六

二ノ又銅山砒通凡絵図面 (安政四年写) 70×92 一 鋪 三六

向銀山砒通凡絵図面 (安政四年写) 41×53 一 鋪 三六

萱草銅山砒通り凡図面 (安政四年写) 70×92 一 鋪 三六

大沢鉛山砒通り凡図 (安政四年写) 52×70 一 鋪 三六

槇沢新引割砒絵図 政蔵
八丁立横しない道下タ仁右衛門鋪砒絵図 二枚 四〇

八 盛 銀 山

(八盛銀山惣兵衛平中鋪・下タ鋪御普請絵図) 二枚 四七

畠 銀 山

畠銀山絵図 71×118 一 鋪 四〇

畠銀山略絵図 天保九年八月三日取調 59×39 一 鋪 四〇

(畑銀山奥柳沢外年限買上伺絵図) 伊藤彦右衛門
御見分平野卯兵衛外 天保一〇年一〇月九日 48×30 一 鋪 四〇

畠銀山鋪内外繩継老分老問之図 44×135 一 鋪 四〇

院内銀山

(院内銀山大切鋪御普請繪図)	60×32	一鋪	四七
(院内銀山小南沢奥新卧御普請略繪図)	49×36	一鋪	四八
院内銀山兩四百枚略繪図	平野卯兵衛	一枚	四九
院内銀山(大仙大切鋪図)	38×49	一鋪	四〇
(院内銀山新道願繪図)	46×31	二枚	四二
(院内銀山五番釜口役所繪図)	62×38	一鋪	四三
(御普請繪図御手控之分)	49×36	一鋪	四〇
(院内銀山町繪図)	49×36	一鋪	四三
その他			
(野田取明鋪繪図)	30×76	一鋪	四三
(川下新大切鋪新規樋卧処繪図)	51×31	一鋪	四四
(新樋道略繪図)		一枚	四五
(相野山新大切口鋪普請卧繪図)	平野卯兵衛外四人	一枚	四六
(手向鋪础通繪図)	笹台鋪主運右衛門	一枚	四八
(鉾山建物側面図)	24×63	一鋪	四九
○			
(三ッ森山沢繪図)		一枚	四七
(才津川真崎野山沢繪図)		一枚	四六

郷村支配

郡方

演説書

(違作ニ而御領中米穀不足ニ付演説覚) 郡奉行 正月 半 飯一冊 二三

(育子并起返り新開ニ付演説書) 郡奉行 二月 半 飯一冊 一八

支配所

小貫東馬支配所仙北郡村々出減高一紙 佐藤三左衛門外五人 元治元年二月 一通 四四

支配処記事 頼(小貫頼誠) 慶応二年一月―五月 横半半 一冊 三五

支配処記事 (小貫頼誠) 慶応三年一月―一月 横半半 一冊 三六

仙北郡西街道村々御高并人馬書上帳 神宮寺 文久三年 横半半 一冊 三八

仙北郡前北浦村々惣高家数帳 元治元年九月改 横半半 一冊 三九

仙北郡奥北浦村々当高家数 元治元年九月 横半半 一冊 四〇

仙北郡街道筋村々御高人数取調帳 元治元年九月 横半半 一冊 四一

仙北郡惣高取調 村数 横半半 一冊 四二

(仙北郡村々絵図)

人別取調書 新屋村肝煎 慶応三年八月
御役屋御入料

5×42 一鋪 四三
横長半 一冊 三六
半 一冊 一七

豊作之心附 川連村佐助 小貫東馬宛 文久元年四月

一通 五五

収 納

去寅年上岩川村上納米内払 慶応三年七月

半 仮一冊 一英

(米納渡寛) 未五月

一通 四六

(平鹿西山毛見差引寛) 未一〇月

三通 四七

(毛見引高寛) 小貫東馬 未一〇月

一通 四八

(御蔵入高上ル高取調寛) 未一〇月

一通 四九

(米上納并不足分寛)

一通 五〇

(田品別物成定)

一枚 六九

(外岡村当御□納分金錢寛)

一通 六〇

(藤左衛門名請反別分米当高拔書)

一通 六二

調達金・御用金

文政三辰年二月、同四巳年九月迄去卯年江戸上
屋敷御殿御焼失ニ付六郡村々御高割銀並人指冥
加金銀御勘定目録 信太伝九郎他四名 文政五年
六月四日

半 一冊 一三

(嘉永五年御調達金利書留寛)(後欠)

一通 五二

御高割銀並人指御用銀本書 (小貫頼誠) 安政
四年二月

半 仮一冊 一六

(片岡源三郎江当座拝借錢之内請取寛) 荒川新
右衛門 御扱宛 安政六年六月二日

一通 五九

御買入米御勘定帳 佐々木戸兵衛 文久二年六月

半 一冊 一六

(荒川新右衛門外調達金米寛) (佐々木) 戸兵衛
戌六月(文久二年)

一通 五五

(調達金入払寛) 北嶋三左衛門 子二月(元治元
年)

一通 五九

(宗家江御用立分差引寛) (佐々木) 戸兵衛 子
三月(元治元年)

一通 五五

(宗家調達金差引書) 平鹿郡矢神村佐々木戸兵衛
小貫東馬内金子幸吉宛 (元治二年) 一月一慶応二年
一月

一〇通 五九

佐々木戸兵衛書状 小貫東馬内家頼宛 (慶応元
年) 閏五月六日・六月一日・同二七日・十一月一
八日

四通 五七

仙北道 御高割銀并御用米御請帳 慶応二年三月

半 一冊 一六

北山本郡御備金錢請払御勘定帳 御蔵元工藤利左
衛門 川井又六郎宛 慶応二年九月

横長半 一冊 三七

(郡別御調達金高書留)

一通 五三

(御調達被仰付ニ付心得寛) 七月

一通 五三

此度両湊御用銀被仰付候人別取調帳(後欠)
巳二月

半 一冊 一五

六郡御高割銀人指御用銀并連々給人新屋御調達
上納寛帳 午五月

横長半 二冊 三二

(平鹿東山御用金書留帳)

横長半 仮一冊 三〇

(御勘定方御用聞伺見習被仰付御請金書留)

横長半 飯一冊 三三

貸付金

(金子借用御役印押領証文) 柳原治右衛門 小貫東馬宛 嘉永六年二月

一通 四〇

(御貸付金書載帳) 午二月一酉九月(弘化三年一久元年)

横長半 一冊 三九

午八月中杉山七藏 請松取調帳 真鍋屋喜兵衛・野間杉屋五郎八拜借金 口屋金一郎 未七月二日

半 一冊 一六

(請取金子払渡覚)

一通 六〇

渡金

(かゝや富太郎江渡金手形) 田口為三郎 小貫東馬宛 申一月二日

一通 六三

(酉年分金通札渡受取覚)

一通 六八

米四俵前渡金規定書 引受惣代平治郎 松村喜左衛門宛 申九月

一通 四五

扶持米

(御扶持代金差引覚) 戌六月二〇日(文久二年)

一通 六〇

(三十人扶持代差引買入米覚) 戌(文久二年以降)

一通 六一

(永六人扶持御礼金内訳) 荒川勘助 最上久右衛門宛 文久四年一月二九日

一通 六三

三人扶持拜領金子上納覚 荒川新右衛門 子二月一日(文久四年)

一通 六三

(三人御扶持拜領金子上納覚) 本郷吉右衛門 文久四年二月二日

一通 六四

(式人扶持拜領金子上納覚) 佐々木与三郎 子二月(文久四年)

一通 六五

(六人扶持代差引覚) 小西喜七 小貫宛 子三月(元治元年)

一通 六六

(拜領金勘定覚)

一通 六七

備米

仙北郡五升備米一紙 跡部惣兵衛 嘉永四年七月 岩屋良兵衛・奥山五平・赤須半之丞・青柳掃部 嘉永五年七月

半 飯一冊 三六

仙北郡奥北浦村々五升御備蒸米積立石数書上帳 青山掃部 元治元年九月

半 一冊 三六

仙北郡奥北浦村々石別備書上帳 元治元年九月

半 飯一冊 四〇

文久元酉年思召御備米書上帳 稻川金之助担所 元治元年九月

半 一冊 四二

仙北郡前北浦五升備米俵数書上帳 元治元年九月

半 一冊 四三

仙北郡東街道五升備米一紙 元治元年九月

半 一冊 四三

六郡五升備米控 (嘉永元年以降)

横長半 一冊 四四

(御備米拜借願書) 植田村高橋庄右衛門 小貫東馬宛 安政七年三月

半 飯一冊 四四

(四ッ小屋林御備米町方大火類焼之もの御救助為開倉申渡書) 午九月一日(安政五年カ)

一通 四七

角間川御蔵御備米取調書上帳 御蔵方慶吉 万延元年四月

半 一冊 四七

(仙北郡別備米糶高覚) 菊地弥一郎 慶応元年七月

半 飯一冊 四八

御軍事方御備分一村三石出高取調帳 南山本
慶応二年六月 半 飯一冊 一畝

勘助備拝借老割付 一枚 三六

払 米

御回米 慶応三年九月 半 一通 一毛
御買入米返上米御救米払帳手扣 一〇日
献納米

御払米両口為御登米御雇舟取調御竊書 真鍋喜
兵衛 丑八月一二日 半 一冊 一瓦

沖出米中勘調書 真鍋喜兵衛 小貫東馬宛 巳六月
御払米 半 一冊 一瓦
晦日

(庄内御蔵米相場調書) 真鍋喜兵衛 小貫宛 六
月一九日 一通 四畝

(払米御役銀定ニ付伺書) 相見役 丑九月 一綴 四畝

(御売上米金銭仮請取手形) 小貫東馬 岸鉄之助
他三人宛 万延元年五月一二月 一通 六二

(角間川浅舞御蔵渡米帳) 横長半 飯一冊 三六

貸 付 米

(御米拝借御取扱願書) 今泉村養吉 小貫東馬宛
安政六年一二月 半 飯一冊 一畝

御米指引書上帳 御蔵方慶吉 文久二年二月 横長半 一冊 三六

街道筋御用米仁差 郷府御請帳 慶応二年三月 半 一通 一瓦

(米納渡覚控) 未九月一七日 一通 一瓦

(浅舞分増田村醍醐村横手町御貸附米書留帳) 横長半 飯一冊 三六

(後藤才介へ拝借米并村々へ被下分覚) 一通 六六

春 農 米

(米拝借願書) 角間村肝煎金江口・長百姓 小貫東
馬宛 万延二年一月二五日 半 一冊 一瓦

(春農米拝借願書) 雄勝郡八面村肝煎吉十郎・長
百姓 小貫東馬宛 万延二年一月 半 一冊 一瓦

(春農米年割返納願書) 畠等村肝煎長治・湯右衛
門・長百姓 須田宇市宛 万延二年二月 半 一冊 一瓦

(米拝借願書) 八幡村肝煎又右衛門・常吉・長百姓
小貫東馬宛 万延二年一月 半 一冊 一瓦

(米拝借願書) 雄勝郡荻袋村肝煎清治・長百姓治右
衛門 小貫東馬宛 万延二年一月 半 一冊 一瓦

(米差引覚) 一通 六六

救 米

(新屋村手宛御救人別米同追加分覚) 五月 一通 六二

開 発

(村々開發場所取調届書) 前北浦 鈴木平蔵宛
慶応二年三月 半 一冊 一六

北山本郡村々三石御開發処書上帳 慶応二年一
〇月 半 一冊 一六

機織村切添掛合御ケ条書写 山本郡太内田村 慶
応二年八月 半 飯一冊 一毛

内海市右衛門様より被仰渡御ケ条書写 山本郡
太内田村扣 慶応二年八月 半 飯一冊 一瓦

(切開高之義文化以来之御箇条御引揚願書)
山本郡機織村肝煎与三郎他 安井養之助宛 慶応三
年五月 半 一冊 一瓦

由緒書 山本郡太内田村肝煎源太郎他九人 篠田新
左衛門宛 文化一四年一月

半 一冊 二六

(新免起返り等之場所見立注進申付証文) 大森
六郎右衛門 森岳村之内泉八田村小百姓多兵衛宛
寛政八年八月

一通 四三

大繩新藏様へ指上候書付扣(写) 寛政八年八月
・文化九年二月一七日

半 一冊 一五

御評定処御記録之内書拔 (小貴頼藏)
文化八年未年同十四丑年迄四ッ小屋御開免御納
戸方ニ被成置並六郡開免之儀被仰出

半 一冊 一七

(新田開免等ニ付覚書)

半 一冊 一三

水利

横手川御分水御定書写 林源左衛門他二名 天保
一二年八月

半 一冊 一四

分水御定書之写 金沢西根村・同新西根村〔寛永
一四年六月一廿九日—文化二年一月〕 酉二月

半 一冊 一五

御定書写 五ヶ村 林源左衛門他二名 天保一二年
六月

半 一冊 一六

(横手川五ヶ村分水口一件覚) (元治元年力)

半 一冊 一七

(横手川水掛絵図) 文政七年六月吟味記・天保一
一年五月二八日八幡村肝煎利右衛門所持図写

50×98 一冊 四六

(小刀関組合村用水一件覚書)

半 一冊 一八

(仙北郡長野村仁井堰欠込ミ絵図)

103×58 一冊 四四

山林

(八柏村草飼処入会一件ニ付地元村草飼村々御
定書再吟味願書) 地元村・根田谷地村・下境村・
黒川村・百万刈村・下八丁村・塚堀村・上八丁村・
赤川村肝煎長百姓 渡部鉄五郎・菅生兵右衛門宛
元治元年一二月

半 一冊 一八

(八柏村草飼処入会ニ付地元村古書付吟味願
口上書) 下境村・黒川村・塚堀村・百万刈村・下
八丁村・赤川村・上八丁村肝煎長百姓 元治元年一
二月

半 一冊 一六

(八柏村田村論所御見分御仕分ケ願口上書) 田
村肝煎与惣兵衛・長百姓 渡部鉄五郎宛 元治二年
一月

半 一冊 一九

(八柏村草飼組合村々願書) 下境村・黒川村・百
万刈村・上八丁村・下八丁村・塚堀村・赤川村肝煎
吉田貞右衛門・渡部鉄五郎宛 元治二年一月

半 一冊 一三

享保十三申十一月古書附写(田村草飼六ヶ村境塚
御見分願書) 田村柴田孫助 吉川和助宛 元治二
年一月

半 一冊 一三

享保十三申十二月八日上八丁村出候古書〔田
村野形境塚引直し御請書〕 上八丁村肝煎久兵衛・老
百姓 田村肝煎与十郎宛 享保一三年一二月八日

半 一冊 一四

享保十四年西三月古書付〔田村草飼六ヶ村境塚御
見分願口上書〕 田村肝煎・百姓 吉川和助宛 享保
一四年三月一〇日

半 一冊 一五

新屋敷村 菅件ヶ条御答書写 新屋敷村・本郷鹿渡
泉沢村 村肝煎川村涼平他 小貴宅兵衛他三名宛 慶応元年
一〇月二七日

半 一冊 一六

(館ノ沢卒田村水野目山ニ相成難渋ニ付願書)
荒井尻村肝煎 青柳掃部宛 慶応元年一月

半 一冊 一七

林役様大嶋ニ而御取扱之節指上候御答書扣 鹿
渡村勘兵衛他五名 上曾直次・小峯喜兵次宛 慶応
二年六月一三日

半 一冊 一八

郷中古書附写 加藤走之助他二名 文化七年七月 半 仮一冊 二〇二
(苗植立候肝煎武兵衛御賞願書) 新屋村肝煎大
門助右衛門他 大塚弥門宛 慶応三年三月 半 一冊 一九九
(御植立世話方藤四郎御賞願書) 新屋村肝煎大
門助右衛門他 大塚弥門宛 慶応三年三月 半 一冊 二〇〇
御植立書上 新屋村大門武兵衛・藤四郎 慶応三年三月 一通 四三三

漁業

(助成網願人取調口上書) 新屋村肝煎森川文吉・大門助右衛門・長百姓 菅生兵右衛門宛 慶応三年八月 半 一冊 二〇三

新屋船頭共新網取立願ニ付御内談御伺寛 大塚弥門 四月二日 半 仮一冊 二〇三

(百三段新屋村漁師増網一件問合書控) 付六月三日御答 五月二日・二六日・六月三日 半 一通 二〇四

(漁師引子江申渡控) 漁師宛 五月一〇日 一通 四四四

交通

街道

奥州街道里程一覽(写) 横長半 一冊 三二二

水戸・奥羽街道里程一覽 袖珍 板一冊 三三三

(上山より米沢通福嶋迄里程) 一枚 四四四

(岩見川沿街道絵図) 35×115 一鋪 四四五

宿 駅

六郷村御改政 清水藤兵衛殿被仰渡 膳 馬苦勞町肝煎庄左衛門 寛保二年一月二十四日(二〇日) 半 一冊 三六
(御代官渡部市太郎江被仰渡写) 共 肝煎彦右衛門 寛政九年八月二日
(駅々々難渋之廉申出候覚写) 八月 一通 四九九
(宏徳院様外御入并御賞書上) 中安主典支配所川辺郡新屋村又右衛門 卯三月(慶応三年) 半 仮一冊 三六

難船一件

(廻船難風ニ而男鹿浦入津ニ付問合書状) 松永善之助手附山崎貫之進 佐竹右京太夫役人宛 (安政四年) 一通 四六六

(廻船難風ニ而戸賀浦入津ニ付浦状拝領願書) 振津御影浦大和屋安次郎・船沖船頭為十郎 戸賀村肝煎七右衛門・長百姓宛 安政四年七月 一通 四七七
(別紙中改) 戸賀村肝煎七右衛門・長百姓 船頭為十郎宛
(浦状写) 御名内蟹沢慶蔵・斎藤久馬

(廻船難風ニ而戸賀入津後出帆一条ニ付書状控) 佐竹左近將監内樋口金太郎外三人 松永善之助内手附山崎貫之進宛 (安政四年) 八月八日 一通 四七八

財政

勘定方

意見書

御勘定吟味役処以来書扱 (嘉永二年以後)

御財用ニ付意見書 文久二年九月

(御財用不足ニ付金穀融通方存寄書上控) 九月

(斗升之儀ニ付意見書写) (前欠) 五月

年々作合ニ因テ六郡生米多少考 新田目道茂著

請 払

嘉永七寅正月御軍事ニ付諸向へ御渡銀江戸表へ軍將並戰士為御登御渡迄御払高取調帳 嘉永七年一月—安政二年一月

御当用御募方正請払取調 安政二年四月

(御用向御入料吟味取調書) 調山泉伊織 安政二年六月

安政三辰年十月同四巳年九月まで金銀錢御請払御積帳 (小貫頼誠) 安政三年一月

弘化三年十月安政三辰年九月まで拾ヶ年平均取調帳 小貫頼誠控

御軍事方御備金入払帳 辰年 (安政三年)

(御金払渡方覚) 戊閏二月 (文久二年)

(御勘定目録・断簡) 明和五年二月七日—文政七年五月一二日

扶持米・給銀

御蔵出米御借上割 (天保一一年以降)

惣中御給銀御合力并ニ御賞共取調書上 丑五月 (嘉永六年力)

御蔵出高本帳 上・下 申年

(横目役相見役等御扶持米覚)

合力金米

(川方本々役御合力銀渡高控) 御勘定所 川方本々役人衆宛 文化一五年五月一九日—文政二年一二月六日

江戸大坂御仕切御合力午年より戌年まで五ヶ年御渡方調 小貫頼誠 弘化三年八月

御処預へ惣而引渡廻座上使被仰付御合力被下願御取扱並諸寺院御祈禱料共 (小貫頼誠) (嘉永七年)

(郡奉行御合力金被下置ニ付一札控) 小貫東馬 小川忠太夫他二人宛 慶応三年三月

(御財用奉行被仰付御償金受取仮手形) 菅原源太夫他三人宛 明治元年一月

(箱館表渡海御仕切御合力金覚) 辰二月

炭

矢嶋領炭山御買入御文通 佐竹右京太夫内小貫東馬頼・大井準人実 生駒鍛五郎内山科要宛 山科要清 権 大井・小貫宛 天保一一年七月一七日・二四日

諸向焚炭御渡方老ケ年取調帳 取担割場役処 安
政二年五月 半 仮一冊 八
御留守年佐久良炭焚炭渡ケ処取調帳 割場役処
辰四月 半 仮一冊 八

湊 出 入

湊出入役処詰合日記 小貫頼誠 嘉永六年三月一
一〇月 半 一冊 三三
御取締取調書上調 丑三月(嘉永六年カ) 半 仮一冊 三三
御取締之廉々取調申渡 湊出入役所詰合介川作美
嘉永六年四月 半 一冊 三六
(御役所勤向ニ付覚) (湊出入奉行カ) 丑八月
(嘉永六年カ) 横美半 一冊 三三
当春中より九月迄出入諸品并御役銀取調帳 嘉
永七年九月 横長半 一冊 三三
寅年分沖出入諸品取調帳 寅二月(安政元年) 横長半 一冊 三六
文政六末年カ安政元年寅年迄三拾式ケ年出入役銀
沖出穀并入品塩操綿木綿取調帳 半 一冊 二七
文政六末年カ安政元年寅年迄之惣出高入物高取調
安政三辰年国産物沖出松前五十集物沖入共書上
横半半 一冊 二八
色々抜書覚 湊詰合中共 (安政四年八月まで) 横半半 一冊 三〇
中荷品之内不捌ニ付積戻願・調回願書(写) 半 仮一冊 二五
文化二年六月・文政二年三・四月 横半半 一冊 三五
川方御改書 天保九年(嘉永三年二月写)

作 事

御作事所御張出写 安政二年一月 半 仮一冊 一七
御在国年卯五月カ辰四月迄老ケ年分御当用不時
共御用代凡積帳 御作事所 卯五月(安政二年カ) 半 一冊 一六
安政二卯年大地震ニ付御土蔵廻破損ニ付御手入
落札扣 横長半 一冊 三三
地震ニ付曲直し御修復御場所御伺書 御作事所 半 仮一冊 一六
卯十一月(安政二年) 半 仮一冊 一七
秋田大工小撫師左官人足老ケ年御抱御給金積
御作事所 安政二年十一月 半 仮一冊 一七
来辰年御拵所大凡積 御作事所 卯二月(安政
二年カ) 半 仮一冊 一七
江戸御作事書留写 安政三年三月 横長半 一冊 三三
御玄関御広間両出番所廻御台所共曲直御入料取
調帳 御作事所 辰四月(安政三年カ) 半 仮一冊 一七
御台所曲り直し御修復絵図 半 一冊 三〇

軍事

軍制

軍將並御番頭被仰付候御統並色々御伺被出共取 纏諸日記 (小貫賴誠) 文久二年六月—三年一〇月	横半半	一冊	三〇
御軍事方へ御直書ヲ以被仰出候控 文久三年七月	半	一冊	三五
御軍事方品々日記 (小貫) 賴誠 亥 (文久三年) 八月—(元治元年) 八月	横半半	一冊	三三
御軍器並人馬員数小荷駄色々取調記録 (小貫) 賴誠 元治元年三月	横半半	一冊	三六
久保田御備諸受取調 (小貫賴誠写) 子三月 (元 治元年)	横半半	一冊	三七
火藥取調御伺書 大炮取担吟味役 子 (元治元年) 三月	半	一冊	三六
覚・御直書写 (調練之次第) 平元貞治宛 元治元 年四月—六日	半	一冊	三七
御直書御書付之写 佐竹右京太夫 六郷兵庫頭宛 付六郷兵庫頭様へ御直書之写・御返翰之趣 慶応四年二月	半	一冊	三六
(大炮方取立ニ付演説覚) 御軍事係 九月	半	一冊	三九
軍制之儀ニ付演説覚 御軍事方 七月・八月一八 日	半	一綴	三〇
御軍制	半	二綴	三三

(一男三男実弟大炮並ゲヘル稽古仰付覚写)
八月

半 一綴 三三

御先手行軍帳
御籠元勢行軍帳 寅四月一八日・四月一九日 (慶
応二年)

横長半 一冊 三七

(山本郡御支配御足輕名前書上控) 慶応三年二月

一通 四〇

羽州庄内為御征討御先手一番手御軍割 軍打渡
江内膳・検使小貫又二郎・御番頭小野崎三郎 慶
四年四月一六日

横長半 一冊 三七

武頭一手之調

半 一冊 三三

合図調

半 一冊 三三

海防

異国船防禦海岸御固人數配 (小貫賴誠) 嘉永七
年二月

半 一冊 三三

海岸通御備彈藥取調 (小貫賴誠) 亥七月 (文久
三年)

横半半 一冊 三五

(海岸御備兵糧陣屋取担被仰付ニ付伺書) 御勘
定吟味役北条順治

半 一冊 三三

男鹿兩磯海岸御固御人數割

半 一冊 三四

蝦夷地

蝦夷地御警衛御用書留写 天・地 安政二年三月

半 二冊 三三

年々蝦夷地出張御人數 小貫氏 安政三年—五年

横長半 一冊 三七

蝦夷地御仕切御合力定 小貫賴 (安政四年以降)

半 一冊 三六

松前行之者取調 (小貫頼誠)
松前島々絵図面
(蝦夷地陣屋図)

横長半 一冊 三六
82×101 一鋪 四三
一枚 四四

久保田藩

布達

御宸翰之御写 總裁・輔弼 (慶応四年) 三月

板一通 四九

(羽州庄内征討出兵達書并久保田江使節申達書)
奥羽鎮撫副総督 佐竹内宛 奥羽鎮撫副総督 薩摩
軍事役長尾清右衛門・土州會議詰山本登雲助宛 (慶
応四年) 四月一五日

一通 四九〇

(太政官布告写) 明治四年一月一五年一月 (明治五
年二月一〇日回達)

半 仮一冊 二六六

(給禄田畑両様所持之者取調ニ付達写并諒鏡院
様外御発興ニ付申渡写) 明治四年八月

横長半 一綴 二七〇

隠居家督御暇抱入願案
土族卒定禄扶持方渡証書留出来ニ付廻状写
改曆布達写 秋田県
学制領布布達写 明治五年二月二三日
土族卒禄高姓名届布達写 一六年二月

一綴 二八二

小役銀悉皆免除ニ付願并戸長御向御付札(写)
秋田県令杉孫七郎・秋田県権参事 大蔵大輔井上馨
宛 (明治五年) 一一月二九日・(明治六年) 三月一
七日

一通 二八三

(小役銀割合方ニ付通達写) 租税頭陸奥宗光・秋
田県第一大区小一区戸長 明治六年一月一七日・六
年三月一三日

一通 二八三

(小役銀四季出役卜ノ御達難拝承儀上書写) 信
太意部他二人 杉孫七郎(県令)・平川光伸 明治六
年三月一四日

一通 二八四

秋田県権令告諭写〔家禄奉還勸告〕 秋田県権令国
司仙吉 明治七年一月三十一日

〔官山公有地等取調ニ付地券掛通達〕 二月一日

御苗字御一門へ御直書写〔西南戦争ニ付秋田県補
充兵等新募〕 明治一〇年六月二十六日〔六月三日〕

彈例〔写〕 明治初年

官 制

職制御改〔明治元年〕

〔藩治職制ニ付行政官御沙汰書写〕〔頼誠書〕 一
二月〔明治元年〕

〔上中下士分割仰出写〕 二月一四日〔明治元年〕

〔藩制御改制ニ付仰渡〕 一二月

〔藩治職制任命写〕 二月〔明治二年〕

藩制〔職員規定〕〔明治二年力〕

曹則并掲令・職制規則〔明治初年〕

職制録〔久保田藩治職制〕

〔太政官布告写〕 明治四年六月一九月

〔新県官員姓名書〕

御城下並在々士族ニ御調達御頼之人別金員調
未五月〔明治五年力〕

〔秋田県庁巡廻官員所轄布達写〕 秋田県庁 明治
五年四月

小属巡察規則

〔両西根村合村願〕 仙北郡金沢西根村肝煎久米嘉
右衛門・瀬田川八右衛門・外長百姓組頭 県庁伝達
所宛 明治四年一〇月

風 聞

相州横浜異国船交易商人越前彦右衛門の脇坂中
務大輔殿江駕籠訴状写 申〔安政七年〕二月一八
日

〔京都江戸攘夷等聞書〕 五月一八月一八日〔文久
三年〕

〔攘夷等之儀ニ付諸書留〕 五月一七月〔文久三年〕
幕下之土竹内氏上書〔写〕

〔松蘭西軍艦四艘長州と戦争之荒増〕
長州侯之臣長井雅楽上書之写 文久三年七月写

〔八月十八日政変諸書留〕 八月一九月〔文久三年〕

於京師柳川侯御届
平田氏へ水藩の来書之写 三月〔元治元年〕

〔水戸浪士不穩ニ付触達写〕〔元治元年〕四月

〔將軍上洛猶予并鎖港ニ付書附写〕〔元治元年〕
〔内海御警衛場処仰渡〕 八月二七日・二九日

船頭連并大坂の帰候飛脚之者話風説書〔元治二
年二月頃〕

御処被仰出今度白川侯持参候書附〔写〕 二月
〔元治元年〕

松平式部大輔持参之書附〔写〕 四月一九日
付毛利父子御征伐御進發被仰出〔写〕

(毛利父子問罪之師差向達写) (慶応二年) 六月 一月(慶応四年) (上方風聞来状之写) 一月一六日	半	仮一冊	二五	小貫家
(羽州庄内征討応援申付達書写并軍防局・奥羽 鎮撫総督府副総督達書写) (慶応四年) 四月六日 ・七日・四月二十九日・閏四月九日	半	仮一冊	二六	家政
(酒井左衛門尉征討奥羽各藩書状写) 閏四月・ 五月(慶応四年)	半	一綴	二五	戸籍
(院内口探索報告書写) 刈和野給人飯村源七郎 (慶応四年) 七月一六日	半	仮一冊	二六	(小貫東馬戸籍届下書) 明治四年
津軽江御布告書写 明治二年八月六日	一通	四五	(小貫東馬戸籍届下書) 明治七年	知行所
佐賀の乱風聞書 (明治七年二月三日―一五日)	一通	四七	天保十四卯御本帳・安政六未御本帳・小貫東馬 殿御分野帳書拔 山本郡上岩川村肝煎三十郎他二 名 大井理他二名宛 明治二年一〇月	美大
佐賀の乱電報上申写 東京在勤広島県中属林良之 木戸内務卿宛 明治七年三月三日・二月二日	二通	四六		一冊 二四〇
(西南戦争電報) (後欠) (明治一〇年二月) 五日 一〇日	一通	四九	(本田新開起返り割符高之覚) 住吉荒田目村 文 久三年八月一七日	一通 六四
			(知行代錢勘定覚) 住吉荒田目村円左衛門 小貫 東馬宛 元治二年三月	一通 六三
			(起返り畑返り新開割符高之覚) 住吉荒田目村・ 海蔵院村 六月二七日	一通 六三
			(割符高之覚) 海蔵院村黒沢正之丞 小貫東馬内金 子門右衛門宛 明治五年一二月分	一通 六六
			(酉起り割符高之覚) 海蔵院村	一通 六七
			御皆済御目録(割符高之覚) 海蔵院村 小貫東馬 内金子門右衛門宛 明治四年一二月分	一通 六五
			(海蔵院村住吉荒田目村勘定覚) (紙背アリ)	一通 六三

公 債

金禄公債証書御下渡人名帳江御差加へ願 御台
所町塙正吉 明治一〇年一月 塙正吉代人小貫龜
松 秋田県宛 同一一月一四日

(金禄証書利子金拝戴出頭代人届) 小貫東馬代
理小貫龜松 明治一〇年一月二二日

(金禄公債証書預り証控) 小貫 大槻家静宛 明
治一二年八月二三日

土 地

田地安堵請取一札控 小貫東馬 雄勝郡鶴田東村
佐藤重蔵宛 明治七年四月二八日

地券証之写

添川村濁川村田地価金取調

(岩城村外七ヶ村所有地反別地代金寛)

(所有建家代価田地代金書上控) 小貫東馬 第一
小区事務処宛 明治一〇年一〇月二四日

(南秋田郡岩城村中村所持田德米取極一札) 小
貫龜松 岩城村佐藤政吉宛 明治一二年一月二〇
日

代替地券証御書替願(下書) 手形西新町小貫龜
松 雄勝郡長北条忠勇宛

(抵当流地売買証券謀書事件訴状写) 輕部省代
人田中甚吉 秋田県警察本署宛 明治一四年一月
二四日

(土族土地処有地価金取調通達) 手形本新町組合
戸長役場 小貫東馬宛 明治一六年四月九日

(船木吉蔵・船木方之丞分田收穫米地価地租覚
書) 入作小貫東馬

(耕地地番図)

地券之証 秋田県権參事・秋田県権令 明治六年四
月一〇月・同九年一月

家 屋

建家新築請負約定書 絵図添 秋田市新寺町請負
人兒玉為吉 山崎イト宛 明治三三年六月二二日

租 税

秋田郡岩城村租稅受取証 秋田県租稅課 小貫東
馬宛 明治八年六月二三日・八月三日

(明治八年分貢米小役米代金上納二付書付) 平
鹿海蔵院力黒沢正之丞 小貫東馬内金子門左衛門宛
明治九年一月二九日

弘前裁判所秋田支庁召換状(地租未納之事) 小
貫東馬宛 明治一〇年六月二日

弘前裁判所秋田支庁召換状 菅又要宛 明治一〇
年六月五日

部理代人委任状 小貫東馬 明治一〇年六月五日

未納地租金上納達 第三課國稅掛 第一大区七小
区正副戸長宛 同扱処 小貫東馬宛 明治一〇年六
月九日・一〇日

貢租二納之内未納金受取証 第一大区七小区扱処
小貫東馬宛 明治一〇年六月一日

地租地方稅等請求領収証 秋田県第一大区一小区
手形本新町外九町事務所 小貫龜松・井上金吾・金
之助宛 明治一一年一五年

地租地方稅等請求領収証 小貫龜松・井上金之助
宛 明治一四年・一五年・一六年・一七年

諸稅金上納帳 小貫宛 明治一六年一月

一枚 四六

五枚 五三

一通 五二

一通 五四

一通 六六

一通 五五

一通 五六

一通 五七

一通 五八

二枚 五九

一綴 六八

一綴 五〇

一冊 五二

衛生委員給料受取証 手形西新町衛生委員渡部市二郎 小貫龜松宛 明治一五年六・七月

二枚 六五〇

地租改正入費請取証 小貫東馬宛 明治九年

四枚 六〇七

(新旧地券狀引損用狀代受取証) 南秋田郡五十丁村 井上金之助宛 明治一二年四月一四日

一枚 六〇九

家計

御至來物覚帳 金子門右衛門扣 慶応二年三月

横長半 一冊 三六六

(金錢出入帳) 寅一月一巳二月

横長半 一冊 三六七

(久保田より角間川迄受取私金錢書留) 六月六日一八日(明治)

横長半 一冊 三六八

金銀錢入覚 明治三三年一月一五月一四日
金錢松覚 横長半 一冊 三六九

(玉簾代・刀請代書留写) 天保一二年五月三日・一三年七月三日・弘化三年五月一日

一通 六三三

小豆岩俵請取証 小貫東馬内金子門右衛門 仙北郡板見内村久左衛門宛 慶応元年

一通 六〇〇

金子請取証 小貫 濁川村万之丞宛 卯二月二五日(慶応三年九)

一通 六五五

玄米受取証 小貫東馬内金子門右衛門 濁川村万之丞宛 明治二年四月二九日

一通 六三三

玄米受取証 小貫東馬内金子門右衛門 濁川村肝煎万之丞宛 明治二年一月一五日

一通 六三三

玄米受取証 小貫東馬・龜松 寒川村古田八右衛門宛 明治二年二月

七通 六三三

米送書 下川原村塩田団平 小貫東馬宛 明治八年三月一六日

一通 六四四

米送狀 矢神村佐々木円兵衛 小貫東馬宛 明治八年六月七日

一通 六五五

玄米送り狀 塩田団平 小貫東馬宛 明治九年四月二日

一通 六四四

米送狀 矢神村佐々木円兵衛 小貫東馬宛 明治一〇年五月七日

一通 六五五

金子受取証 那波三郎右衛門 明治五年一〇月一八日

一通 六三三

請留メ拝借書附 菅多七 金子門右衛門宛 明治七年四月二九日

一通 六五五

(人足賃手数料勘定書) 内国通運会社戸島駅一沼館駅一戸島駅各取扱所 明治一〇年六月六日一十九日

横四半 一冊 六五五

(刀壳渡代金請取証) 山崎議之助 小貫龜松宛 明治一九年七月二三日

一通 六六六

(大小一腰外代金勘定預覚) 藤八郎 一二月

一通 六五五

(松兵衛分錢受取願口上書) 那波三郎左衛門 小貫宛 八月晦日

一通 六四四

(御渡金差引覚) 礼助 卯二月

四通 六〇七

(金子差引覚) 一二月二一日

一通 六六六

(金錢出入覚) 酉年

一枚 六六六

(元利指引書) (明治)

一通 六四四

綿預証 久保田茶町菊之丁近江屋 午四月二六日・戌三月一九日

二通 六五五

御筆二幅壳代金仮受取証 中村友吉代清水源藏 小貫龜松宛 明治一四年二月四日

一通 六五五

(立替金錢受私覚) 義助 辰五月一九日

一通 六五五

金錢受取証 か、屋富太郎 小貫宛 寅四月二四日
・同五月一三日・卯七月五日・同一〇月二八日

諸請取勘定書 (明治以前)

諸請取勘定書 (明治)

四如堂再興費決算報告 再興委員山泉礼藏外四人
明治二三年五月

護法会寄附金領収証 鱗勝院會計 小貫東馬宛
明治一七年八月一日

有品覺

(諸藥名前値段書) 六月九日

金子請取証 菅又親孝 若木嘉十郎宛 明治一六年
五月二七日

(金員受領証) 菅又親孝 若木嘉十郎宛 明治一六
年六月二〇日

明治三千年ヨリ明治九子一月迄明細差引 佐々
木与三郎 藤木村杉山惣右衛門宛 明治九年一月

(織竹しなへ竹勘定書) 竹屋伊兵衛 秋田様屋敷
榎野宛 戌一月二五日

盜 難

(盜難ニ付御吟味願書控) 小貫東馬 泉庁宛 明
治四年一月四日

(協差盜難届書控) (小貫東馬) 明治六年一二月
一三日

(協差盜難届書下書)

四通 六〇

六綴 一七通 六三

二〇通 六三

一冊 三七

一通 五三

一通 五三

一通 五二

一通 五五

一通 五七

一通 六三

三通 六二

一通 五三

一通 五四

一通 五五

濃州兼信御刀ニ付願書控 小貫 一〇月 一通 四六

(大小五腰印籠名義ノミ売切ニ付明細書) 細川
泰作吉明 渡辺範三宛 明治一七年五月 一通 五六

(大小五腰其他附屬物品受戻委任状) 渡辺範三
明治一七年七月一日 一通 五七

売 買

撞鐘堂式坪永代売渡証文 本念寺 小貫東馬宛
万延元年二月 一通 五八

旧地券証之写 秋田郡山内村齊藤清十郎 小貫龜松
宛 明治二二年一月 一通 五三

山林永代売渡証書(写) 山内村売主(鈴木)長之
丞 齊藤清重郎宛 明治二二年五月 一通 五九

讓証券 若木嘉一郎 小貫龜松宛 明治一六年九月
二一日 一通 五〇

地処永代売渡証券 委任状共 南秋田郡山内村
齊藤清十郎 小貫龜松宛 明治一八年一〇月 三通 五三

(濁川村万之丞分地所売渡ニ付覺) 明治一四年八
月一八日 一通 六六

田地代金受取証 飯田村善太郎 小貫東馬宛 辰
四月二日 一通 六九

貸 借

米借用証文 南秋田郡湯川村船木長四郎 小貫龜松
宛 明治二二年三月二〇日 一通 五二

不納米拝借証書 乃位作兵衛・同弁吉 小貫龜松
宛 明治二二年三月 一通 五三

金借用証券 小部忠 小貫龜松宛 明治一三年一二
月二三日 一通 五五

金子預り証 森川正 小貫龜松宛 明治一五年一〇月九日	一通	六五	印鑑押収目録(寫) 秋田縣罪裁判予審係判事楠若林知次・書記 明治一七年六月二十四日	一通	五三
借用証券 南秋田郡神田村高野八右衛門 小貫龜松宛 明治一六年五月一七日	一通	五五	結納祝儀次第申合覽	一通	四六
無尽殘金拜領願書(寫) 孝吉(小貫) 龜松宛 明治一六年六月二七日	一通	五五	(先例之通) 穀取立願被仰上度願書 源太寺柳橋養兵衛宛 丑二月(慶應元年)	一通	四五
無尽金借用証券(控) 小貫龜松 無尽藏元石川利吉宛 明治一六年一〇月一八日	一通	五七	日記 天保一〇年一月一二月	一冊	一
金借用証券 手形新町小貫龜松 大正元年一月三〇日	一通	五八	日記 天保一二年一月一二月	一冊	二
金借用証券 手形新丁小貫龜松 綿引サタ宛 大正二年一月二八日	一通	五九	日記 天保一二年一月一二月	一冊	三
(仙北郡藤木村杉山惣右衛門江貸付証券讓分約定取極伺書) 佐々木与太郎 菅又守之助 明治九年一〇月二〇日	一通	五〇	日記 天保一三年一月一二月	一冊	四
金子借用添証券(下書) 手形谷地町二〇番地田口寛藏 井上金之助宛 明治一四年九月	一通	五四	日記 (小貫頼誠) 天保一四年一月一二月	一冊	五
その他			日記 (小貫) 頼誠 弘化二年一月一二月	一冊	六
年中覺	一冊	五〇	日記 (小貫) 頼誠 弘化三年一月一嘉永四年二月	一冊	七
作田証文(控) 川辺郡女米木村作人権三郎 新屋村長兵衛・佐藤次宛 文久二年二月	一通	五三	日記 嘉永五年一月一二月	一冊	八
田地永代耕作証券(雛形)	一通	五元	日記 小貫頼誠 嘉永六年一月一二月	一冊	九
(秋田郡岩城村役人彼仰付度取計方願書) 岩城村伍組佐藤七之助・須田孫右衛門 小貫東馬宛 明治六年九月一七日	一通	五五	日記 小貫頼 嘉永七年一月	一冊	一〇
(別紙証券印紙貼用不致ニ付添書) 平鹿郡矢神村金子又五郎 小貫東馬宛 明治一〇年四月八日	一通	五二	日記 嘉永七年閏七月一九月	一冊	一一
			日記 小貫頼誠 安政二年正月一三月	一冊	一二
			江戸勤番中日記 (小貫) 頼誠 安政二年三月二七日一三年五月二日	一冊	一三
			日記 (小貫) 頼誠 安政三年五月一二月	一冊	一四
			日記 (小貫) 頼誠 安政四年一月一二月	一冊	一五

諸日記 小貫賴 嘉永六年八月—七年一月	半	一冊	六	私頭書日記 (小貫) 賴誠 慶応元年八月(七月) 一二月	横半半	一冊	三三
日記 (嘉永二年—三年)	横半半	一冊	三六	公日記 (小貫) 賴誠 慶応二年一月	横半半	一冊	三三
日記 小貫賴 嘉永六年(二月九)	横半半	一冊	三九	私頭書日記 (小貫賴誠) 慶応三年一月—二月	横半半	一冊	三九
日記 (小貫) 賴誠 安政五年一月—二月	横半半	一冊	三六	頭書日記 (小貫) 賴誠 慶応四年(明治元年) 一月(三月)—二月	横半半	一冊	三五
日記 (小貫) 賴誠 安政六年一月—二月	横半半	一冊	三六	頭書日記 (小貫) 賴誠 明治二年一月—二月	横半半	一冊	三六
私頭書日記 (小貫) 賴誠 万延元年一月—二月	横半半	一冊	三三	頭書日記 (小貫賴誠) 明治三年一月—二月	横半半	一冊	三七
私頭書日記 (小貫賴誠) 万延元年二月	横半半	一冊	三三	日記頭書控 寅二月—三月	横半半	一冊	三六
私頭書日記 (小貫賴誠) 文久元年一月—二月	横半半	一冊	三六	晴雨公私日記 文久元年一〇月—十二月	横半半	一冊	三二
私頭書日記 (小貫賴誠) 文久二年一月—二月	横半半	一冊	三五	役前日記 (小貫) 賴誠 文久三年五月—八月	横半半	一冊	三九
私頭書日記 (小貫賴誠) 文久三年一月—三月	横半半	一冊	三六	役前日記 (小貫) 賴誠 子(元治元年) 二月三日	横半半	一冊	三〇
私頭書日記 (小貫) 賴誠 文久三年三月	横半半	一冊	三七	於江戸表色々拔書日記 (小貫) 賴誠	横半半	一冊	三一
頭書日記 (小貫) 賴誠 亥(文久三年) 三月	横半半	一冊	三六	混雜日記 享和二年九月—天保五年二月	横半半	一冊	三四
私頭書日記 (小貫) 賴誠 文久四年(元治元年) 一月—八月	横半半	一冊	三九	○			
公頭書日記 郡奉行(小貫) 賴 子(元治元年) 八月—十二月	横半半	一冊	三〇	晴雨録(後欠) 東都詰中賴晨 壬戌(文久二年) 四月—(三年) 一月	横半半	一冊	三三
公頭書日記 (小貫) 賴誠 元治二年正月—六月	横半半	一冊	三二	公私日記 小貫久之進藤原賴晨 文久三年一月	横半半	一冊	三三
				公私日記 (小貫賴晨) 文久四年(元治元年) 一月	横半半	一冊	三四

日記 明治二年一月—三月 半 一冊 六
 日記 明治二年九月—一〇月 半 一冊 七

書 狀

小貫書狀

小貫東馬書狀 (小貫) 久之進宛 二月二日 (文久二年) 一通 五
 小貫東馬書狀草稿 重藏宛 七月 一通 五
 小貫久之進書狀 (御屋形様上洛ニ付供奉) 兩親宛 一〇月一七日 (文久二年) — 四月六日 (同三年) 一七通 五
 小貫久之進書狀留 兩親宛 (文久二年) 一〇月二九日 — (三年) 一月九日 七通 五
 小貫宛書狀 一通 五
 梅津定之丞書狀 小貫藤馬宛 九月二日 一通 五
 岡本又太郎書狀 小貫藤馬宛 三月二六日 一通 五
 木村伊四郎書狀 小貫東馬宛 明治九年一〇月二七日 一通 五
 小西龜代治書狀 小貫東馬宛 二月二〇日 一通 五
 高井万治書狀 小貫東馬宛 閏月二七日 一通 五
 中村伍長惣代永田作兵衛書狀 (地租改正筆墨紙代見積割) 小貫東馬宛 八月二八日 一通 五
 森川正・清書狀 小貫東馬宛 九月二日・九月二八日・九月二八日・一〇月九日 四通 五

金大之進書狀 (後欠) 小貫東馬宛 一通 五
 東京麴町三丁目十五番地井上広藏書狀 小貫龜松宛 明治二八年三月二三日 一通 五
 岩沢孝吉書狀 小貫龜松宛 明治一五年二月一六日 一通 五
 上松広平書狀 小貫龜治 (松九) 宛 一〇月二八日 一通 五
 本念寺住職工藤廓導書狀 小貫龜松宛 一〇月二五日 一通 五
 手形壕端浜江内膳竜堂書狀 小貫龜松宛 三〇日 一通 五
 関勝文書狀 小貫龜松宛 五月八日・六月二五日・九月九日 三通 五
 真宮鉄也書狀 小貫龜松宛 明治一五年六月 一通 五
 仙北郡境村柿崎養古書狀 金子門右衛門宛 七月九日・明治一四年一月一三日 二通 五
 黒沢正之丞書狀 小貫東馬内金子門右衛門宛 明治九年二月二九日 一通 五
 角間川鎌田甚七書狀 小貫宛 一〇月三日 一通 五
 小西喜七書狀 小貫宛 七月九日 一通 五
 如水書狀 小貫宛 一通 五
 土田富藏書狀 小貫宛 巳七月九日 一通 五
 長井書狀 小貫宛 九月二〇日・一〇月二三日 二通 五
 長瀬書狀 小貫宛 九月一五日 一通 五
 南幾書狀 御隣兄宛 二〇日 一通 五

写本・絵図

大坂御陣記	美	一冊	二二
黄鐘寸分数法(写) 小(貫) 頼包 二四日	横半半	一冊	三四
仙北道の記 文化八年七月二九日	半	仮一冊	三四
阿山 比川道之記	半	仮一冊	三五
水府公御献策(写) 徳川齊昭 天保九年八月一日 ・九月一九日	半	一冊	二四三
瓊浦筆記 嘉永七年八月	半	仮一冊	二四
ハイ疫済急法 博施堂 文久二年八月	半	一冊	二四
(書状文例) (万延二年町役被仰渡控) (脇差紛失ニ付覚) (手形西新町住居人名)	横半半	一冊	二九
小判両目形位定	半	仮一冊	二四三
藥方雜記	横半半	一冊	三四三
豊凶米作之割大法 (小貫頼誠書)		一通	二六
位階聞書		一通	二八
曳王声之事 但エイトウ		一通	二九
証券印紙規則一目表 秋田県 明治六年一月		板一枚	五〇
根本周助通明書状写 父根本九郎右衛門宛 八月 三〇日・九月二日(明治一〇年九)		一通	二六

江戸城本丸御殿表之図 服部 天保一三年動番中 写	75×52	一鋪	四七
京都絵図 画図原稿森川保之・補図校正羽賀春翠・ 皇都書林竹原好兵衛 嘉永五年一月三刻	54×70	板一鋪	四五
羽州奥州里程測量略図	53×103	一鋪	四九
敵島社頭之図 宮島西廻廊店竹原屋忠八郎	35×48	板一枚	四六
城郭図	61×67	一鋪	四六

出羽国秋田郡大館
家佐竹家
中武茂家文書目録

出羽国秋田郡大館^{佐竹家}中武茂家文書目録目次

佐竹家	壹
公儀仰渡、勤仕、布達、その他	
武茂家	三
家政	三
家、知行、収納、給禄・公債、地券、 租税、家計、土地売買、金融・貸借、 小作、雇傭、持馬	
日記	四
書状	四
学芸	七
礼式、秘伝、信仰、文芸、風聞	
その他	究

出羽国秋田郡大館

佐竹家
中家

武茂家文書目録

(文書記号24—E)

佐竹家

公儀仰渡

左近將監様御登城被成置候所被仰渡候御書附写
〔日光御宮向御修復御用被仰付〕 佐竹右京大夫宛
嘉永四年四月二十九日

一通 二四

十一月朔日御同席触〔近海防禦筋心掛〕 嘉永六年
十二月一日写

一通 二五

〔老中堀田備中守より御達写〕〔垂墨利加官吏参府
許可・水戸前中納言隠居〕 安政四年八月一日

一通 二七

〔垂墨利賀官使府内滞在別湊開港之儀ニ付意見
書写〕 安政四年十二月二〇日

一通 二六

〔蝦夷地之内割合領分ニ被成下ニ付達書写〕 寺
崎藤九郎 古内主典宛〔武茂勝寿宛〕 安政六年一〇
月六日

一通 二三

古内主典慶恒・同武之助芳康書状〔下書〕〔京都
非藏人より御書付写二通被仰渡〕 小野岡右衛門他五
人宛 七月一日〔慶応二年力〕

一通 一九

被仰渡書〔京都警衛増人数御満足〕 慶応二年八月
・九月
小鷹狩源太政幹書状 武茂縫殿助宛 同九月二十四
日

三通 二三

被仰渡書〔蝦夷地警衛免除蝦夷地領分上地并羽二重
頂戴〕 慶応三年四月
石塚源一郎義致書状

三通 二三

〔羽州庄内征討書〕 鎮撫総督 佐竹右京大夫宛
辰四月六日〔慶応四年〕
〔佐竹右京大夫応援方達書写〕 鎮撫総督 津輕越
中守宛 辰四月六日〔慶応四年〕

二通 二五

〔羽州庄内征討ニ付条書〕 辰四月七日〔慶応四年〕
〔御書付写包紙〕〔文書欠〕 大和公伝達・〔古内〕主
典達 慶応四年四月一七日

一通 二六

〔ロシア使節への返書写〕 老中阿部正弘他 嘉永
六年一〇月一五日

半 仮一冊 二五

建白書〔写〕〔条約ニ付〕 松平内蔵頭他大広間詰合
五月一七日〔安政五年力〕

一通 二六

勤 仕

考書稿〔佐竹義宣事歴〕 河野甚助道寛 白坂丹後
宛 宝暦二二年四月七日

横長美

一冊 一

〔屋形様〔義陸〕御家督御礼相濟ニ付達書写〕
二月二八日〔弘化三年〕

半 仮一冊 六

〔佐竹右京大夫〔義陸〕病死及養子ニ付書状留〕
七月一日一八日〔安政四年〕

一枚 二六

宇都宮帯刀孟綱書状〔屋形様〔義堯〕侍從任官達〕
武茂駿河宛 安政四年二月二七日

一通 二七

淡江左膳光音書狀〔屋形様帰国御暇御礼相済〕 〔武茂〕駿河宛 安政六年五月六日	一通	三九	中村云右衛門武治・佐藤小介祐伸書狀〔播磨守若君種痘酒湯濟飲〕 武茂縫殿助宛 二月二八日〔慶應二年力〕	一通	一六
塩谷弥太郎温綱書狀〔屋形様二月九日参内〕 武茂縫殿助宛 文久三年二月晦日	一通	一五	豊田弥右衛門・同弥一郎書狀〔年始祝詞〕 武茂駿河宛 一月七日	一通	一四
塩谷弥太郎温綱書狀〔加茂上下社行幸供奉御用明御発駕〕 武茂縫殿助宛 文久三年四月三日	一通	一五	戸崎治助書狀〔祝詞〕 武茂縫殿助宛 一月一七日	一通	一五
岡本又太郎元質書狀〔若殿様初登城済〕 武茂縫殿助宛 慶応三年四月二八日	一通	一五	演舌寛〔御入湯中伺書〕〔下書〕 武茂縫殿助 三月	三通	一三
小鷹狩源太政幹書狀〔屋形様御暇順年御上洛人少三付御暇不被下〕 添状共 武茂縫殿助宛 慶応三年六月二五日	二通	一五	〔屋形様大滝御入湯中御送迄及御機嫌伺可仕哉伺書〕 古内主典・武茂縫殿助・古内茂之助 三月〔付札付〕	一通	一三
小野岡右衛門義礼書狀〔屋形様中将昇進〕 武茂縫殿助宛 慶応三年八月二一日	一通	一三	〔御用伝達之使者礼式被仰渡ニ付伺書下書〕 武茂駿河 七月	一通	一三
〔屋形様上京之為御着城ニ付達書写〕 慶応四年一月五日	一通	一三	武茂駿河德綱書狀〔屋形様男子御七夜飲祝詞〕 佐藤源右衛門宛 六月二四日	一通	一四
小鷹狩源太政幹書狀〔屋形様腰痛甚敷快方次第上京〕 武茂縫殿助宛 慶応四年一月二四日	一通	一六	武茂駿河富綱書狀〔年始祝詞〕 石塚源一郎他二人宛 一月二日	一通	一四
石井定之進書狀〔此度天朝御高頂戴昇進御祝儀ニ付登城召〕 武茂縫殿助宛 六月二六日	一通	一六	〔御下国御飲御目見寺院修驗社人年始覚〕	半	一三
小貫宇右衛門書狀〔御目見登城召〕 武茂縫殿助宛 六月一四日	一通	一六	○吉凶		
小貫宇右衛門書狀〔御用登城召〕 武茂縫殿助宛 六月一七日	一通	一六	御吉事ニ付御祝儀到来帳 天保二年九月―嘉永五年四月	横長半	一冊
小貫宇右衛門書狀〔改名願許可御目見登城召〕 武茂縫殿助宛 七月六日	一通	一三	御城御婚礼式御頼記録 天保四年七月ヨリ	横半半	一冊
中村云右衛門武治・佐藤小介祐伸書狀〔播磨守〔秋田新田佐竹義謙〕若君御誕生飲〕 武茂縫殿助宛 一〇月四日〔慶應元年力〕	一通	一六	御城御婚礼御儀式覚 〔天保四年九月二八日〕	横半半	一冊
			御供養ニ付御備物到来帳 天保二年四月―安政二年九月	横長半	一冊
			布 達		五

〔古内主典より廻達写〕〔小役銀差上〕 慶応二年一〇月六日

十月六日御会所被仰渡覚〔江役并給分小役銀及仙北筋賊侵入ニ付〕 辰一〇月〔明治元年〕

〔土族称号等ニ付達書写〕 十一月〔明治二年〕

〔上士御附人家来召出ニ付心得〕〔明治三年〕

辛未御布告〔写〕 明治四年十一月―十二月

秋田藩官等便覧〔写〕 明治二年五月一日

その他

久保田江指遣候書載覚書写 寛政六年三月一六日―七月二日

内談覚 根本三郎右衛門宛

御内試備立之図 文化八年七月二三日

〔古内藏人上リ屋敷拝領一件ニ付諸事留書〕 天保一一年二月九日―一二年三月

〔古内藏人屋敷屯間通返済一件願書下書〕

秋田阿仁銅山絵図

〔人名年代書〕〔弘化三年―安政三年〕

武茂家

家政

家

〔土族禄高姓名名書〕 武茂勝十郎〔包紙 花岡村惣代藤盛与四兵衛 武茂勝十郎宛〕〔明治六年〕

〔武茂家歴代忌日法名録〕〔貞享二年―明治元年卒〕

〔武茂家法名録〕

〔武茂家歴代姓名字音訓〕

当日婚礼申合覚 嘉永五年四月二二日

十一月廿日婚礼式御申合様

〔結納諸事覚〕 子四月一八日

御葬送行列帳〔徳綱母〕 嘉永二年一月二三日

〔墓石拵仕様書〕 石切三輪嘉兵衛

出果御届 武茂勝十郎 花岡村戸長役場宛 明治一五年八月一三日

〔建家一棟取運び賃金請取証〕 北秋田村白沢村佐々木助太郎他四人 同村若松久兵衛宛 明治一六年二月一二日

送籍証〔武茂勝十郎・妻ミ子〕 花岡村役場 東大
館町役場宛 明治一六年六月

一通 三六

移住ニ付地券訂正願 東大館町武茂勝十郎 花岡
村戸長代理成田松之助宛 明治一六年六月

一通 三六

知行

〔知行起返証文〕 国安三右衛門他五人 武茂縫殿
之助宛 明和元年二月四日

一通 二七

〔知行所打減高代知出高書留〕 〔文化七年九〕

一枚 二六

〔扇田村上リ地当高取調〕 〔文化八年〕

一通 二六

天保三年辰十一月分限控帳 武茂駿河

半 仮一冊 元

武茂駿河分山本郡扇田村川欠捨り分巻紙写 下
田甚蔵他二人 天保八年四月・六月一五日

一通 二〇

〔御本帳新紙高調〕 〔紙背〕

一枚 二二

龜田郡花岡村御高野帳書拔 天保六年八月〔付札
慶応二年まで〕

半 一冊 二〇

〔肝煎并武茂勝十郎分野帳書拔〕

一枚 二三

○

〔替地上リ地渡寛写〕 〔後欠〕 岸弥惣右衛門宛
〔元禄一三年八月―明和八年七月〕

半 四枚 三

収納

当御物成取立帳 弘化二年一〇月

横長半 一冊 七

御物成取立帳 嘉永三年一〇月〔嘉永二・五―安政
二年共〕

横長半 一冊 八

御物成取立帳 安政四年一二月

横長半 一冊 九

〔御物成取立帳断簡〕

横長半 七枚 二〇

午年差引出覚 清三郎 山口兵部宛 安政五年一
月一六日

一通 二六

〔当収納米代金上納年延一札〕 扇田村与代清三郎
山口兵部宛 慶応元年二月一三日

一通 二七

扇田村清三郎指引帳 山口盛 丑一辰年

横長半 一冊 五

去卯年目録 扇田村清三郎 中田太良蔵宛 辰二月
一七日

一通 二六

給禄・公債

給禄御借渡候分書上 第六大区中第四小区副戸長
島山又右衛門 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年二月

一通 二〇

〔戊辰焼失返米代金書類〕

半 一綴 元

1 兵火焼失ニ付御返米代銀明細取調帳 花
岡村士族武茂勝十郎 明治六年二月

2 戊辰焼失返米代金伺 武茂勝十郎 秋田県
令石田英吉宛 明治八年九月二日

3 兵火焼失ニ付御返米代銀明細取調帳

4 〔給禄借上高之内未御下金無之届書〕 大
館住居士族武茂勝十郎 明治六年四月

5 戊辰焼失返米伺 花岡村士族武茂勝十郎
秋田県權令石田英吉宛 明治八年七月二七日
〔奥書アリ〕

6 戊辰焼失返米伺

7 兵火焼亡ニ付返米代金渡滞御下渡願 武
茂勝十郎 秋田県令石田英吉宛 明治二年
二月一六日

7 兵火焼亡ニ付返米代金渡滞御下渡願 武
茂勝十郎 秋田県令石田英吉宛 明治二年
二月一六日

8 戊辰焼失返米代渡滞金取調書 武茂勝十郎
秋田県令石田英吉宛 明治一二年二月一六日
9 兵火焼失ニ付御返米代銀明細取調帳 武
茂勝十郎 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年四
月

御返し米代残り之分

返米代渡滞金御下渡願ニ付伺 武茂勝十郎 明治
一二年三月二三日

(秋田県士族禄高書類)

1 秋田県士族一季分 禄高受取帳 第六大区第
四小区戸長奥村嘉右衛門他 秋田県令杉孫七
郎宛(武茂勝重郎分)

2 秋田県布告写(士族卒禄高姓名雛形) 日景八
右衛門他宛 明治六年一月・二月五日

3 (士族禄高書上) 武茂勝十郎

4 秋田県布告写(改曆ニ付家禄米壹ヶ月引去)
明治六年二月

5 証書雛形(写) 日景八右衛門宛 明治六年
二月二五日

6 証書写 武茂勝十郎

(士族禄高月割計算書)

(金禄公債証書利子金受取委任状) 武茂勝十郎
明治一二年五月一八日

一通 二七

一通 二七

二綴 三

一枚 二三

一通 二七

金禄公債証書御売上願并出頭延期願 武茂勝十
郎 秋田県令石田英吉代理宛 明治一二年二月二
五日・一三年三月七日

金禄公債証書御買上願ニ付御伺 花岡村武茂勝
十郎 明治一二年二月一六日

地 券

地券 秋田県令国司仙吉 持主花岡村白川与五左衛
門 明治六年八月

地券 秋田県権令石田英吉 持主花岡村山本孫太郎
明治九年一月

地券 秋田県 持主花岡村畠山万吉 明治一二年三
月一〇日・一三年一月一日

租 税

(壬申貢米手形) 花岡村米主藤岡与平次・山本安
九郎 明治五年

明治十五年分第四期田税請求書 北秋田郡花岡村
役場 白川与五左衛門宛 明治一六年二月

(明治十五年度後半季納税請求書) 花岡村役場
白川与五左衛門宛 明治一六年二月

(地租金額取調控) 東大館町役場宛 明治一八年
三月一二日

(武茂勝十郎所有字川中嶋田地反別收穫米地価
金地租金書抜)

(字大森下外田畑反別地価金調)

(大森村成田熊助分田地反別書)

(小林富太郎他地番図)

(田地等級枚数取調)

半

一綴 三

一通 二七

一枚 二五〇

一枚 二五

三枚 二五

七枚 二九

一通 二六

一通 二七

一通 二六

一枚 二五

一枚 二五

一枚 二五

一枚 二六

五枚 二七

横長半

(田地畦畔等改正調費書留) 半 一通 三
 (區費金請取帳) 伍長山本義右衛門 武茂勝重郎 横半 一冊 三
 宛 明治六年—七年

家 計

月並雜用寛帳 嘉永四年一月—二月 横長半 一冊 二
 月並雜用寛帳 嘉永七年一月—安政元年二月 横長半 一冊 三
 月並雜用寛帳 安政四年一月—二月 横長半 一冊 三
 月並雜用寛帳 安政五年一月—二月 横長半 一冊 四
 大福帳 明治四年一月—五年一月 横半 一冊 六
 (金錢出入帳) 明治一九年二月 横長半 一冊 六
 (金錢出納帳) (表紙欠) 横半 一冊 六
 内為替米受取帳 武茂勝十郎 山本久藏宛 明治 横半 一冊 六
 八年二月
 為替米受取方手形渡方当座寛帳 申二月二八日 横半 一冊 六
 一西一月八日
 受払雜用記 明治一〇年六月三〇日 横半 一冊 六
 *馬代金出入帳 武茂氏 明治一二年—一四年 横半 一冊 六
 雜用帖 明治一七年二月八日 横半 一冊 六
 注文物指引帳 武茂 駒吉宛 申二月八日 横半 一冊 六
 米受取帳 花岡村取主和一郎 明治一三年二月— 横半 一冊 六
 一四年五月
 小森村金助指引帳 山口盛 一一月一四日 横半 一冊 六
 広瀬留五郎指引帳 明治六年新三月一日 横半 一冊 六

(武茂鶴千代御貸銀上納証文) 立原源之助他 秋 一通 二四
 田郡綴子村肝煎宛 明治二年二月二七日

(拝借銀寛) 武茂 巳年(明治二年) 横半 一通 二五

(宿繼御用状写・金札持参分) 明治二年二月 横半 一通 二五

(上納懸リ受取証) 一二月二七日(明治二年九) 横半 一通 二五

(現米送証) 武茂勝十郎 根本和一郎宛 三月九日 三通 二五

牛乳預并差引書 牛乳や重出兵吉 武茂勝十郎宛 九月二日 一通 二六

奉願上候件々(久保田へ出立ニ付金子仕送他) 一枚 二六

(諸藥代勘定書) 布袋屋金右衛門 山口宛 未一 一通 二六

(鍋代外勘定書) 大町太助 四月二日 一通 二六

釘渡寛 武茂 大工新三郎宛 一二月九日 一通 二六

(上京旅費滞在費計算書類) 武茂 明治一七年 一通 二六

(勘定書) 加藤屋喜兵衛 安士家米宛 卯五月 一通 二六

(諸領収請求書類) (明治) 一九通 二六

○通帳

酒御通 釈迦内村日景平三郎 姥沢村殿様宛 明治 横半 一冊 二六
 一三年二月
 酒御通 釈迦内村日景熊太郎 殿様宛 明治一四年 横半 一冊 二六
 一月
 酒御通 尺力内村日景熊太郎 姥沢村殿様宛 明治 横半 一冊 二六
 一五年三月一八日
 御通 釈迦内村日景熊太郎 武茂宛 明治一八年二 横半 一冊 二六
 月一日

御通 釈迦内村日景熊太郎・西大館町石田徳右衛門 武茂勝十郎宛 明治一九年四月	郷半半	一冊	三	2 地処売買ニ付地券御裏書願 畠山万吉・武茂勝重郎 北秋田郡長日理宗信宛 明治一六年九月	一点
酒類通帖 石田徳右衛門 武茂宛 明治二〇年三月	横半半	一冊	三	3 改名ニ付地券御訂正願 武茂紀綱 明治二〇年三月	二点
酒御通 酒造改良会社大館支店 武茂宛 明治二二年六月	横半半	一冊	三	4 地券書替手数料明細書 東大館町武茂紀綱 大館町戸長村山茂真宛 明治二〇年三月	一点
御菓子通 伊藤兵吉 山口宛 明治二二年一月	横半半	一冊	三	5 地処売買ニ付地券御裏書願 売渡人武茂勝十郎・買受人高杉八蔵	一点
御菓子通 大館町伊藤兵吉 姥沢村山口宛 明治二四年一月	横半半	一冊	六	6 同右 山本七右衛門・武茂勝十郎 明治一八年二月	一点
御菓子通 大館菓子店伊藤兵吉 姥沢村山口宛 明治一五年五月	横半半	一冊	七	7 同右 成田喜四郎・武茂勝十郎 北秋田郡長日理宗信宛 明治一六年	一点
御菓子通 安士兵作 武茂宛 明治一三年一月	横半半	一冊	六	8 同右下書	一点
御菓子通 安士兵作 武茂宛 明治一四年一月	横半半	一冊	六	9 売買御証券書替証印税上納明細帳 花岡村・武茂勝十郎	一点
染物通 根下戸村田中長文 武茂宛 明治一二年一月	横半半	一冊	六	地処永代売渡証書 花岡村成田熊助 武茂勝十郎宛 明治一五年一月一六日	一通
染もの出入扣 田中長六 明治二〇年	横半半	一冊	七	地処永代売渡証券(写) 花岡村売渡人畠山万吉 武茂勝重郎宛 明治一六年九月	一通
万御通 渡部幸松 武茂勝十郎宛 明治一五年一〇月	横半半	一冊	三	(畑林売渡寛) 明治一八年三月二八日	二枚
金銭 通帳 大町小野長治 長倉町武茂宛 明治二三年一月	横半半	一冊	三	地処永代売渡証券 花岡村畠山徳三郎 武茂勝十郎宛 明治二二年四月二四日	一通
(米通帳) 明治欠年三月	横半半	一冊	三	地処永代売渡証券(写) 持主成田弥惣治	一通
家賃受取通 明治二〇年七月	横半半	一冊	三	地処永代売渡証券(後欠) 持主成田熊助	一通
土地 売買	半	一綴	三	地処永代売渡証券(下書) 持主武茂勝十郎	一通
(地処売買地券書換書類)					
1 売買地券証書御書換願(控) 花岡村売渡人 総代成田与五郎他 買受人武茂勝十郎 秋田 県権令石田英吉宛 明治一〇年二月	一点				一通

地処売買ニ付地券御裏書願 勝重郎 北秋田郡長大野光信宛 明治一六年	一通	三〇三	耕地書入借用金証券(写) 借主藤森与吉郎・同松三郎 明治一〇年十一月二五日	一通	三〇六
田地壳渡証券損傷ニ付書直し願(下書) 東大館町武茂勝十郎 花岡村戸長役場宛 明治一七年四月一日	一通	三〇四	田地書入借用金証券 釈迦内村佐々木仁太郎 明治一四年七月一九日	一通	三〇七
約定証(屋敷買受) 武茂勝十郎 中田敬太郎宛 明治一二年七月二二日	一通	二九四	田地書入借用金証券 持主阿部惣兵衛 明治一四年二月二七日	一通	三〇八
建物買受御届 東大館町武茂勝十郎 同町戸長村山茂真宛 明治一八年二月二八日	一通	二九五	田地書入借用金証券 粕田村阿部藏松 明治一五年一月一六日	一通	三〇九
宅地及建家土蔵永代壳渡証券(雛形)	一通	三〇五	金借用追加地処書入証券 (明治一五年七月)	一通	三〇〇
金融・貸借			金借用地所書入証券(写) 松山弥吉 明治一五年八月二四日	一通	三〇一
貸金出入帳 明治一三年一月	一冊	六	金貨借用地処書入証券(写) 釈迦内村喜三郎 武茂勝十郎宛 明治一五年二月四日	一通	三〇三
大々福德貨殖扣帳 明治一四年五月一五年一〇月	一冊	一五	金貨借用地処書入証券(控) 釈迦内村佐々木松太郎控 武茂勝十郎 明治一五年二月一六日	一通	三〇三
質手形 質屋武茂勝十郎 西大館肴町近藤勇五郎宛 明治二〇年一月九日	一通	三〇九	金貨借用地処書入証券(写) 小松某 武茂勝十郎宛 明治一五年二月一八日	一通	三〇四
質手形 シチャ武茂勝十郎 蟹沢クノ宛 明治二二年九月二八日	一通	三〇〇	金借用地処書入証券(下書) 鈴木某 武茂勝十郎宛 明治二二年一月	一通	三〇五
質手形(断簡)	七通	三〇一	米借用地処書入証券(下書) 花岡村阿部勇吉 武茂勝十郎宛 明治二三年三月二〇日	一通	三〇六
質手形(断簡) 明治二〇年頃	一括	三〇三	金借用証券(下書)(紙背)	一通	三〇六
質手形 穴戸又左衛門 山坂竹松・相沢岩松宛 明治二三年九月二二日・同二〇月二一日	二通	三〇三	地処書入米借用証券 花岡村山本万十郎 武茂勝十郎宛 明治二三年八月二七日	二通	三〇七
質手形(後欠)	一通	三〇四	地処書入借用金証券(下書) 持主成田万蔵・同子之助	一通	三〇八
(佐藤惣市郎分貸付金計算書)	一通	三〇五	金借用建物書入証券(下書) 建木壳渡券(紙背)	一通	三〇九
(貸付金一覽カ)	一通	三〇六			

通札拝借証文 肴町長治 山口宛 文久三年三月二 七日	一通	三三
仮証券 神山村白川与五左衛門・同与蔵 武茂勝重 郎宛 明治一〇年二月八日	一通	三三
仮証券 姥沢村山本丹治・山本嘉吉 武茂勝十郎宛 明治一〇年二月八日	一通	三四
金借用証券 借主主神山村白川万吉 武茂勝重郎宛 明治一〇年三月九日・二〇日	一通	三五
金借用証文 姥沢村山本孫太郎 武茂勝十郎宛 明 治一〇年八月一九日	一通	三六
金借用証券 花岡村借主主安部治兵衛 武茂勝十郎 宛 明治一一年三月二日	一通	三七
預金請取証券 白川与五郎・同与蔵 武茂勝重郎宛 明治一一年一〇月二七日	一通	三八
金借用証券 (下書) 花岡村神山畠山伊助・同米蔵 明治一四年一月三〇日	一通	三九
金借用証券 (下書) 明治一四年四月一〇日	一通	四〇
金借用証券 (下書) 花岡村白川与五左衛門・同米 蔵 明治一五年八月一五日	一通	四一
金借用証券 (下書) 花岡村金借主白川与五左衛門 ・同米吉 明治一五年八月二〇日	一通	四二

金借用証書 (下書) (明治一九年以前)	一通	四三
(借金証) 武茂勝十郎 大茂内村相馬喜右衛門宛 明治一四年二月二六日	一通	四四
金借用証書 武茂勝十郎 中田太良蔵宛 明治一六 年五月一九日	一通	四五
(和合講金預証書) 預主白川与蔵 和合講連中宛 明治八年一月	一通	四六
預金催促之訴 (写) 原告人長崎方蔵・被告人大沢 竹治 秋田県令石田英吉宛 明治八年八月二四日	一通	四七
小 作	一通	四八
小作証券 花岡村畠沢藤五郎 武茂勝十郎宛 明治 一二年一月二日	一通	四九
小作証券 花岡村作子藤森与惣右衛門 武茂勝十郎 宛 明治一二年一月二日	一通	五〇
小作証券 花岡村作子鳥潟半九郎 武茂勝十郎宛 明治一二年一月二日	一通	五一
小作証券 花岡村作子鳥潟半之丞 武茂勝十郎宛 明治一二年一月二日	一通	五二
小作証券 鳥内村成田新三郎 武茂勝十郎宛 明治 一二年一月二日	一通	五三
地所壳渡并小作証券 (下書) 白川与五左衛門 武 茂勝十郎宛 明治一五年二月一五日	一通	五四
田地小作約定証書 (下書) 藤森惣助	一通	五五

雇帳 中村与右衛門宛 明治一四年一月六日—一五年一月二九日	横半半	一冊	七五	当御渡野之節寛日記 武茂縫殿佐 文久元年八月二〇日	横半半	一冊	五
日雇帳 中村与右衛門宛 明治一五年一月一日—一六年一月二三日	横半半	一冊	五	日記〔久保田まで〕 五月六日—六月一日	横半半	一冊	七
約定証券 長面袋村中村与右衛門 武茂勝十郎宛 明治二二年三月二九日	横半半	一通	三四	出果中日記 明治一八年五月二四日—二五日	横半半	一冊	六
手間帳 一〇月一日—三月五日	横半半	一冊	五	(日記断簡)	半	一冊	六
駄賃帳 武茂勝十郎内山口兵部・栗田定右衛門・金田市金兵衛 明治二二年九月	横半半	一冊	七	(日記断簡) 正月元日—四月一七日	半	一冊	六
持馬				(日記断簡) 四月二六日—五月一八日		一枚	二七
*馬代金出入帳 武茂氏 明治二二年—一四年	横半半	一冊	七	(日記断簡) 一月六日—二八日		一枚	二八
持馬壳渡御届 花岡村畠山伊之助 花岡村				書 状			
牝馬分婉御届雛型 役場宛 明治一六年五月		二通	三四	武茂駿河書状(下書) 卯七月三日		一通	二四
馬所有御届(後欠) 東大館町士族所有者武茂勝十郎 明治一八年六月		一通	三六	武茂勝十郎書状(白坂) 俊助宛 一月三日		一通	二五
馬壳渡証券 花岡村阿部佐兵衛 武茂勝十郎宛 明治一九年二月		一通	三七	むもやす書状 中田多良藏宛 六月二五日		一通	二六
(馬代金書) (明治二〇年二月)		一通	三八	飯村直藏・同熊太郎書状 武茂宛 六月二二日		一通	二七
日記				石黒徳治書状 武茂勝十郎宛 一〇月二二日		一通	二八
久保田出府中日記 (武茂) 徳綱 天保一五年五月一七日—九月二二日	横半半	一冊	五	伊藤文左衛門書状 (武茂) 駿河宛 嘉永五年二月五日		一通	二九
出府中日記 嘉永五年二月一七日—一月九日	横半半	一冊	五	岩脇徳英書状 武茂勝十郎宛 一二月一九日		一通	三〇
出仕ニ付久保田江出府中日記 武茂鶴千代維綱 文久元年六月一八日—七月二四日	横半半	一冊	五	宇都宮鶴山(帶刀)書状 武茂縫殿助宛 六月一二日		一通	三一

(宇都宮) 帶刀書狀 (武茂) 駿河宛 嘉永六年九月二〇日	一通	二五	中田太郎藏書狀 姥沢村武茂勝十郎宛 一月三日・四月二七日・六月七日・同一六日	四通	一〇
(岡本) 多司馬書狀 武茂宛 四月一七日	一通	三三	(中田) 太郎藏書狀 (武茂) 縫殿助宛 八月一七日	一通	一八
荻津功吉書狀 (武茂) 駿河宛 安政二年七月一日	一通	二九	成田与五郎書狀 武茂宛 四月二八日	一通	一八
荻津公吉書狀 武茂宛 一二月二〇日	一通	二九	成田与五郎書狀 家来宛 一月一四日	一通	一八
(小貫) 佐渡書狀 (武茂) 駿河宛 嘉永五年一月二二日	一通	三〇	根本三郎右衛門書狀 七月五日 武茂縫殿助宛	一通	一八
(小貫) 佐渡書狀 (武茂) 駿河宛 嘉永七年三月二四日	一通	三二	秦鉄治書狀 武茂宛 九月二五日	一通	一八
川瀬某書狀 山口宛 一二月二八日	一通	二六	畠沢専太郎書狀 武茂勝十郎宛 四月二七日	一通	一八
佐野五郎古書狀 (武茂) 勝重郎宛 一月七日・同一〇日・八月九日・同一四日	四通	二七	藤森又右衛門書狀 西二月一四日・二月二二日	二通	一八
宍戸又左衛門書狀 武茂勝十郎宛 四月三日・一月二六日	二通	二七	藤森又右衛門書狀 武茂宛 二月二八日・三月一日	四通	一八
宍戸又左衛門・同矢四郎書狀 別紙添 殿様 (武茂) 宛 一二月二一日	一通	二七	(古内) 主典書狀 天保二年八月二二日	一通	一八
宍戸又左衛門・同百助書狀 武茂勝十郎宛 一月五日	一通	二七	(古内) 主典書狀 (武茂) 駿河宛 一月二六日	一通	一八
(六戸) 矢四郎書狀 武茂宛 一二月二八日	一通	二七	古内武雄書狀 武茂勝十郎宛 五月二三日	一通	一八
神山村白川与五左衛門書狀 武茂勝重郎宛 旧一二月一六日	一通	二五	松茂右衛門書狀 (武茂) 駿河宛 八月一〇日	一通	一八
白坂敬左衛門書狀 三ノ丸 (武茂) 宛 二月三日	一通	二六	村井久右衛門書狀 (前欠) 山口兵部宛 一二月一日	一通	一八
白坂俊助書狀 武茂勝十郎宛 二六日	一通	二七	栄治書狀 武茂宛 一月二四日	一通	一八
関口武左衛門書狀 武茂家来宛 七月八日	一通	二六	永太郎書狀 一〇月一九日他	二通	一八
			久書狀・武茂宛 閏七月一四日	一通	一八
			久藏書狀 (武茂) 勝十郎宛	一通	一八
			慶之助書狀 山口取次 七月一八日	一通	一八
			慶之助書狀 山口宛 一二月二五日	一通	一八

源五左衛門書狀 九月一九日	一通	二〇四	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 五月二二日	一通	二〇四
源三郎書狀 三ノ丸(武茂)宛 九月二〇日	一通	二〇五	某書狀〔蟹沢公部家作〕 五月二四日	一通	二〇五
源七郎書狀 (武茂)駿河宛 弘化二年二月二八日	一通	二〇三	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 五月二八日	一通	二〇六
此松書狀 武茂宛 四月九日	一通	二〇六	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 六月五日	一通	二〇七
駒沢書狀 (古内)主典・(武茂)駿河宛 一月二八日	一通	二〇七	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 六月二二日	一通	二〇八
扇田村五助書狀 山口兵部宛 天保一〇年二月	一通	二〇六	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 六月二〇日	一通	二〇九
左惣治・茂右衛門書狀 一月二六日	一通	二〇九	蟹沢兵部書狀 前駒治宛 六月二八日	一通	二一〇
三郎右衛門書狀 武茂宛 一月二五日	一通	二三三	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月三日	一通	二一一
助吉書狀 二月二五日	一通	二三三	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月八日	一通	二一二
介吉書狀 一月二九日	一通	二三四	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一三
寸記書狀 (武茂)駿河宛 一〇月一六日	一通	二三五	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一四
精一郎書狀 兄宛 一〇月二七日	一通	二三六	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一五
山本郡扇田村肝煎清三郎書狀 武茂駿河内山口兵部宛 一〇月二一日	一通	二三七	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一六
政斌書狀 伯父宛 七月五日	一通	二三八	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一七
泰雅書狀 伯父宛 一〇月七日	一通	二三九	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一八
大作書狀 長倉町(武茂)宛 一〇月二二日	一通	二三〇	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二一九
貴嗣書狀 (武茂)勝十郎宛 四月二二日	一通	二三三	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二二〇
和一郎書狀 伯父宛 四月一〇日・六月三日・二月二六日他	四通	二三三	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二二一
某書狀(前欠) 山口兵部宛 一月二四日	一通	二三七	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二二二
佐々木主和書狀 筆録又右衛門宛 二月八日	一通	二七	蟹沢兵部書狀 古内主典・武茂駿河・前駒治宛 一〇月一八日	一通	二二三

○大徳院一件

清浮書狀 (武茂)駿河内宛 八月二二日(嘉永四年)	一通	二三四
隣正院書狀 武茂駿河家来宛 嘉永四年八月二五日	一通	二三五

大川六郎右衛門書狀 (武茂) 駿河宛 嘉永四年一〇月二日	一通	三六
隣正院書狀 (武茂) 駿河宛 一〇月一日 (嘉永四年)	一通	三七
清浮書狀 一〇月二日 (嘉永四年)	一通	三八
大德院書狀 嘉永四年一〇月二七日	一通	三九
鷹巢村肝煎成田庫之助書狀 山口兵部宛 嘉永四年一月九日	一通	四〇
大德院書狀 嘉永四年一月二五日	一通	四一
荻津功吉書狀 武茂宛 嘉永四年一月一六日	一通	四二
隣正院清浮書狀 武茂駿河家宛 嘉永四年一月二三日	一通	四三
宗福寺和尚書狀 武茂家宛 一二月六日 (嘉永四年)	一通	四四
津村彦左衛門書狀 山口兵部宛 嘉永四年一二月八日	一通	四五
伊藤文左衛門書狀 (武茂) 駿河宛 嘉永四年一二月二四日	一通	四六
大德院書狀 山口兵部宛 嘉永五年一月五日	一通	四七
大德院書狀 山口兵部宛 四月二七日	一通	四八
書狀 (下書) 隣正院宛 亥一〇月七日・一四日他 (嘉永四年)	四通	四九
書狀 (下書) 黒沢宛 亥七月二三日 (嘉永四年)	一通	五〇
書狀 (下書) 小貫佐渡宛 亥一〇月七日・一一月二〇日 (嘉永四年)	二通	五一

山口書狀 (下書) 胎輪寺・竜光院・長雄院宛	一通	五二
武茂三郎内西山林藏書狀包紙 大館三ノ丸武茂駿河内山口兵部宛	一枚	五三
工藤伝兵衛・松浦甚五左衛門・西館織部書狀 雨森權八他三人宛	一通	五七
(穴戸) 又左衛門書狀 お峰宛 一〇月二七日・一月二日	二通	五八
山内八郎右衛門書狀 国松宛 五月七日	一通	五九
某書狀 嘉永五年一月一九日	一通	六〇
某書狀 二月一日	一通	六一
某書狀 三月一三日	一通	六二
某書狀 尚々書付 一日	一通	六三
某書狀 八月一九日	一通	六四
某書狀	一通	六五
書狀 (下書)	一通	六六

学 芸

礼 式

武茂分流家古例式 富綱	半	一冊	六
庶士昏礼式 多田維則纂・野田德勝跋 元文元年一月 (寛政二年四月二七日写)	半	一冊	六
春秋二祭問目 實作貞固問・多田維則批 元文二年一月 (寛政二年四月二七日写)	半	一冊	六

(礼法書)		半	一冊	三六
葬礼之卷(写) 上・中・下		横半半	一冊	一〇三
秘 伝				
(当流入門起請文) 大沢主水・古内小伝次 武茂 駿河宛 嘉永元年五月三日			一通	三六
懷 家相方位秘伝 牡丹舎白蔵 文化二年八月			四枚	三六
諸法秘伝之伝 未見堂知遠 文政年間		横半半	一冊	一〇三
墨色占法秘伝(写) 全		横半半	一冊	一〇四
炮術執行形大旨(写)			一通	三六
(算法秘伝并問答書)			四枚	三〇
試金法			一枚	三六
(阿蘭陀漆製法)			一枚	三六
チャン色ヌリ之法			一枚	三六
(卜占書)〔午年一―六月分〕			一通	三六
はしかまじない 文久二年七月			一枚	三六
信 仰				
諸神拝記 藤原孟綱 明治五年		横半三半	一冊	六
濟神等 明治六年		横半半	一冊	七
(礼拝記) 武茂勝重郎維綱 明治二年六月一〇日		横半半	一冊	六
聖天尊礼拝記 明治一四年分		横半半	一冊	九
聖天尊礼拝記 丑旧九月六日(明治一〇年九)		横半半	一冊	一〇
神拝記 武茂勝十郎藤原維綱		横半半	一冊	一〇二
仏垂般涅槃畧説教誡經写			一枚	三五
(宮社平面図・立面図)				
武者帶(写) (永田某)		半	一冊	四〇
三楠実録序他 自作詩集 富之 甲子 (史書抄録)		半	一冊	四
都免留古哥志 天保三年一〇月		半半	一冊	四
算法要文集(写) 中		半半	一冊	四
薬名和名抄 武茂氏 安政二年七月		袖珍	一冊	四
春遊興(写) 全 釈大我詩 明和四年二月		横半半	一冊	一五
こどぶき		横半半	一冊	一六
藤井高尚消息文例序文跋文(写) 本居宣長 鳥越 常成 寛政二年九月二日			一枚	四六
増補華夷通商考之内中華十五省 十五省土産 元文二年六月一〇日写			二卷	三九
(短冊雛形)			一枚	三〇
(横詠草雛形)			一枚	三〇
(和歌問合)			二枚	三三

(詠草五首)	一枚	三三	(天忠組浪士諸藩出陣図)	一枚	三六
(詠草)	一卷	三〇四	(異舟松前箱館上陸聞書)	一枚	三六
(俳句) 一瓢生五陵	一枚	三三	京都落書笑ひ言葉	一通	三六
謹考韻鏡歸納例 法印徳英 武茂綱嘉宛 文久元年一月	一通	三七	加賀や家内相統之大凡	一通	二九
(諸葉処方効能)	一枚	三三	その他		
(野菜鳥獸肉効能)	一枚	三三	出泉御届(写) 北秋田郡下川治村石川巳之助 同役場宛 明治二三年一月二日	一通	三六
正月二日賀文	一枚	三六	御免天竜水火消道具引札 大坂あはざ戸屋町三丁目井上利兵衛	一枚	四〇
エトノ見様	一枚	三九	(大坂城周辺略図)	一枚	四〇
干支之起リ	一枚	三〇	(大坂附近地名)	一枚	四〇
(係り結び表)	一枚	三二	(大坂略絵図)	一枚	四二
(武士道意見書写) 角間川文六	一通	三三	(一の谷合戦旧跡絵図) (後欠)	一卷	四三
(学問考)	一通	三三	城郭図 (武茂) 富綱 天保五年六月	一枚	四三
(仏語解)	一枚	三九	(断簡)	一四枚	四二〇
憎啞賊来寇詩 清淳	一通	三六			
上杉家之次第写 戸祭氏	一通	三七			
拔書覚〔武将後胤・義経軍功記東鑑拔書〕 戸祭氏	一通	三六			
慶長軍記之内拔書	一卷	三九			
童蒙必読漢語図解 式輯(封筒) 弄月亭編集・一蕙斎 画図 東京文玉堂・文鱗堂	一枚	四〇			
(漢字音訓写)	一三枚	四七			

風 聞

出羽国秋田郡十二所
家佐竹
家中家
岡本家文書目録

出羽国秋田郡十二所佐竹家
中家岡本家文書目録目次

勤 役	頁
佐竹家、法制、境目、戊辰戦争、家 禄・賞典禄、副戸長書類、その他	五
岡 本 家	五
家政、日記・記録	
書 籍	五
秘伝書、その他	

出羽国秋田郡十二所家

佐竹家
中家

岡本家文書目録

(文書記号24-1)

勤 役

佐 竹 家

佐竹氏御系図	文政五年八月岡本時任求之	半	一冊	弍
日光御社参ニ付宇都宮城御泊之節勤方留	坂元	美	一冊	六
九良治左衛門・岡九郎左衛門書	享保一三年四月一五日			
御当家御先代ヨリ御法名御忌日	(文化一二年以降)	半	一冊	七
御一族御証文	岡本時任 文政五年八月久府求之	半	一冊	六
御渡野書録	藤村氏藤原寿貞 天保二年七月	半	一冊	三
御渡野御案内勤録	岡本氏(時敏) 文久元年八月二二日―慶応二年四月	横半半	一冊	一三
京都〆秋田迄御下向道程記	丑二月一七日―寅一月二二日(慶応元年―二年九)	横半半	一冊	一三
拝見之御書附写	佐竹中将 太政官宛 明治二年三月 久保田藩知事 太政官宛 同六月	横半半	一冊	一六
秋田国事要略年表	(慶長元年―寛延元年) 文化元年八月 岡本氏	半	一冊	七
羽州綴編記	岡本氏時武 享保四年二月	半	一冊	一六

龜田御家老記(後欠)	吉亮 宝暦二年一〇月写	半	一冊	三
岡本内記時叙天神林源内	〆文化五年受			
久保田名附帳	寛政四年二月三日	横半半	一冊	一七

羽羽秋田高村附帳	領地目録写・御領内道法駄賃御定共	半	一冊	一四
文政二年八月二三日				

旧藩久保田市街全図	秋田県庁蔵 (四分劃)	22x22 22x22 22x22 22x22 22x22 22x22	四鋪	一八
-----------	-------------	--	----	----

(御国御目附衆御下向ニ付雜録)	卯二月一巳	半	一冊	元
一月(文政二年―四年)				

法 制

御評定所江被仰出候由御書附之写	評定所一座 奉行宛 正徳二年九月 塩谷康綱手跡・岡本時方	半	一冊	一
被仰渡御書附覚	岡本時備 享保一二年七月―天明四年二月	半	一冊	二

御定書之内拔書(写)	岡本采女時叙写	半	一冊	三
御檢地役品々格式帳(写)	享保一二年閏一月 檢地役御用定(写) 享保一二年六月八日	半	一冊	四

上意御条目写	(佐竹義敬) 明和元年十一月二三日	半	一冊	五
被仰渡帳	明和三年(元禄九年・一三年・明和三年)	半	一冊	六
被仰出御書附覚	岡本時備 天明四年二月―五年六月一八日	半	一冊	六

元文宝曆明和安永天明寛政右年号混雜被仰渡御書附 岡本氏時備	半	一冊	七	御境目方御用覚書 元文五年一月—明和三年	袖珍	一冊	三〇
寛政三亥五月、同七年卯十月迄被仰渡印 岡本時備	半	一冊	八	御境目古來覚書 岡本内記時方 右京大夫源義宣公御一代記〔文禄四年—万治元年〕	半	一冊	五
寛政七卯九月、享保文化三寅ノ二月迄被仰渡記岡本主銘時備	半	一冊	九	昔語〔十二所境論行賞義重公義宣公之御事聞き書〕 天明五年二月	半	一冊	六
遺跡定 (寛政八年九)	半	一冊	三	十二処扱御境道程記 外諸方里程共 (時) 敏 〔文久二年以後〕	横半	一冊	三
御条目並執達 元治元年 元治元年七月、中京都大變出火ノ次第 同月廿一日申参候書状写 七月中御上使へ御返翰写	半	一冊	四	下範封疆道程 (御境目諸事留)	横半 横半 横半	一冊 一冊 一冊	三 三 三
(徳川慶喜追討令達写) 佐竹右京大夫宛 一月 (慶応四年)	半	一冊	五	(秋田領絵図) 享保一四年改	47×45	一冊	七
太政官 藩公令達扣 慶応四年一月—二月 其他	横半	一冊	一七	(南部領絵図)	72×36	一冊	五
境 目				(奥北浦南部御境目絵図)	46×24	一冊	二
(御境目之儀ニ付ケ条書写) 延宝二年五月二八日	半	一冊	二〇	(南部鹿角郡絵図)	39×29	一枚	七
十二所御境目御論所抛人百姓共検使指添為見申帳 岡本内左衛門時芳 延宝二年九月一〇日—三年四月	半	一冊	二	(御境目絵図)	45×23	一冊	二
御境目御論地万日帳之覚 岡本内左衛門時芳 延宝三年四月—二月	半	一冊	三	(矢立峠境口番所絵図)		一冊	二
御境目御論地万日帳 岡本内左衛門時芳 延宝四年一月—四月	半	一冊	三	戊辰戦争		一冊	二
御境目落居被仰付候覚書(写) 延宝五年五月—九月—六月—〇日 (元禄五年—二月窪田成田兵藏、借用六年三月写)	半	一冊	四	日知録 時敏 慶応四年一月—明治二年二月	横半	一冊	二
				陣中日知録(時敏) 明治二年一月—二四日 從四位様御巡覽略記付録 明治二年七月—一〇月 四日	横半 横半	一冊 一冊	二 二
				(南部向探索方抛人願書下書) 沼尻村抛人三郎治 他 明治二年九月—四年—二月	半 横長半	一綴 一冊	七 三
				軍功御賞御書附写 明治二年二月	半	一冊	六

軍功書出扣 杉山巖 午一〇月(明治三年)
東北御進軍名前附

家禄・賞典禄

新旧公債証書条例(写) 大館出張所
金札引換証書条例(写) 明治六年五月一二日
地券渡方則(写)

秋田県第六大区中第九小区土族分限帖(写)
戸長大島源治 明治五年一〇月(一一月)

秋田県第六大区中第九小区土族軍功賞典高取調帖
戸長大島源治 明治五年一〇月

(元第六大区土族現米給禄米賞典米請取帳)

1 元第六大区八小区土族二月渡給禄米受取帳
戸長麓長治 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年二月

2 元第六大区八小区土族二月渡賞典米請取帳
戸長麓長治 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年二月

3 元第六大区八小区土族五月渡現米請取帳
戸長麓長治 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年五月

4 元第六大区八小区土族五月八月渡給禄請取帳
戸長麓長治 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年五月

5 元第六大区八小区土族五月八月渡賞典米請取帳
戸長麓長治 秋田県令杉孫七郎宛 明治六年五月

6 元第二大区五小区土族八月渡現米受取帳
戸長麓長治 秋田県令国司仙吉宛 明治六年八月

秋田県土族当二月渡一季分軍功賞典現米請取帖扣(新土族)
戸長大嶋源治 秋田県令杉孫七郎他宛 明治六年二月

秋田県土族当五月八月渡兩季分軍功賞典現米請取帖扣(新土族)
戸長大嶋源治 秋田県令杉孫七郎他宛 明治六年五月

印鑑帳并改判取調 秋田県令杉孫七郎他宛 明治六年五月

給禄取調帳 第二大区五小区十二宛扣
戸数取調帳 明治六年九月

第二大区六小区土族二月渡賞典米受取帳 副区
長大嶋源治 秋田県權令国司仙吉宛 明治六年九月

第二大区六小区土族卒二月渡給禄米受取帳 副
区长大嶋源治 秋田県權令国司仙吉宛 明治六年九月

第二大区六小区土族卒二月渡給禄米受取帳 副
区长大嶋源治 秋田県權令国司仙吉宛 明治六年九月

第二大区六小区土族五月八月渡賞典米受取帳
副区长大嶋源治 秋田県令国司仙吉宛 明治六年九月

第二大区六小区土族卒五月八月渡給禄米受取帳
副区长大嶋源治 秋田県權令国司仙吉宛 明治六年九月

第二大区六小区土族卒五月渡現米受取帳 副区
長大嶋源治 秋田県權令国司仙吉宛 明治六年九月

秋田県第二大区六小区土族明治七年分賞典禄石代金請取証書
佐竹義脩家扶宛 明治八年三月

秋田県第二大区六小区土族并元卒家禄税上納帳
明治八年三月

秋田県第二大区六小区土族当十二月渡家禄金ノ
内三分ノ一金請取帳扣 副区長麓長治・副戸長富
田九兵衛 秋田県令石田英吉宛 明治八年十二月
(賞典高現米人別書留)

副戸長書類

改定律例 司法省 明治六年五月 美 板一冊 一〇三

第二大区高戸数人員取調・鹿角郡支村明細・屋
敷割算術 明治六年九月 横半 一冊 一五

袖廼内 明治六年十二月改 横半 一冊 一六

勤務中漫録 明治八年一月 横半 一冊 一六

第二大区各小区改正反別録 明治一二年二月
付管内改正反別総計外雜記 横半 一冊 一六

官途緊用 (時) 敏 明治一六年一八年八月 横半 一冊 一六

北秋田郡地租金調 (時) 敏 明治一七年 横半 一冊 一六

東館村地価金調 明治一七年(内題) 管理内雜誌 横半 一冊 一六

東館村誌資料 明治一七―一八年 横半 一冊 一六

本県甲号達摘要 明治一八―二四年 横半 一冊 一六

地価盛渡帳 秦依桑 明治一九年 袖珍 一冊 一六

秋田県第二大区六小区羽後国秋田郡十二処元館
町地引図面 戸長塩谷彦五郎他二人 27×83 一冊 一六

三等才川通中野村本田堰根ヨリ扇田村市左衛門
堰根迄実查略絵図 明治八年八月五日 27×158 一冊 一六

その他

撰劔大坂今福表御合戦之時騎馬御供帳 慶長一
七年一月七日 横半 一冊 一六

付松前(御加勢御用 杉山久藏・同菊之助(寛
文九年八月八日)

慶長十九甲寅年大坂御陣御供覚 横長半 一冊 一〇三
慶長廿乙卯歳大坂御陣一騎償一騎御人数覚
曲田中山村古開新開野帳写 杉山平治右衛門・同
健治宛 延享五年五月晦日 半 一冊 一〇

太田次太夫所存趣申上候扣写 寛延二年一〇月 半 一冊 一〇

天神林由緒帳写 高根越前守信秀 秋田家中天神
林内蔵宛 巳三月(文化三年八月二八日・同二年
二月写) 半 一冊 一〇

道中記(蝦夷地マシケ) 佐藤信量 安政五年五月
一五日―六月 横半 一冊 一〇

松前増慶ヨリ中通り秋田大館迄道中 佐藤信量
安政五年八月 横半 一冊 一〇

(小又川関絵図) 明和八年六月二九日 横半 一冊 一〇

(猿田沢試掘願書絵図) 十二処町願人田村甚吉
明治二四年九月一四日 横半 一冊 一〇

岡 本 家

知 行

知行高取立帳 明治元年一〇月
 (知行高取立帳) (明治二年九)

知行高記録 (杉山久藏分力) 天保七年五月—明治四年八月

家 政

貨殖録 時敏撰 安政五年十二月—慶応二年二月

思義集 (時敏) 慶応二年冬改

無尽蔵手扣 慶応三年冬

思義録 明治六年一月改

出納簿手扣 明治一七年

漆紀事 岡本 (時説他) 明治二年六月—一〇月

日記・記録

古来の之日帳 (慶長七年—延宝四年六月一日)
 岡本門左衛門時芳 延宝七年九月

万日帳 岡本門左衛門 延宝八年一月一日—二月

随筆録 時叙 (文政一三年)

袖日記 一 秋田南部領境論概略・十二所慶長以後之支配役 天保七年 横半半 一冊 二三

(袖日記 二) 慶応三年 横半半 一冊 二三

温故温録 (袖日記 三) (御境論争記録) (元文六年二月—) 横半半 一冊 二四

袖日記 四 六月—十二月 (明治一六年) 横半半 一冊 二五

付明治十七年度村費支出予算議案 漫録 時敏 万延元年五月 横半半 一冊 二六

随筆録 子修 (時叙) 慶応元年閏五月写 横半半 一冊 二九

日新紀吏 明治一一年一月一日—四月一七日 半 一冊 三

随意慢録 (時) 敏 明治二年一月—六月 半 一冊 三

(日記) 一月一日—二月三十一日 (明治三六年) 横半半 一冊 三四

遺拾雜誌 甲 半 一冊 元

1 長州討合聞書 行齋写 慶応二年七月二五日

2 官許横浜毎日新聞 七二八号 (井上馨殿沢米一殿の被差出候奏議の写) 明治六年五月八日

3 新聞雜誌附録 一〇六号 明治六年六月

4 日新真事誌 五二号 明治六年七月四日

5 郵便規則及罰則拔書

6 伐採税則

7 (満年令早見表)

8 (蝦夷地自今北海道ト被称布告書写) 明治二年八月一五日

- 9 (戸長給料旅費滞在日当更正布達写)
秋田県令石田英吉 明治一四年五月一二日
- 10 改宗之儀ニ付伺 戸長泉剛助 権令石田英吉代理宛 明治一〇年一二月
- 11 (輕井沢村外三ヶ村戸数人員地価地租等一覽表) 明治二二年一月
- 12 戸籍上記載之儀ニ付伺・県庁戸籍係堀江利加巡回之儀差図 明治一〇年一〇月
- 13 松前夷蜂起ニ付御加勢并行列役諸事作法書 寛文九年八月八日(宝曆二年天神林源藏写)
- 14 清水民部大輔公随從仏蘭西国江罷越候木村宗三差越之書狀数通之写 慶応三年一月一五日―五月一四日
- 15 鎮祭詔写・宣布大教詔写・宣教長官宣命写
- 16 (十二所塩谷山長興寺明細書上)
- 17 新聞雜誌 三七号附録〔福沢諭吉建白書他〕 明治五年六月
- 18 (御巡幸ニ付御休泊割布達) 秋田県令石田英吉 明治一四年七月二七日
- 袖廻内漫録 甲
- 1 百工新書(写) 清風閣主人 明治四年八月
- 2 (楮栽培法)(板) 芳賀光起 文政三年六月
- 3 博覧会賞牌褒状授与人名録
- 4 (藍培養法)
- 5 苗代粃蒔日頃・田植日頃 明治一〇年七月

半 一綴 二〇

- 6 中村氏口達
- 7 稻種蒔并植栽時季他(中村直三持参ヨリ写取)
- 8 菓物糖藏篇(写) 田原陶猗著・若林高孝校正
- 9 凍蕎麦製法
- 10 落摺
- 11 芦栗製法
- 12 秋田県勸業義会採録 一―四号 明治二〇年六月二六日―八月三十一日
- 13 二月十六日午后二時二十分下眼窩神經ノ截断術式 岡本大作
- 袖廻内 甲号
- 1 日本法建雜誌 一号 日本法律雜誌社 明治一九年二月二五日
- 2 現行日本類典(出版新報号外) 市岡正一編 博文本社 明治一八年十一月一八日
- 3 鼈頭実用適論衛生規則全書等広告 中央書館 明治一九年二月二五日
- 4 真契社規則 明治一三年九月
- 5 秋田旧藩人ニ告ルノ文 佐竹義生 明治一八年
- 6 改良粃摺臼器械広告 明治一八年二月
- 7 貸本社創立広告 伊藤源吉 明治一四年一月
- 8 類聚官報外広告 博聞社(明治一八年)

半半 一綴 二五

9 現行公布全書廣告 啓文社出版局 明治一八年一〇月

10 牡丹社紀行

11 官民必携租税提要廣告 博聞本社 明治一八年三月

12 救療計算書 博愛社 明治一一年一〇月

13 教導團教則表

14 戸籍に係る異動屈心得 明治一一年一月二十九日

岡本大作容体書并副書 吉田梅庵 病者岡本大作誌(明治八年)二月

諸願書附御例拔書 子修 [文化九年四月—安政三年一月]

塩谷公へ往役録 岡本氏 卯一〇月二〇日(安政二年九)一—文久二年八月一三日

塩谷公江披露狀鑑

南部鹿角郡由来記 享保九年一月写

秋田郡両比内史 安政四年調(昭和六年謄写共)

東邑記 [葛原沢尻別所由来控] [貞享—嘉永五年]

南邑録 (文化五年以降)

書籍

秘伝書

武教全書 三・九

軍礼 第一 征討 第五 書札 不識院權大僧都大阿闍梨謙信

場口伝講義再伝 享保一四年四月一日久府宗英先生写 寛保三年八月一六日岡本内左衛門時敷写

旗口伝講義再伝 享保一四年四月一日久府宗英先生写 寛保三年八月一三日岡本内左衛門時敷写

大秘書(場口伝三十八ヶ条・旗口伝二十七ヶ条) 岡本内左衛門写 延享二年七月

兵法雄鑑鈔(写) 卷第一—二・卷第三—七・卷第八—一二・卷第三四—五二 (北条氏長) (正保二年)

微妙至善目錄

微妙至善講義再伝 享保一八年三月一五日於久保田宗英先生 寛保三年八月八日岡本内左衛門時敷写

雄鑑講義 三 岡本内左衛門 寛保三年七月

武門要鑑抄 卷二一

安永森境邪正録(写) 卷二—四

軍法極意講義

五敵口伝覚之秘書

半 二冊 五

半 二冊 六

半 一冊 六

半 一冊 三

半 一冊 三

半 四冊 四

半 一冊 四

半 一冊 六

半 一冊 七

半 一冊 六

半 三冊 九

半 一冊 七

半 一冊 七

三全流秘伝之卷	半	一冊	三
日本伝正徳流武門案内	半	一冊	三
一騎主用 全	半	一冊	三
異国陳制旧法十七図	半	一冊	三
軍中之卷	半	一冊	三
極術軍中之卷	半	一冊	三
要門制条鑑	半	一冊	三
(築城秘伝) (前後欠)	半	一冊	三
(兵法秘伝書) (前後欠)	半	一冊	三
柳生流覚書	横長半	一冊	二〇
五十キ人スワリ	横長半	一冊	二〇
炬秘術之方	横美半	一冊	二五
利体流路地形一流秘伝	横半半	一冊	二五
修羅前大畧(鉄砲秘伝)	半	一冊	二五
衛門 秦久米之承宛	半	一冊	二五
(鉄砲口伝書) (前後欠)	半	一冊	二五
聞書秘伝抄ヲ拔書	横長美	一冊	二〇
錦囊秘伝抄	横長美	一冊	二〇
諸事秘伝書	横長美	一冊	二〇
花火薬法極秘伝	横半三半	一冊	二五
(諸薬製法)	横半三半	一冊	二五
肱満具良控(薬製法)	横半半	一冊	二五
筒井家伝薬法秘伝書	横半半	一冊	二五
器工伝受抄	横半半	一冊	二五
妙薬重宝抄	横半半	一冊	二五
雷粉製法・コートシユル製法	半半	一冊	二五
老蟻集	半	一冊	二五
檢地秘法之次第	半	一冊	二五
ケンチ秘書	横美半	一冊	二五
(茶ノ培養法)	横半半	一冊	二五
養蚕手引草	半半	一冊	二五
(諸国古太刀秘伝写)	半	一冊	二五
婦人九惡極秘伝	半	一冊	二五
(男女人相図)	半	一冊	二五
(諸秘伝書)	半	一冊	二五
(神道等伝書目錄)	半	一冊	二五

その他

古人夜話集〔佐竹歷代逸話集〕	半	一冊	八
外宮正殿御神宝〔写〕全 慶安二年	半	一冊	八三
〔諸家刀脇差目録〕〔前欠カ〕 邑治 延宝九年九月二十四日	半	一冊	八四
〔諸国鍛冶之系図写〕	半	一冊	八五
新刀銘尺続集〔写〕 宝曆二年三月	横半半	一冊	一五三
当家御式法大概〔上杉氏〕 加治七郎兵衛 沢崎内匠宛 正保三年十一月二日	半	一冊	九
杉山氏家例式 藤原氏 安永六年十一月五日	半	一冊	九二
伊達武鑑並寺院 文政九年四月下旬	横半半	一冊	一六九
雜問答考 加茂真淵撰	半	一冊	九三
享寛遺事 岡本時叙 文政三年二月写	半	一冊	九四
敵討名残広記 卷之貳	半	一冊	一〇一
〔常州旅行記写〕 中村与助光得 元禄一〇年三月八日―一四日	半	一冊	一五
茶園栽培附製茶略説〔写〕 印幡県下中山元成撰 明治二六年五月	横長半	一冊	一二
細工物聞書覚	横半半	一冊	一四
常陸国小田城址図	92×80	一枚	一五
〔陣立絵図〕	92×80	一鋪	一八六
庭訓往来 寛文元年六月	半	板一冊	七

女大学 貝原益軒 大坂心斎橋通河内屋平七	半	板一冊	九
女大学〔写〕	半	一冊	九
文鴻商売往来 文溪堂・文鴻堂合梓 安政新彫	半	板一冊	一〇〇
当時一筆啓上 中村翠雲堂筆 松栄堂山城屋平助	半半	板一冊	一七二

出羽国久保田佐竹家中 小貫家文書目録解題

文書の伝来と特色

本文書は、昭和二十五年に原蔵者の秋田県秋田市手形新町四番地故小貫太郎氏から当館が直接に譲渡を受けたものである。なお

現当主は長男瑞夫氏（東京都中野区白鷺二丁目一三番白鷺ハイム一六〇五号）である。

文書の性格と特色

小貫家は秋田藩（出羽国久保田佐竹家二〇万五八八石）の家中であり、本目録に収録した他の武茂家文書・岡本家文書とともに数少ない秋田藩家臣史料の一つである。総量八一九点多いとはいえず、時期的にも宝暦以降なканずく天保期以降明治期に至るものであるが、小貫家が任ぜられた各役職勤役中において作成・授受・記録した多方面にわたる史料を含んでいるところに大きな特色がある。ことに院内銀山・阿仁銅山や土崎湊役所などに詰合中の鉱山支配や流通統制の史料、藩政末期に任ぜられた郡奉行ないしその下役としての史料などは比較的纏っており、秋田藩藩政史のみならず、近世の鉱山・流通等の研究にとっても有用な史料といえよう。

なお当史料館には秋田郡大葛金山おおくそ支配人荒谷家文書（『史料館所蔵史料目録』第十八集収録）が所蔵されており、荒谷家が大葛金山以外にも院内銀山など多くの鉱山を請山していることから、本文書と併せて利用されることによって秋田鉱山史の理解が深められることを指摘しておきたい。

秋田藩と小貫家の概略

秋田藩の概要

秋田藩の成立は関が原戦後の慶長七年に常陸・陸奥・下野三か国で五万石余を領有した水戸城主佐竹義宣が、出羽国秋田（河辺・秋田・桧山）・仙北（雄勝・平鹿・山本）六郡に封ぜられた時に始まる。この国替の原因は義宣が関が原戦に中立的立場を保ったためといわれている。徳川家康の義宣宛知行朱印状には石高が明示されておらず、六郡高二十万石、慶長十一年に加増された下野国河内・都賀郡内五八一八石、都合二〇万五八一八石の判物を初めて交付されたのは二代義隆の時寛文四年四月であった。

旧領主秋田氏の故城土崎の湊城に入った義宣は、一部の家臣を地方に分散駐屯させ、翌年久保田神明山に築城をし、九年新城に移った。国替の前後に常陸の一門・宿老・旗本らが家族・家来を従えて下り、因縁の深い寺社・商人・手工業者も移住してきた。本目録の三家も佐竹氏の秋田遷封に伴い常陸から移ってきた佐竹家家中である。うち小貫家は仙北郡六郷に移住したがのち久保田へ遷ったのであり、寛永初期までに整備された北東手形地域の外曲輪に居住した。

義宣は城下町建設のほか、領内銀山・阿仁銅山等の鉱山開発や、家臣団編成に意を用い、藩の基礎を築いた。藩では所領の一部を家臣らに知行地として分け与え、その支配権を認めるとともに、軍役を分担させた。知行地を持つ者を地頭といい、地方知行形態は幕末まで維持された。藩は国替による減祿を補うために新田開発を進め、指紙を得て開いた新田を知行地に加えることを認めたが、指紙開は給地（地頭知行地）を増加させたものの、蔵分（直轄地）の増加には繋がらなかった。秋田藩の場合、知行地は恩給地だけでなく、開発地主としての伝統的私有地の傾向をもっていた。そこで寛文期ごろから指紙開を停止し、新田開発のうち三分の二を蔵分として召し上げ、三分の一を辛労免として給付する注進開に変え、地頭の地方支配への介入を弱める必要から、知行地の割替を行って藩権力の農村への滲透をはかったが、給人知行地の性格もあってついに地方知行に終始した。

新領地に知行制度を確立するための検地は慶長八年から実施され、これを先竿といったが、同十八年の中竿、正保三年から慶安元年にかけての後竿によって、増加した家臣団への知行割付を行い、新田村を把握し、村切支配を徹底させた。そして後竿以後いわゆる寄郷制が整備されていく。

秋田藩の農民負担はまず物成（米）である。後竿以後になると租率の異なる田を六ッ成高に置きかえた「当高」を採用し、これをもって知

行配分を行った。ほかに人足・伝馬・ぬか・わら・草・口米・山川野役等があったが、これら諸役は口米を除いて慶安四年小役銀として銀納に改められた。藏分にかかる詰夫・代官人足、給分の江戸夫などの夫役も元禄十四年米納（五斗米、高一〇石に五斗）に改められ、秋田藩の年貢形態は確立した（『秋田県史』第二・三巻、『新編物語藩史』秋田藩）。

秋田藩の鉱山

藩財政を支えたものに米とやらんで金銀山と材木があった。本文書には鉱山支配に関する史料が纏っており特色の一つとなっているので、若干の解説を加えておこう。

佐竹氏の入部以来、金銀山の開発が急速に進み、杉沢・松木内・早口・大葛の金山、院内・荒川・畠・増田・新城・八森などの銀山が開坑した。その中で最も著名なものが院内銀山で、慶長十一年に発見、翌年操業を開始したが、佐渡につぎ石見・生野と比肩した大銀山であった。

秋田領内鉱山は秋田藩が領有するもので、代理者として直接支配に当たった山奉行は、御藏方・十分一以下の役人と、経営者である山師と金名子・大工・掘子などの労務者を従属せしめた。慶長十四年、十七・十九年の山奉行の「梅津政景日記」（東京大学史料編纂所編『大日本古記録』）は、「院内銀山記」や「鉱山至宝要録」とともに秋田藩初期の鉱山研究にとって得難い史料である（本文書「院内銀山記」〔二四〕参照。「」内は史料番号、以下同）。

院内銀山の盛時は慶長期で一日一〇〇〇枚（四三貫目）の銀が出たと伝えるが正確なことは判らない。金銀山は天下のものであり、諸役・運上は幕府に納め、幕府は翌年それを返還するのが慣例であるが、慶長盛時には三〇〇貫に及んだとされ、衰退期の元和・寛永期ですら例年一〇〇貫以上の運上銀がみられる。鉱山領有の目的である鉱山・鉱山町より獲得する収入は、運上諸役、御払米鉛の専売利潤、金山では初期から銀山では中期から実施された両替収益である。専売利潤は幕府運上銀の対象外であり、幕府還付運上銀と合わせた銀山収益は大いに藩財政を潤した。藩は極印銀を領内に通用させ、銀小判・金銀銭を鑄造して領外支払にあて、金銀ならびに金銀製器物を本丸蔵に貯えるなど藩庫は豊かであった。

院内銀山等からの幕府上納は慶長十九年春梅津政景が使者となり駿府に至ったことが最初のように、十八年度の運上諸役二六三貫四三一匁

一分のうち二〇〇貫、金山の方は一〇〇枚に二枚を加えて実際の献納にあてた（銀は山目、京目は一割二分出）。

寛永以後の銀山稼行は大体において不振となり、寛文期以降は更に衰退した。宝永以後は院内分一貫四〇〇匁・畠分一二〇匁の定高運上となったが（享保十五年佐竹右京大夫納一貫五〇〇匁余―二〇匁端数切捨入「大河内家記録」V）、延享二年畠銀山は出銀皆無の理由で明年より運上を中止し、院内分のみとなった。かくして延享四年以後は院内分としての秋田灰吹銀一貫四〇〇匁（京目一貫五七〇匁余）が幕末まで、幕府の蓮池金蔵収納項目の一となっていた（「吹塵録」「水野家文書」「誠齋雜記」）。運上が定高になると藩への返付は行われず、出銀から運上差上分の残銀が幕府買上となった。

享保十年院内銀山は請山となり、その後直山、請山を繰返した。安永二年大葛金山の山師荒谷忠右衛門・阿仁銅山の山師石田久太郎が山師明石儀左衛門とともに院内の稼行を命ぜられ、久太郎が翌年阿仁に帰り、儀左衛門は病死したが、直山九か年に金一〇四〇両余を藩に収めたという。天明元年秋斎藤東五郎らの請山となり、翌年富沢善兵衛が直山支配人となったが山勢は振わなかった。天明六年十月藩の懇望により、荒谷和三郎は親忠右衛門に代わって大葛より院内に赴き、寛政元年十月支配を辞するまでかなりの成功をみた。安永三々天明元年八月、同六年十月く寛政元年七月の荒谷氏支配人時代の産銀は年平均五〇貫目を超すのである。

文化十年三月支配人成田新五郎に命じ金銀吹分所を創設、四月から佐渡から来た中川左兵衛が出銀より金を析出する吹分を開始し、有利な結果を得た。同十二年灰吹金一貫二〇〇匁・灰吹銀三五貫二一〇匁、十三年灰吹金一貫三〇〇匁・灰吹銀三七貫三一二匁、同十四年八月より直山となり、文政元年十二月まで一七か月間に灰吹金二貫四四〇匁余・灰吹銀九一貫一三〇匁七分を産した。別表は小貫家文書の各史料から判明した院内銀山出金銀高を一覧したものであるが、文政六年と天保四年にそれ以前よりの急激な増大が認められる。文政六年正月格別盛山になったので、山神祭祀に米八石を与え、同十一年二月には二五榎目に良鋳が出て一日に銀三貫五〇〇目余を産したので、山神に家紋付幕一重を奉納、藩主義教筆の歌を寄進し、十三年正月に山神堂を再建した。天保八年五月には一日産銀平均四貫目となり、義厚下国の時支配人・手代・金名子らに酒を与えて祝った。このように天保四年以来毎年一〇〇〇貫目以上の産銀があり、同十年・十三年と支配人より金名子までと役人に金子を賞与した。文政十二年六月には支配人山崎権六、天保十五年二月には同じく村木六郎兵衛に生涯三人扶持を与えて賞した。天

院内銀山出金銀高（文化14年8月直山以来）

年 代	出 銀 高	正出銀江戸上納	正 出 金
文化14.8—文政元	貫 匁 91,139.7	貫 匁	貫 匁 2,440.8
文 政 2	98,930		2,479.4
3	71,169.2		1,866.6
4	91,277.8		3,248.3
5	89,778.8		3,372.5
6	231,027.9		9,209.3
7	378,711.4		15,330.42
8	302,519.2		12,141
9	304,164		10,237.7
10	399,770		16,780.2
11	529,489.6		19,391.4
12	521,264.8		18,861.4
天 保 元	467,877.2		14,903.8
2	381,892.6		12,477.7
3	388,600.8	354,624.4	12,624.4
4	1,178,390.7	1,072,311.4	41,140.3
5	1,299,404.1	1,164,934.1	41,627.7
6	1,345,424.6	1,223,371.6	38,637.6
7	1,091,237.9	996,074.6	32,846
8	1,167,301	1,071,152.5	34,068.5
9	1,438,150	1,314,853.5	42,625.6
10	1,149,796.7		
11	1,278,520		
12	1,127,559.8	1,025,773	41,324.7*
13	1,007,690	914,236.8	39,734 **
14	1,169,975		
弘 化 元	766,611		
2	503,510		30,870
3	573,310		
4	756,679		
嘉 永 元	532,040		

（注）* 仕屑仕上出金 112 匁を含む。 ** 同 107 匁を含む。

小貫家文書各年の「院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳」〔31〕ほか, 「金銀吹分御徳用控」〔37〕, 「天保三辰の同九戌年迄出金銀高御仕上并御米弘高書上」〔41〕, 「天保四巳年弘化三年迄十四ヶ年出銀纏」〔350〕などによる。

保十一年十二月灰吹銀双替の増加を藩より申請し、一か年灰吹銀一〇〇〇貫目以上を江戸銀座へ納めたならば、上銀一貫目につき丁銀（保字銀）二貫六〇〇目の他に二五〇目の手当銀を支給し、一〇〇〇貫目以下の時は手当銀なしとした。このように天保四年以来の産銀は一〇〇〇貫を突破し、弘化以降やや減じたが、その盛況は石見・生野を凌駕し、天保年間の佐渡金銀山江戸上納高（年平均銀二〇貫目・金一三貫目）をも上回るものであった（『佐渡年代記』、麓三郎『佐渡金銀山史話』）。天保六年五月花降銀三貫匁・金九〇匁を山神宮に奉献した（以上、小葉田淳『日本鉱山史の研究』）。

出金銀高の増大の原因は良鋳脈の発見、排水の進歩が考えられるが、出金高は後述のように新しい金銀吹分精錬法の導入によるところが大きい。すなわち金混入銀（鑛銀）から鉛を媒介として金を絞り、さらに吹捨鑛吹（仕屑方出銀）などを取り入れ、またこれまでの上納銀二二双半替を灰吹銀二四双替にすることにより、これまでの上納銀より多少量目が減少（減銀）しても、公儀買上値段の上昇による徳用の増加があり、出金高はそのまま利益となるために藩財政への寄与は極めて大きかったのである。

阿仁銅山ははじめ金銀山として開け、寛文十年小沢山が銅山として開発され、遅れて真木沢・三枚・一ノ又・二ノ又・萱草（ほかに向山）などの開発された諸山も開発時から商人の請山であった。しかし元禄九年と同十五年以降は、明和二・三年の請山仕法期間を除いて幕末まで藩営の直山となった。荒銅の年間産量は一七世紀末七〇〇一五〇万斤、藩営初期一四〇万斤、宝永五年三六〇万斤を最盛期とし、以後一時的立ち直りを除いて四〇〇一〇〇万斤を上下していた。阿仁銅山は長崎御用銅生産に重要な位置を占め、銅生産・鑄銭・殖産興業としての銀加工業などを通じて、秋田藩財政と深い結びつきをもっていた。出銅の減少・廻銅定数の強制・低廉な買上値段は銅山を衰退させ、そのため藩は幕府から廻銅代銀前渡と拝借銀を引き出させた。安永二年石見銀山山師吉田理兵衛と、平賀源内を秋田に迎え、銅精錬過程で銀を分離する銀絞法の伝授を受け、さらに南蛮流銀絞法が大坂銅吹屋大坂屋により移入され、後年実効をあらわすに至った（『秋田県史』二・三巻、『新編物語藩史』）。

小貫家の系譜と知行

小貫氏は秀郷流藤原氏を称し、秀郷の末子千常ついで公脩（文脩）、公通に至って陸奥磐瀬郡に住して磐瀬大夫を称し、のち常陸に遷り那珂郡に住した（文脩までは小山氏の系図に拠ったものか）。公通の曾孫通長に至って佐竹昌義に属し、その嫡孫通経が小貫郷に住したため子孫は小貫を称するようになったという。通経の子孫通定の二子新九郎某（日涉斎）は兄頼重の嗣子となり、その長子元勝（または頼勝）が小貫宗家（宇右衛門のち佐渡の家、廻座）の祖となった。

その弟俊茂は父頼重の隠居跡を継いで二男家（金治家）を起こし、俊茂の子頼章の実二男甚七某（近江守）が頼章家跡を相続した。甚七某の子政緒は慶長七年佐竹義重（義宣の父）の秋田遷封に随従して仙北郡六郷に住したが、のち久保田へ移った。この家が本目録の小貫家である。小貫家の知行については「慶長九・十知行人扶持人覚」と「寛永四年窪田配分帳」（『秋田県史資料』近世編上）には記載がない。以後の分限

帳類（秋田県立秋田図書館所蔵）によると、正徳四年小貫治右衛門（頼匡）一〇〇石、元文四年同人九九石余、宝暦十二年小貫治兵衛（頼紀）九四石四斗一升（小貫瑞夫氏所蔵「御判紙」、文化二年丈右衛門（頼助）八六石四斗八升七合（同館所蔵「藤原姓小貫氏分流系図」、文政八年多仲（頼綱）八六石四斗九升一合、同十三年同人八六石八斗七升四合、嘉永年中東馬（頼誠）八六石四斗八升六合、慶応元年同人八六石五斗五升七合となっている。初期は一〇〇石、文化期からは八六石余の知行高とみてよいが、高の変動は借上に伴う指上高と起返などによるものである。

小貫家知行所は宝暦十三年において上表のとおりであるが、検地減や道・堤・関下代知によって村附の変動があった。宝暦二年仙北郡横堀

小貫治兵衛知行所（宝暦12年）

石	35.29
仙北郡今泉村	3.663
" 藤木村	5.535
" 雲然村	17.637
" 板見内村	18.14
" 横堀村	3.633
雄勝郡金屋村	1.747
平鹿郡馬鞍村	5.67
秋田郡道川村	3.095
山本郡外岡村	
合 計	94.41

（注）小貫瑞夫氏所蔵「御判紙」による。

村の高の一部が山本郡外岡村に変えられ、明和三年に仙北郡今泉村の高の一部が仙北郡下淀川村に移されているなどである。なお文久三年平鹿郡海蔵院村八左衛門辛労免高四石七斗九升三合（海蔵院村三石七斗八合・住吉荒田目村一石八升五合）が平鹿郡沼館村塩田団平に、慶応四年角館町富屋久右衛門辛労免高五石（山本郡上岩川村）が河辺郡松崎村柴田伝兵衛に、それぞれ渡されていたが、明治二年九月には塩田団平・富屋久右衛門・柴田伝兵衛および河辺郡松淵村大山作右衛門辛労免とともに合計二五石五斗四升六合（海蔵院村八石五升四合・住吉荒田目村二石七斗九升二合・松淵村六石・豊成村一石七斗・上岩川村五石）が小貫東馬へ知行渡となっている（小貫瑞夫氏所蔵文書）。このほか本文書から秋田郡濁川村岩城村・河辺郡寒川村などいくつかの村にも給地があったように見受けられるが、給地の移動や辛労免の取得によるものと思われ、明治期の同家の土地所有はこれらが母体となったと想像される。

本文書は天保以前の史料が少ないので不明であるが、天保以降の小貫東馬（頼誠）の役職は以下のように推測される。

小貫家の役職

天保九年に東馬は院内銀山の詰合役となり（山奉行下役か）、九・十年は畠銀山も管轄した。院内は弘化二年ごろまで集中的に関与したが、最終的には安政二、三年までの史料がある。弘化三年以降勘定方もしくは財用方役人を勤めたと思われるが、嘉永六・七年土崎湊役所に詰合っている。安政二・四年には阿仁銅山を管轄したが、以後同六年ごろから郡奉行下役（代官か）を勤めたようである。文久三年・四年三月ごろは軍事方係を勤め、続いて仙北郡の郡奉行に任じ、慶応三年山本郡（奥河辺を含む）の郡奉行に転じた。なお役職の詳細は文書

の配列と概要の項目を参照されたい。

以上秋田藩の概要等は小貴家に関係深い事項についてのみ略述したが、その他については各項目の説明や他の二家文書目録解題、および『秋田県史』二・四巻、『新編物語藩史』の「秋田藩」等を参考にされたい。また後掲「佐竹氏歴代藩主系譜」参照。

文書の配列と概要

分類・配列の方針

本文書の量はそれほど多くないものの、秋田藩政の多方面にわたる史料を含んでいるため、史料の性格・内容によって七つの大項目を立て、その下に中・小項目を置いて分類・配列をした。ほんらい、小貴家の歴任した役職名を分類項目として立て、それぞれの任期中に作成・授受・記録した文書類を配列する役職別分類が望ましいと思えるが、既述のように歴任役職名を殆んど知ることができないことから、史料の内容に応じてこのように配列をした。ただし『鉾山支配』の史料はほぼ鉾山詰合役中のものの、『郷村支配』はほぼ郡奉行ないし下役勤務中のものを中心に据えるなど、役職別分類を若干考慮している。しかし文政期以降の小貴家知行所の変動が不明なため『郷村支配』と『小貴家』の『家政』中に分類した史料の間に多少の混乱があるかと思われるが、利用者の諒解を得たい。なお各解題中『内ゴチック活字は大項目、『内』内は中項目、『内』内は小項目を示す。

藩主佐竹家に関する史料のほか、藩法を主とする法令等、藩政上の基本的記録類をここに収めた。

『佐竹家』

『藩侯』には藩主の「入部」、佐竹家の「法事」、藩主筆の写である「文芸」のほか、藩主の江戸参勤・京都上洛への小貴氏の供奉に関する史料を「参勤・上洛供奉」に配列した。殊に文久三年には佐竹義堯の上洛があり、これに供奉した小貴久之進(頼巖)の史料がある。なお上洛中の久之進の書状は、『小貴家』『書状』のうち「小貴書状」に配列してある。「系図」は佐竹四分家略系図と、引渡・廻座の系譜を記した「諸士伝系」(二二)がある。

『法令』は「触書」に配列した公儀触書一点以外は藩主よりの「仰渡・申渡」であり、儉約令を主とした諸種のものがある。「制規」に編纂された藩法類（写本）を収めた。このうち「刑罰式・同附録」は秋田県立秋田図書館にも所蔵され、同館本によって附録を除いて『秋田県史資料』近世編上に収録されている。同様に「当用式」も同館に所蔵され、同書に全文収録されている。

『記録』は「梅津政景日記」の抜書をはじめ、「国典類抄」（秋田県立秋田図書館所蔵、同館編刊行中）の抜書等を収めた。また「若殿様（修理大夫義苗公徳雲院公也）御懷中為御用元禄五壬申年梅津半右衛門指上候覚書」（九三）、「宝永二酉年調ヲ以考検地之超本生米調」（一三七）、「下野御領分御高并肝煎名前帳」（二三七）はそれぞれ『秋田県史資料』近世編上に全文収録されている。

全部で一二〇余点と多くはないが、本文書の特徴の一つをなすのがここに分類した史料である。『鉾山支配』には文書・記録類を、『絵図』には藩内各鉾山絵図を収め、前者は史料内容別に、後者は鉾山ごとに小項目を立ててある。

小貫東馬（頼誠）が鉾山支配に関与するのは、院内銀山が天保九年から安政二、三年まで、畠銀山は天保九々十年ごろ、阿仁銅山が安政二々四年とみられる。その年代の史料が集中し、それ以前は写が多いからである。なお史料表題中「出銀」等銀の記載あるものはほぼ院内銀山史料とみられ、「銅山」の語は阿仁銅山を示している。

『鉾山支配』のうち「記録・日記」には「院内銀山記」三冊をはじめとする写本類があるが、「履尾敵秘録」（二六）は宝暦十四年の幕府の阿仁銅山および周辺一万石上知に対する藩の撤回運動の顛末を記したもので貴重である（なお国立国会図書館所蔵「秋田銅山之一件」との異同は未検討である）。「院内銀山諸日記」（三〇五）、「銅山色々日記」（三〇六）は小貫頼誠の院内銀山・阿仁銅山詰合中の日記である。「山法」は家康の山法五拾三ヶ条をはじめ、定書・申渡類である。「見分・検使」は藩主の院内銀山見分と役人の検使および後藤三右衛門の鉾山見分に関する文書である。「役人・山師」は山師・手代・金名子の交代・褒賞・合力などについての史料であるが、ほかに阿仁銅山の「銅山減少人別取調控」を付した。「願・書上」では文化十四年直山となって以来の院内銀山の模様を書上げた「御直山以来鋪内働方書上」がある。

「出銀勘定」「出銀人別」「吹分仕法」「入料」「差引勘定」「普請料」はここで最も纏った史料であり、「差引勘定」中の三、四点を除いて全て院内銀山の会計史料である。中でも天保四年以降の「院内銀山金銀御仕上御徳用仕訳帳」（口絵写真参照）などの「出銀勘定」の史料

がある。文化十四年山師成田新五郎の請山であった院内銀山を藩が直山とし、小沢銅山より荒川七五郎を支配人として直接経営を開始した。金名子出銀のほか、汰物方・仕屑方・薄物方などの出銀の合計である出銀高から金銀を吹分け、出金高と金銀吹分・上銀吹立減銀を引いた量が江戸上納高となり、幕府（銀座）買上代銭から仕入（経費）を差引いた徳用が藩財政に繰入れられる。前掲表「院内銀山出金銀高」は文化十四年直山以来嘉永元年までのものであるが、この期の出金銀高増大の技術的要素を示すのが、「吹分仕法」に配列した史料である。「先中川左兵衛勤中覚」〔五一〕によれば、佐渡から東北に來た中川左兵衛が文化九年秋田藩に召抱えられ、請山中の院内銀山で翌年から金銀吹分を開始した。この時一〇兩二人扶持を給され、直山後も變更なく勤めた。直山以前の絞銀高二六一貫目・出金七貫九〇〇目、益筋四一七〇貫文になったという。文政二年五月金銀吹分頭取となり一五兩三人扶持を給され、子孫永々召遣を許された。同五年七月紋附・裱と金三〇兩拝領、佐渡へ暇乞に往復し、翌六年四月死没した。文政二年八月悴定治が小見習に登用されたが、中川左平は彼が長じての名乗と推測される。かくして文化十四年から文政十年までの一か年の徳用は三万四四七〇貫文に上った。「出銀人別」は金名子各人の出銀高記載がある。

「入料」「差引勘定」は労賃・鉛ほかの材料・飯料など経費の勘定差引史料である。「移出」は籠山（加護山）銀紋所（平銅・床銅から南蛮紋による銀析出）から能代へ下げた銅鉛数量を記した史料一点である。「公儀拝借」は阿仁銅山・院内銀山について藩から幕府への拝借金願に関する史料である。秋田藩は金銀の上納や廻銅があるため、宝暦以降幕府からの拝借金が屢々認められている。

『絵図』は大葛金山・阿仁銅山・八盛銀山・畠銀山・院内銀山の絵図であるが、年代の判明しているものは一点を除いて、いずれも小貫東馬の鉱山詰合中の時期に作成されたものである。この中「阿仁銅山」の八鋪の絵図は安政四年に写された砦通り絵図である〔三九四〕～〔四〇一〕。「院内銀山町絵図」〔四二二〕（口絵写真参照）は、十分一番所・表門から裏門に至る全町を、金方役所・台所を中心に金名子など全住居を寺社を含めて記録しており、院内銀山町絵図（本文書以外のものも含めて）の中では出色のものといえる。

『郷村支配』

秋田県立秋田図書館所蔵佐竹文庫等や『秋田県史』によっても近世後期の藩職制が不明であるので、小貫氏が勤めた役職も明らかにしないが、小貫東馬が慶応三年正月郡奉行を仰せ付けられたことは明らかである。「支配処記事」の慶応三年のもの〔三一六〕（口絵写真参照）によると、支配所は南北山本・奥河辺となっているが、同じく同二年（五月）までのもの〔三一五〕は支配所が西街道

・街道筋・前北浦・奥北浦とあつてこのほかの慶応二年の史料を含めて仙北郡の郡奉行を勤めていたことが判明する。また元治元年も仙北郡の郡奉行を勤めていることが判る。従つて慶応元年も仙北郡奉行である可能性が強い。また安政六年ごろから郡奉行下役（代官か）を勤めた形跡もあり、恐らくこの時の支配所は平鹿郡東山と思われる。いずれにしてもこの時期の郷村支配に関する史料を『郷村支配』に配列した。

『郡方』は郡奉行ないし下役勤役中の史料であり、「支配所」以下一五の小項目に分類した。これらのうち「調達金・御用金」は、破綻に類した藩財政を取繕うため、領内の豪商農に賦課したもので、郡方としての支配所のそれである。「扶持米」は調達・用金に充てる僅かな褒賞として拝領したものである。「備米」は備荒貯蓄として町人や農民から供出させたものであるが、天保四年大飢饉後は百姓町人一〇才以下七〇才以上と盲人廃疾を除いた全ての男女一人につき五升ずつを供出させ備米（五升備米・粃）としたもので、郡奉行がこれを担当した。「春農米」は種貸など助成拝借米である。「水利」は横手川分水堰に関するもの、「山林」は元治元年の平鹿郡草飼所入会争論史料であつて郡奉行支配所と断定しえないが一応ここに配列した。「漁業」は河辺郡百三段新屋村の増網一件である。

『交通』は郡奉行史料ではないが、『郷村支配』の一連としてここに置いた。「難船一件」は安政四年旗本松永善之助蔵米を積んだ廻船のもので、小貫東馬が戸賀浦にて査検した史料三点である。

『財政』

量は少ないが、藩財政史料が若干ある。小貫氏が勘定奉行・財用奉行下役を勤めた形跡は明らかでないが、弘化三年以降安政三、四年までの関係史料と内容的に財政に関わりある史料を『勘定方』に配列し、安政六、七年を中心とする土崎湊出入役所詰合中の史料を『湊出入』、安政二―三年の御作事所史料の『作事』を『財政』に含めた。

『勘定方』は「意見書」「請払」「扶持米・給銀」「合力金米」「炭」に分類したが、「御勘定吟味役所以来書拔」（一―二三）は嘉永二年までの役人・御用達町人等への同役所申渡書抜である。弘化三年から安政四年までの出納積または取調（一―二二）（一―二五）は「請払」に収めた。この中で御軍事方の請払は『軍事』ではなくここに配列した。「合力金米」の中には小貫東馬郡奉行就任合力金の史料もある（四七二）。城内・諸役所の焚炭は「炭」に収めてある。

『湊出入』では「湊出入役処詰合日記」（三―三三）が注目される。土崎湊は能代とともに西廻海運で上方に結ばれる秋田藩の主要な港湾であ

小 豆	外	そ の 他	塩	操 綿	木 綿
石 6,803.58 1,366.935 1,791.715 988.185 31 3,301.48 2,690.85	痛粉 265.3	石 石 石 石 粟29.73, 蕎麦3.54, 荳粒油733.965, 菜種673.515 麦652石46, 荳粕158,521貫700 干鰯375,990貫900 干鰯360,752貫700	俵 97,620 60,896 55,498 70,056 111,080 80,051 70,020	丸 7,019 11,129 6,829 7,047 9,622 7,780 7,156	反 68,341 119,708 71,560 89,285 83,056 72,735 72,906
3,496.315 3,146.455 4,194.525 1,379.445 0 2,066.4 2,580.46		荳水油0石9 荳粕133,121貫000 干鰯214,776貫000 荳粒油333石975, 菜種527石415 荳水油48石635 麦237石12	104,911 63,858 72,216 60,435 92,127 81,924 56,700	5,291 10,799 5,095 3,697 959 2,246 1,921	58,272 67,673 50,568 24,650 1,706 16,473 34,783
1,027.95 4,703.935 694.65 1,584.945 3,347.925 3,789.14 7,653.805		蕎麦243石81 粟15石805	90,263 80,936 59,874 89,310 99,440 86,760 61,009	1,103* 2,741 2,125 5,091 7,856 9,368 8,394	44,506 2,976 14,623 19,349 13,437 41,362 52,345
4,695.005 2,628.76 4,059.425 878.37	新 103.32	荳粕123,160貫300, 干鰯91,286貫600, 荳水油1石95 麦15石96, 菜種497石26 粟1石1, 蕎麦35石4, 荳粒油1,267石78	127,621 110,311 65,454 59,741	18,031 8,850 13,655 7,164	53,840 59,448 58,389 51,604
4,561.535 4,882.155 2,366.605 1,425.735 3,616.89 3,204.053 2,453.321		麦275石605 荳粒油648石81 粟68石105, 荳粕145,816貫900 菜種944石405 干鰯141,831貫600 蕎麦133石813	88,154 109,444 101,520 69,717 95,628 144,558 78,381	8,342 8,038 18,036 8,860 7,192 9,396 10,438	31,032 39,177 141,131 133,155 48,803 38,125 44,025

調帳〔207〕はかによる。太線より右は移入。*他に3貫目あり。

土崎湊移出入品・出入役銀・入船数

年 代	玄 白 米	外 払 米	出 役 銀	入 役 銀	入 船 高	大 豆	外
	石	石	貫 匁	貫 匁	艘	石	
文 政 6	161,156.558	37,316.72	1,212,588.98	252,650	752	5,755.195	
7	122,959.18	22,917.3	937,700	258,800	659	3,229.575	
8	83,380.19	9,018.0075	672,650	216,800	584	1,104.68	
9	58,472.33	3,992.51	531,980	230,200	516	1,935.575	
10	112,969.15	7,991.91	967,500	289,700	616	371.49	朽 76. 81 痛 213. 54
11	76,290		335,300	231,100	582	2,158.12	
12	70,956.94		978,680	237,400	527	3,128.51	
天 保 元	120,527.15		1,250,300	281,600	661	3,152.15	
2	76,060.645		1,042,600	259,400	685	1,581.595	
3	53,494.995		550,600	211,700	560	303.53	
4	1,594.余		72,070	145,600	443	1,111.675	
5	71.705		17,590	113,700	792	0	
6	836.06		56,600	125,190	407	2,699.305	
7	9,483.92		565,100	159,900	373	619.705	
8	597.23		317,100	173,500	775	3,745.705	
9	1,211.506		238,200	166,200	399	8,003.765	
10	88.4		112,300	231,400	325	3,742.12	朽 23
11	3,060.545		71,600	167,300	520	0	
12	37,299.506		410,900	227,300	493	6,225.035	
13	94,494.795		777,900	202,700	690	6,950.16	
14	133,176.635				719	5,129.8	朽 47
弘 化 元	135,193.93		972,700	216,300	710	8,726.265	朽 3,729.7
2	94,260.007		1,361,800	307,300	582	5,552.2	
3	113,708.8		1,044,000	230,900	685	6,044.575	
4	75,449.7		917,800	206,600	613	3,979.095	新 467
嘉 永 元	72,322.05		1,039,500	227,900	627	9,162.1	
2	131,343		1,670,500	249,800	778	10,089.6	新1,405.87
3	164,472		3,175,200	389,790	902	6,225.855	
4	84,619.525		3,078,990	322,400	724	3,819.605	
5	94,188.5		1,173,500	240,200	718	7,038.02	
6	80,719.98		1,341,900	302,900	675	4,240.703	
安 政 元	85,827.88		1,700,600	253,400	619	5,678.173	

(注) 小貫家文書「文政六未年」安政元寅年迄三拾貳ヶ年出入役銀沖出穀并入品塩操綿木綿取

り、湊出入役所は出入の穀物・商品を取調べ出入役銀を徴したが、これが藩の財政収入の重要な柱の一つとなっている。安政元年の沖出品は白米をはじめとする米や、大豆・小豆・粟・小麦・菜種・蕎麦・狗脊・干鰯・干鰯・荏粕であり、沖入品は塩・木綿・繰綿・篠巻・綿入・袴・単物・紙類・砂糖・蠟・鯨・鯨節・鯨・鉄・畳表・鯉・数の子・保太急などである〔三六四〕。「文政六末年の安政元年迄三拾貳ヶ年出入役銀沖出穀并人品塩繰綿木綿取調帳」〔二〇七〕は次の〔二〇八〕とともに、土崎湊出入役銀・沖出品（米ほか）・沖入品（塩ほか）・入船数を年次の統計した史料で他に類例がなく、別表に掲げた。

『作事』は御作事所の安政二・三年にわたる江戸屋敷の地震修復作事と思われる。

『軍事』

文久三年八月小貫頼誠は軍事方係を仰せ付けられた。これ以後の軍事方については「御軍事方品々日記」〔三二二〕に詳しい。

『軍制』はこの軍事方係の慶応に至る軍器・軍政改革史料を収めた。なお「山本郡御支配御足輕名前書上控」〔四八〇〕は郡奉行としての史料であるが、内容上ここに分類した。

嘉永以後異国船が沿海を航行するに及んで藩は同四年以降男鹿半島や土崎等に海岸防備の兵を配備した。『海防』はこの関係史料である。安政二年三月幕府は秋田・仙台・津軽・南部の各藩に蝦夷地警備を命じ、ついで出兵を求め、同六年九月蝦夷地を分割して諸藩に与えた。秋田藩領分は増毛より紋別までの蝦夷地北部と利尻・礼文二島である。この間小貫頼誠は蝦夷地への出張はなかったが、文通を含む御用書留写〔二三五〕や「年々蝦夷地出張御人数」〔三六七〕など『蝦夷地』に配列した史料は秋田藩の蝦夷地警備を知る一史料となる。

『久保田藩』

戊辰戦争も終結し、明治二年六月版籍奉還が許され、旧藩主義堯が知藩事に任命された。同年十二月・同三年十月と国制に倣って藩政改革を実施し、四年七月廢藩置県を迎えた。この間の藩政に関する史料を『久保田藩』（四年一月秋田藩と改名）として分類し、『布達』『官制』を置いたが、それに前後する史料も加え、さらに幕末期から明治十年西南戦争に至る『風聞』をこれらの後に加えた。

『布達』は新政府・秋田県（四年以後）からのものである。『官制』は明治二年以降の藩制改革史料に秋田県庁職制を加えた。『風聞』は京都あるいは九州などからの報告を写したものであるが、戊辰戦争に当たった「院内口探索報告書写」〔二六〇〕もある。

『小貫家』

ここには小貫家の私的文書を『家政』『日記』『書状』『写本・絵図』の順に配列した。

『家政』は「戸籍」「知行所」など一一の小項目に分類したが、ほとんど全てが明治期の史料である。「知行所」のうち近世のものは平鹿郡住吉荒田目村からのもの二点である。他は知行所と推測される村の明治期史料である。また山本郡上岩川村の野帳書拔が明治二年のものであるが一点ある。「家計」に慶応二年の「御至来物賞帳」〔三八六〕があるが、家来金子門右衛門が控えたものである。「売買」では本念寺より小貫東馬宛の「撞鐘堂永代売渡証文」もある。『家政』は総じて纏りのない史料といえる。

『日記』は天保十年から安政四年まで小貫頼誠日記、嘉永二年から明治三年の公私頭書日記などよく揃っており、文久三年・元治元年の「役前日記」も一括して『日記』に配列した。ほかに小貫久之進頼晟の日記が五冊ある。

『書状』は「小貫書状」と「小貫宛書状」に分けた。「小貫宛書状」は小貫東馬・亀松・金子門右衛門・小貫（名不明）宛の順に配列した。

『写本・絵図』は雑多なものであるが、「仙北道の記」〔二四〕、「阿山比川道之記」〔二五〕などの写本、「江戸城本丸御殿表之図」など五点の絵図である。

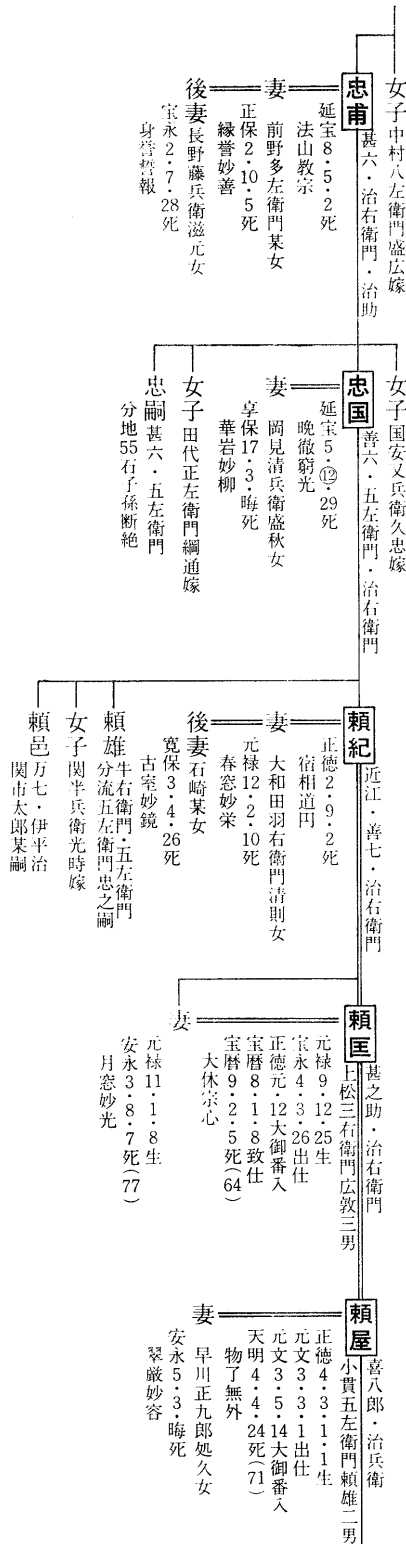
久保田小貫家系図

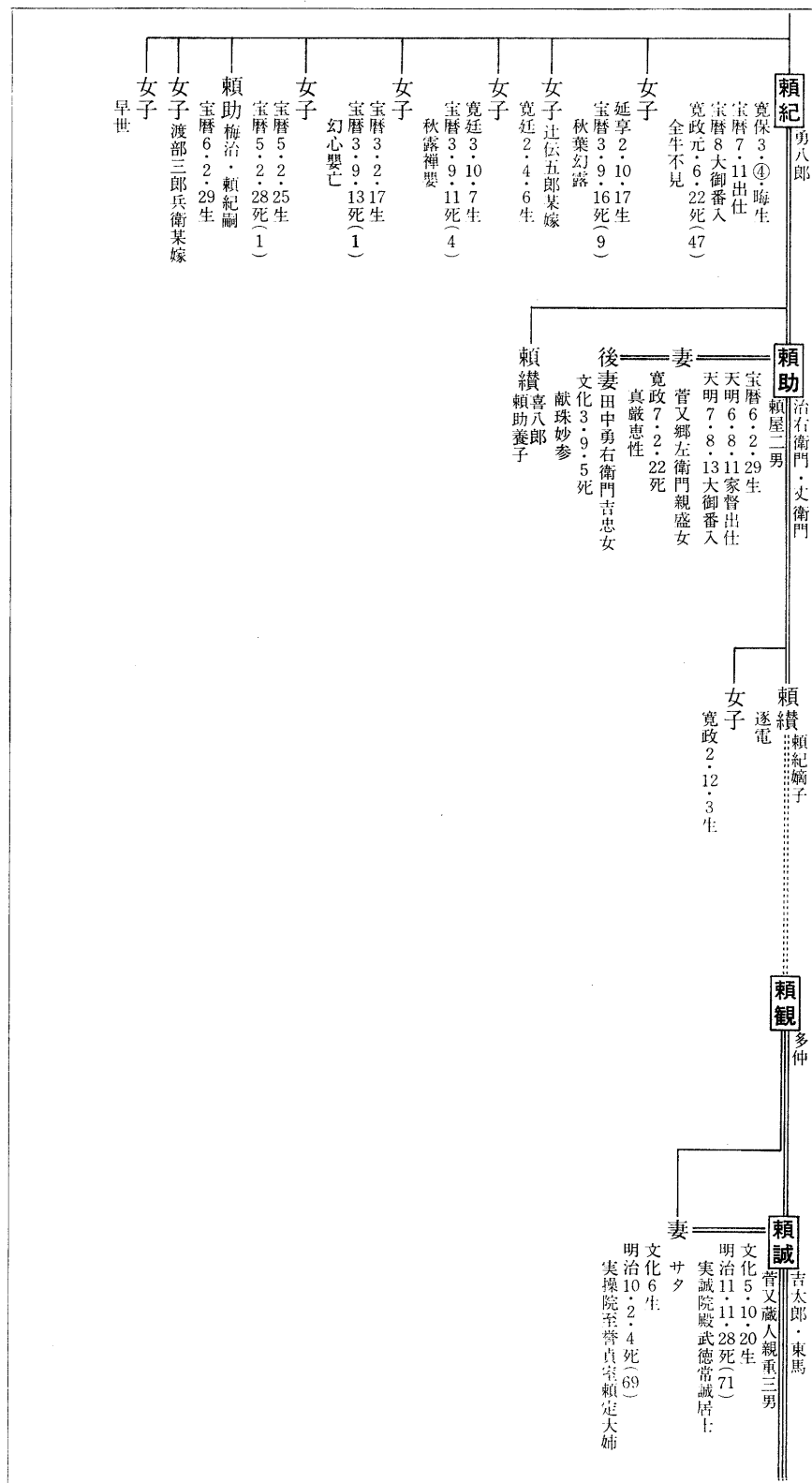
公通岩瀬大夫——通近——通直(通真)——通長大夫太郎——通政武藏郡司——通経与一太郎
(小貫郷移住)——某性庵主或号安房入道——某得雲斎或号土佐入道——賴等兵庫助

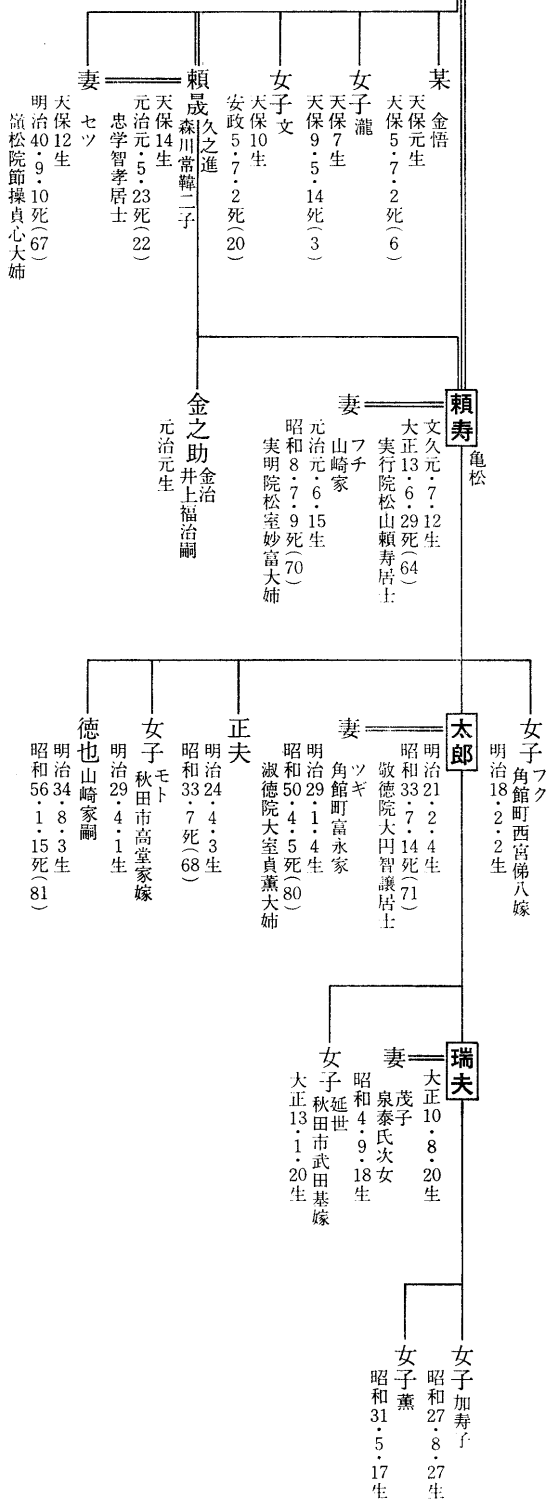
賴隆兵庫助——賴郷兵庫助——賴忠伊勢守——某伊勢守——通伯彦三郎・伊勢守
致仕後・小野崎氏 叔方道伯——通勝次郎・伊勢守
致仕後小野崎氏 考谷道順——通定伊勢守・筑後守
陽岑道東——通金三郎(五郎)

賴重因幡守・筑前守・筑前入道——某因幡守——某新九郎・式部大輔
号日涉齋 通定二子——元勝(賴勝)左馬助・伊勢守
月閑齋 元勝——小貫字右衛門賴達(宗家)
(彦三郎)——某彦八郎・采女佑・伊賀守
宗家兵庫助俊通二子——小貫金治賴休(二男家)
享祿2・12・9生 年月不明・21死 心徹到安

某因幡守・筑前守・筑前入道——某因幡守——某新九郎・式部大輔
号日涉齋 通定二子——元勝(賴勝)左馬助・伊勢守
月閑齋 元勝——小貫字右衛門賴達(宗家)
(彦三郎)——某彦八郎・采女佑・伊賀守
宗家兵庫助俊通二子——小貫金治賴休(二男家)
享祿2・12・9生 年月不明・21死 心徹到安
妻岡本梅香齋禪哲女
寬永5・10・20死 覺室妙正
斯箇甚六——某天文21?死(18)
甚七・近江守——政緒三太・五左衛門・近江
寬永5・8・16死 鑑叟壽円
重斯左馬助——斯賴甚八・右馬允・越後守——女子神谷新五郎秀範嫁







(注) 秋田県立秋田図書館所蔵「藤原姓小貫氏分流系図」、小貫瑞夫氏所蔵「藤原姓小貫氏準二男系図」「藤原姓小貫氏系図」「小貫家過去帳」、小貫家文書「小貫東馬戸籍届下書」(五一二)(五一三)、小貫瑞夫氏の教示による。

出羽国秋田郡大館佐竹家中 武茂家文書錄解題

文書の伝来と特色

文書の伝来 本文書は、昭和二十四年に原蔵者の秋田県大館市長倉町一三番地武茂信雄氏（現在同市赤館町九番一〇一号に居住）から当館が直接に譲渡を受けたものである。

文書の性格と特色 武茂家も佐竹家家中であり、本文書も陪臣史料であるが、武茂家が大館城代佐竹西家の家老として大館城三の丸に住したことから、総点数は四六九点と少量ながら、小貫家文書とは違った性格を持っている。時期的にも宝暦期以降のものであるが、幕末・明治期に集中している。武茂家歴代でいえば徳綱・維綱時代に当たる。

武茂家文書は大館所預に関する史料が極めて少なく、秋田藩政に関する史料の方が多い。しかし大部分は明治期にわたる武茂家の私的な政関係史料といえる。

武茂家の系譜と知行 武茂氏は字都宮正綱の子鎌綱が下野国武茂庄に隠居し、武茂を称したのに始まると伝える。その曾孫堅綱および長子輝綱は佐竹氏に仕えたが、天正十七年十月に輝綱が戦死したことにより、堅綱は二子安綱を嗣とし、剃髪して芦庵（露庵）と号した。佐竹氏秋田遷封に当たって芦庵と安綱は秋田に扈從した。藩主義宣は引渡二番座に着させた。この子孫が武茂三郎ついで下野に連なる武茂本家である。

いっぽう、安綱は古内義貞の末子を養子として別に勤仕せしめたが、これが縫殿助久綱であり、本文書の武茂家となる。寛文四年十二月二十八日、藩主義隆は久綱を廻座とし、翌元日から着座したが、実父兄に随って大館に移り、子孫は大館に住することとなった（「諸士伝系」小

貫家文書〔二二〕、秋田県立秋田図書館所蔵「藤姓武茂二男系図」「武茂系図書継」ほか。

ところで秋田藩では、家臣の資格において、一門（佐竹苗字衆五家）、引渡（二門の次位、門閥中の首位一五家、宝暦四年は一九人）、廻座（譜代家臣または勲功将士五〇〇六一家、宝暦四年は五五人）、一騎（上士の由緒ある者一五〇石以上）、駄輩または第二級（九〇石以上）、不肖（三〇石以上）という六種があり、廻座以上は大身、一騎・駄輩は平士であった。ほかに門閥分家または近年新給の駄輩を近進（三〇石以下）、駄輩以下の臨時登用者を近進並と称することがあった。以上は士分で、これ以下が足軽である（『秋田県史』第二巻、宝暦四年は前掲「諸士伝系」）。

武茂駿河知行所（天保3年）

	本	田	開	計
	石	石	石	石
秋田郡新館村	29	0.885	29.885	
〃 道目木村	8.874		8.874	
〃 前田村	1.696		1.696	
〃 花岡村	20.685	13.455	34.14	
〃 小森村	7.426		7.426	
〃 櫃崎村	0.853		0.853	
〃 綴子村	3.95	11.658	15.608	
〃 松木村	0.049		0.049	
〃 寺崎村	0.09		0.05	
山本郡扇田村	11.846	0.067	11.913	
合 計	84.429	26.065	101.494	

（注）武茂家文書「天保三年辰十一月分限帳控」〔19〕による。

寛永四年の「在々給人配当帳」には大館武茂玄番（安綱）一〇〇石があり、万治元年の「在々配分帳」では武茂縫殿助（久綱）一〇五石、うち本田一〇〇石・開五石と記されている（『秋田県史資料』近世編上）。元禄年間大館分限高では武茂源右衛門（金綱）一五〇石うち本田一〇〇石・新田五〇石とあり（『大館沿革史』、秋田県立秋田図書館所蔵の分限帳によると、正徳四年武茂源右衛門（重綱カ）一五〇石、元文四年源右衛門（重綱または邦綱）一一九石余、文化十四年新九郎教綱一一九石八斗二升九合、文政ごろ駿河（徳綱）一一一石余とある。なお上表は天保三年の知行所村附と給地高である。また安政六年大館十二所松山諸士分限帳には一一一石七斗五升七合、御廻座武茂駿河（徳綱）とあり、天保三年の高とは異なっている。なお明治二年改正給禄は七〇石（米四五石五斗八升四合・金三七円六四銭三厘）となった。

宝永三年五月の検地帳によると、武茂縫殿助の屋敷は三ノ丸東側、屋敷一九間四尺・

裏四七間である（『大館沿革史』）。

大館と武茂家

秋田遷封となった佐竹義宣は湊城に入り（慶長九年久保田城に移る）、一部の家臣を地方に分散駐屯させた。新封地は秋田・戸沢・六郷・本堂・小野寺の諸氏や最上義光に分割支配されていた旧地であったため、帰農浪人などへの警備・支配の必要上、旧

城下町や交通の要地を選び、大館・桧山・角館・横手・湯沢には支城を置いて一門を配し、その他の要地には譜代の重臣などを任じて支配に当たらせた。しかし、元和元年の一国一城令によって大館・横手の二城を残して支城を破却し、その時から城主を所^{ところあずかり}預と改め、他の駐屯地も漸次縮小整理して、院内・角間川・刈和野・十二所だけを残した。

当初、大館には小場義成の命で赤坂朝光が入城したが、浅利氏旧臣の反乱にあつて対処できず、義宣の命で小場義成がこれを鎮めたけれども、なお旧浅利勢力を抑え、津軽・南部両国境の備えを固めるために、義成は慶長十三年三月、一〇〇余の家臣、二〇〇余の組下士卒を率いて正式に大館城代として入城し、五〇〇〇石が給された。義成は城郭の改修拡張と町割を実施、新田開発を進めた。こうして小場氏は義房が万治年間に佐竹姓を許され、佐竹西家と呼ばれるようになった。以後大館佐竹氏は義遵^{よしのぶ}に至るまで約二六〇年間大館城代を勤めたのである。

大館城下に駐屯・居住した家臣は、本藩から派遣された給士^{きよし}「組下」と、大館城代の家士である「家中」とに分かれる。組下は三人の組頭のもと組に編成され、城内の御用役所に出仕して藩庁からの通達や訴訟の上申などを取扱ひ、城代の裁定をうける仕事を担当し、小支配とも称された。このほか組下には、郷校博文書院教授、御境抛人を従え境界維持を任務とする御山役、藩林監守の林役、郷校学生監督の詰役、郷校付属圖書會計を司る受払役、三の丸御蔵の年貢米出納の御蔵役などがいた。

城代には副将として古内下野（引渡）が添えられ、古内主典・前小屋市左衛門・武茂縫殿助など廻座の者が三の丸に屋敷を与えられて居住し、所預（城代）の家老職を勤めた。家老に付随して家中が事務を司ったが、膳番・納戸役・番頭・書生取立役・勘定頭・財用頭・台所役・蔵役・奥附役などの職制が本藩の組織にならってしかれた。

これとは別に本藩から直接派遣されて大館に勤務し、行政の任に当たったのが郡奉行・代官以下の職制である。秋田藩では郡奉行は寛文十一年十月に創置され、天和三年に廃止されたが、寛政七年に各郡に一名ずつ任命された。この下に郡方吟味役が各郡二〜四人いたが、天和三年近進から登用された代官が改革に当たってこれになったのである。吟味役は郡方見廻役・郡方足輕を指揮し、検地・収納・法令伝達・訴訟受理・殖産・警察等諸般の事務を執った。

大館城下に対する支配は、内町は城代の直轄、外町は郡奉行・代官の支配下に置かれた（『大館市史』第二巻、『秋田県史』第三巻）。

このように所預や大身の代官支配を廃止し、民政支配は本藩家老に直属する郡奉行の手に帰したことは、所預の分権的権力を制約吸収して藩権力を強化する政策の表現とみられる。本文書に民政史料がないということの理由はほぼ郡奉行再置以降の時期のものである故であろう。

文書の配列と概要

『佐竹家』 藩主佐竹氏および大館城代佐竹西家に関する史料をここに配列した。「公儀仰渡」は幕府および朝廷から藩主佐竹氏に仰せ渡されたものである。嘉永四年の佐竹義隆に対する日光東照宮修復御手伝の仰渡書付写以下、幕末の海防・開国、京都警衛、蝦夷地

領分上地および庄内藩征討の達書などである。「勤仕」は藩主の動静について武茂駿河（徳綱）ないし縫殿助（維綱・勝十郎）に宛てられた書状形式のものが多く、差出人は本藩家老級の者であり、所預家老としての武茂氏への伝達といえよう。このことは前の「公儀仰渡」中の史料にもいえるが、本藩から西家への伝達過程に家老が介在したために成立した文書と考えられる。なおここに佐竹義宣の事歴を記した「考書稿」〔一〕や、慶応二年の藩主義堯の大滝入湯の史料を含めた。佐藤・中村書状二通〔二六八〕〔二六九〕は秋田新田藩主佐竹播磨守義謹の若君誕生等に関するものである。さらに末尾に大館所預西家の吉凶についての帳面を置いた。「布達」は慶応二年～明治四年の廻達・布告等であり、厳密には『佐竹家』とは関係ないものも含むが、少量なのでここにおいた。

『武茂家』 本文書の大部分はここに配列してある。『家政』のうち「家」は、武茂家の家譜・系図等がないので、武茂家の概要を知るに必要

な史料を配列した。後掲の大館武茂家系図は秋田県立秋田図書館所蔵の元禄差出系図と武茂信雄家過去帳のほか、ここに配列した史料から復原したものである。なお戊辰戦争後（年月不明）武茂家は秋田郡花岡村（同氏給地の二）に居住していたが、明治十六年東大館町（現大館市）の長倉町（武茂医院所在地）に移転した。この移転に関する史料もここに置いてある。「知行」には前掲「天保三年辰十一月分限帳控」のほかは、山本郡扇田村・秋田郡花岡村の知行所二か村のものを収めてある。「収納」は「御物成取立帳」三冊のほか、扇田村与代清

三郎との差引収納の史料である。なお山口兵部は武茂家家来である。「給禄・公債」は給禄の計算書類、戊辰戦争焼失の返米代に関するもの、および金禄公債証書の史料である。「地券」は花岡村小作地のもの、「租税」はそれらの土地に対する地租および地価金調査のものである。「家計」は嘉永四年からの「月並雜用覚帳」や「大福帳」などの帳簿、金米等の差引・勘定書類である。これに明治十年代の通帳類を一括した。「土地売買」は明治十年代の売買証券である。「金融・貸借」は「貸金出入帳」や明治二十年代に経営した質屋の手形類、土地書入証券や借用証券類である。「小作」は明治十年代の花岡村を主とする小作証券、「雇傭」は中村与右衛門の「雇帳」類、「持馬」は農耕用所有馬の史料である。このように『家政』関係史料は廃藩・秩禄処分後の明治期の史料を主としている。

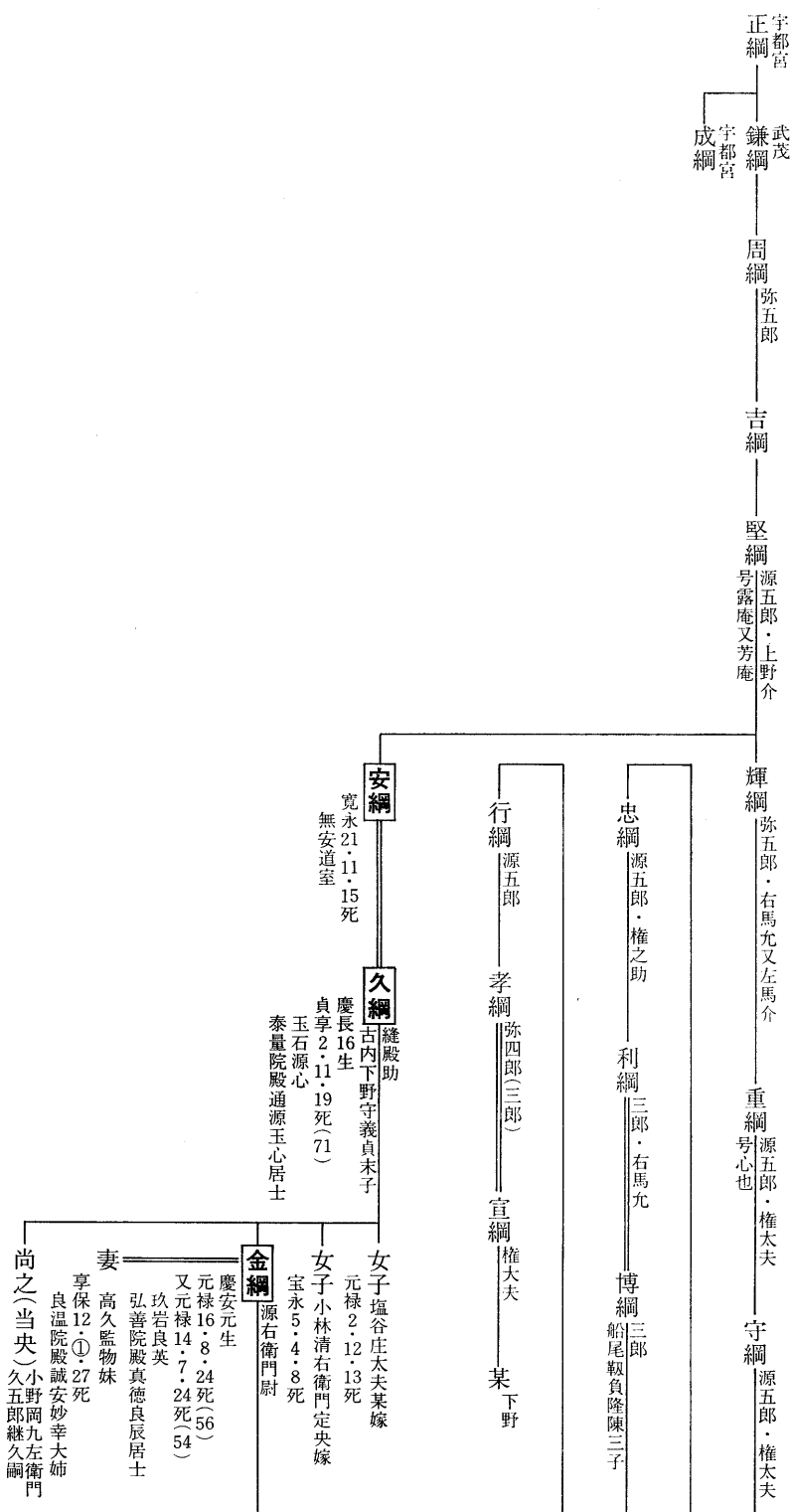
『日記』は「久保田出府中日記」〔五三〕（口絵写真参照）〔五四〕〔五五〕や、藩主義堯の藩内巡見にあたっての「当御渡野之節日記」〔五六〕など、勤仕中に作成した公的内容をもつものも、すべて一括してここに配列した。

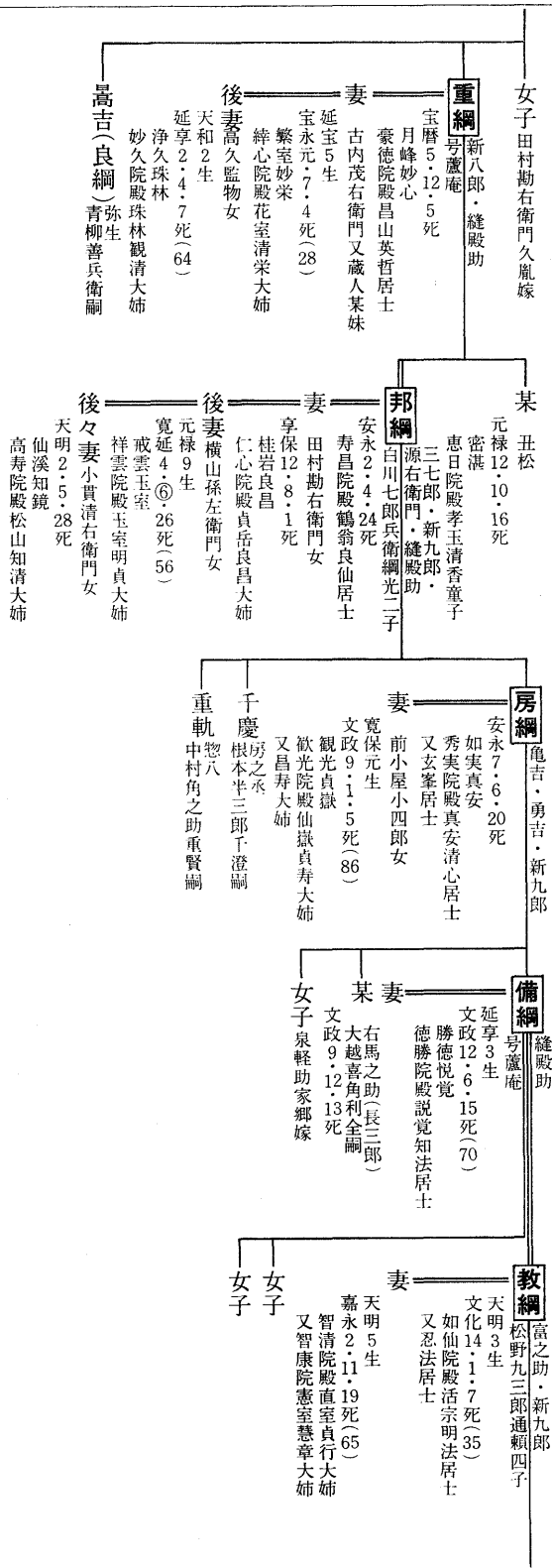
『書状』はほぼ私書状に限定し、姓名の五十音順（無姓の者はその後）に配列したが、嘉永四～五年の大徳院一件に関するものは○印で一括し、作成年代順に配列してある。

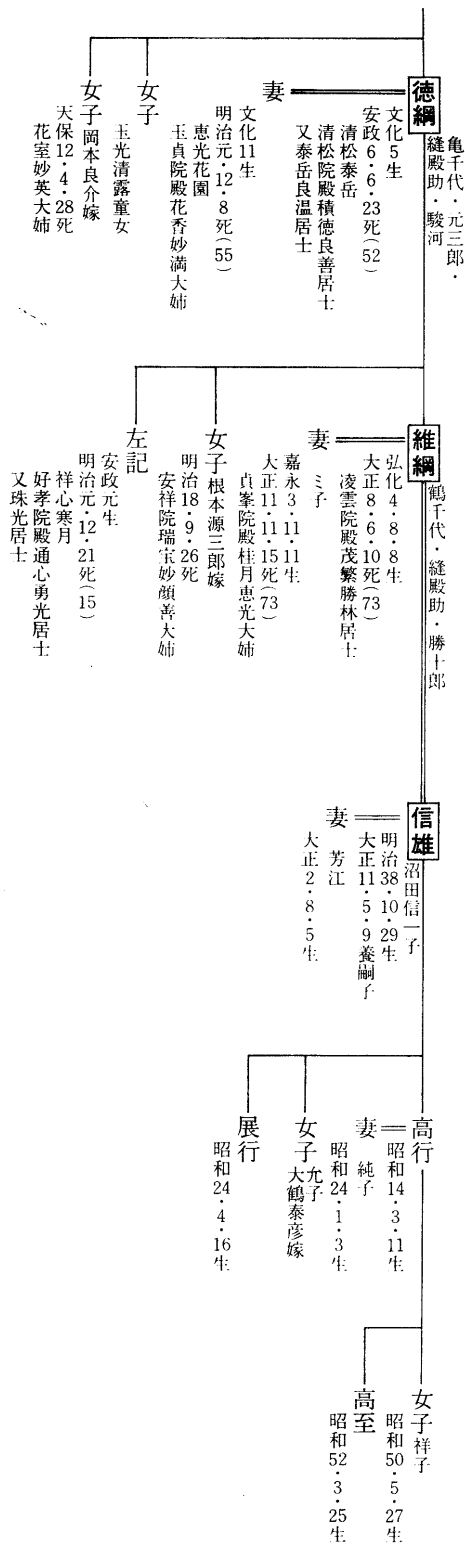
『学芸』は「礼式」「秘伝」「信仰」「文芸」「風聞」に分類した。「礼式」のうち「武茂分流家古例式」、「秘伝」のうち「当流入門諸請文」は関連も内容も不明である。「秘伝」は諸種のあるが整理番号順に配列した。「信仰」は武茂維綱の神拝記録である。なお写経一点をここに収めた。「文芸」は書籍類（写本を含む）であるが、「短冊雛形」以下は和歌詠草書法に関するものである。「風聞」は幕末のものであるが、「京都落書笑ひ言葉」は興味深いものである。

『その他』は武茂家に直接関係のない史料、および大坂の陣に関連して後に写された絵図・地名等を配列してある。

大館武茂家系図







(注) 秋田県立秋田図書館所蔵「藤姓武茂二男系図」「武茂系図書継」、
 武茂家過去帳および武茂信雄氏の教示による。

出羽国秋田郡十二所佐竹家 中岡本家文書目録解題

文書の伝来と特色

文書の伝来

本文書は、昭和二十四年に原蔵者の秋田県大館市桜町南一八番地故岡本時也氏（現当主は長男岡本時光氏）から当館が直接に譲渡を受けたものである。

なお岡本氏は藩政時代を通じて秋田郡十二所に居住したので、本文書も十二所田町の同家に伝来していたものが戊辰戦後大館に移住をみて、大館の同家において引き続き保管されてきたものである。

文書の性格と特色

本文書も佐竹家家中文書で総量は二一八点しかなく、延宝以降、明治期にいたるものであるが、とくに十二所が南部藩との境目にあることから、延宝年間を主とする境目論の記録や、戊辰戦争の記録が注目されよう。

関連史料の所在

本文書の旧蔵者である大館市の岡本時光氏宅に本文書と一緒に伝来した若干の史料が存在する。戊辰戦争関係の史料・原稿を主とするもので、以下にその表題を掲げておく。

明治戊辰戦役十二所御足輕軍功取調書

明治元年戊辰戦役十二所口軍功書

戊辰戦役十二所戦功御賞拝領人名録

戊辰戦役十二所諸隊編成帳

明治戊辰十二所戦争記

十二所口戦争記

明治元年戊辰戦役十二所活動史（岡本大内蔵原稿・二冊）

戊辰戦争之片影

明治六年調 十二所田町戸籍調

新調系図および書継の系図類

十二所俳人録原稿（岡本紅東・昭和九年一月）

岡本家の系譜と知行

岡本家は宇都宮氏の家臣時寿（摂津守）を祖とし、その孫時常（刑部右衛門尉・形右衛門）が、慶長二年宇都宮氏滅亡ののちに、義綱に従って常陸に趣き、義綱とともに佐竹氏に仕えたという。同七年秋田遷封に際し義綱と秋田に至り平鹿郡横手に住したが、元和元年義綱の秋田郡十二所移住に伴って同行し、以後子孫が同所に住した。知行は八〇石（七五石村付、五石武辺高）、新墾二〇石を加え一〇〇石となり、同三年藍印を賜わった（秋田県立秋田図書館所蔵・岡本時光氏所蔵「新調系図」）。

寛永四年「在々給人配当録」（『秋田県史資料』近世編上）には岡本形右衛門一〇〇石とある。子時高も父とともに横手に来り采地五〇石を賜わったが、後年十二所へ移住した。寛永十年時高が死去すると、父の采地を合わせ一二五石になったが、うち二五石と父の開墾地二〇石、それに後年の開墾地を合わせた五〇石を、弟時広（時寿子分家時屋の養子）に頒ち一〇〇石となった。しかし寛永年中に開墾地を合わせ一五〇石となっており、万治元年「在々配分帳」（『秋田県史資料』近世編上）では岡本采女（時次）一五〇石うち本田一〇〇石、開五〇石の記載がある。時高の孫時芳の時、後述の南部藩境界論治定の功により三〇石を賜い一八〇石となった（以上「新調系図」）。正徳四年の分限帳も岡本円左衛門（時方）一八〇石とある。

岡本采女知行所（明治元年）

秋田郡中野村	石	83.699
" 山 館 村		30.6
" 大子内村		2.484
" 笹 館 村		2.68
" 独 鉦 村		0.763
" 扇田村之内宿内村		4.001
" 岩 瀬 村		0.5
" 山 田 村		0.458
" 前 田 村		0.037
" 片 山 村		0.027
" 達 子 村		0.362
山本郡富岡新田村		6.8
" 槐 村		3.932
合 計		136.343

（注）岡本家文書「知行高取立帳」〔106〕〔107〕による。

のち黒印高のうち開高一二石九斗一升一合が減高となり、元文四年の分限帳では岡本円左衛門（時亮）一六七石余と記されている。天保十三年「新調系図」では岡本采女（時叙）一四四石九斗四升八合、嘉永歳中同人一四四石九斗五升八合と減少固定したが、明治元年では上表のように一三六石余となっている。

十二所と岡本家

慶長七年佐竹義宣は十二所に家臣赤坂朝光を置いたが、その城地は上藤原の浅利氏家臣十二所信濃の古館であったという。同十年佐竹氏の一一騎が男鹿の脇本から十二所に移され、翌十一年佐竹家臣三六人が男鹿の脇本から秋田郡二井田に移された。さらに同十七年二井田の三六人が十

二所に移され、十二所給人は四七人となった。

元和元年赤坂氏に代わって塩谷義綱が十二所代官に任ぜられ、翌二年十二所城を真山岱（上藤原）から十二所元館町に移し、湿地帯を埋立て町構えを定めた。元和六年幕命によって十二所城を破却し、代わって再来館を建てたが、この年十二所給人は一九〇余人を数えるに至った。

延宝三年南部藩の百姓が葛原村内の山の萱を盗伐したことが発覚し、境界争いもからんで、十二所方百姓二九九人と南部方百姓五〇〇余人との間で騒動となり、葛原村の抛人木須谷源十郎が南部花輪の山見長九郎に斬り殺されるという事件が起こった。この境目争論は延宝五年幕府の裁定が下ってほぼ治まったのである。

延宝七年七月塩谷重綱が角館に移され、梅津忠貞が十二所代官に任命された。ついで天和三年忠貞は久保田に移り、横手から茂木筑後知恒が十二所代官に任命された。茂木氏は以来知端が明治二年解任されるまで一八七年間代々十二所代官を勤めることとなった。知恒の知行高は二二〇〇石であったが、新田を加えて元禄年間に三五〇〇石となり、組下九八人・家中（茂木氏家臣）五〇人・足輕六〇人、合計二〇八人と増加して、総扶持高は九五三三石に達している。

藩境警備は続けられ、貞享元年南部方面への備えとして葛原にも関所を設けて番所を置き、組下を配置した。享保三年八月十二所および葛原の関所は十二所境口番所・葛原境口番所と改称された（『大館市史』第二巻）。

本文書の岡本家はこの十二所代官（延宝七年以後は茂木氏）組下の十二所給人である。

文書の配列と概要

本文書は量も少なく、過半が冊子形態の書籍である。書籍（写本）のうち秋田藩に関係あるものは敢えて文書・記録の中に含めて扱い、これらを『勤役』『岡本家』に分類し、その他の書籍類は『書籍』として配列をした。

『勤 役』

「佐竹家」は「佐竹氏御系図」をはじめとする佐竹家に関する記録・書籍であるが、天保二年と文久元年～慶応二年の藩主の御渡野の記録二冊がある。また「秋田国事要略年表」〔五七〕、「羽州綴編記」〔二二八〕、「種田御家老記」〔二五〕、「久保田名附帳」〔分限帳〕〔一二七〕、「羽羽秋田高村附帳」〔一二四〕等の記録・書籍は秋田藩政の概略を掴むに便利である。なお文政二年の幕府使番丹羽五左衛門ら「御国御目附衆御下向ニ付雜録」〔二九〕は幼主義厚時代の国目付派遣記録である。「法制」は藩からの仰渡を主とする。

本文書の特色の一是「境目」に配列した史料である。十二所は南部藩鹿角郡との境目に当たり、御山役が境目抛人を従え、領境警備に当たった。境目付近では慶長期から両藩の鉱山採掘や採草伐木・新田開発をめぐる争いが絶えなかった。寛永十六年は論地内での闘争があり、延宝元年には秋田藩が幕府に訴状を提出している。そして同三年前述の事件が起こった。五年幕府の裁決で決着をみたが、延宝二年～五年の御境目論所の日帳などの記録〔一〇〕～〔一五〕はこの期の史料である（口絵写真参照）。「境目」には以後の年代の史料も含まれている。

「戊辰戦争」「家禄・賞典禄」も本文書の特色である。慶応三年王政復古、鳥羽・伏見の戦いのち、奥羽鎮撫総督が置かれ、九条道孝が総督、沢為量が副総督となつて仙台へ着陣した。四月鎮撫総督より秋田藩へ庄内藩征討の命が下つたが、奥羽諸藩は会津・庄内二藩援助のため五月奥羽越列藩同盟を結び、秋田藩も加盟した。七月鎮撫総督が久保田に入ったのを機会に藩主義堯は藩論を統一して勤皇に踏み切り庄内討伐の先鋒をつとめたが、緒戦は不利で庄内藩主力の同盟軍と南部藩に侵入され藩領三分の二が侵犯された。九月強力な官軍の応援が来たり、南部藩・庄内藩の降伏があつて戊辰戦争は終焉した。

秋田北口への南部藩の戦端は八月九日に始まり、大館城代佐竹大和以下が抵抗したが、十二所はもちろん大館も落城し戦火に焼けたのである。荷上場まで退いた佐竹大和らは佐賀藩兵の来援により反転し、一四日にして大館を奪回した。そして九月二十五日南部軍が降伏したのである（『大館戊辰戦史』『大館市史』）。

明治二年藩主時堯は戊辰戦争の功により賞典禄二万石を与えられた。参戦して軍功のあつた家臣には給禄のほか賞典禄が賜与された。岡本大作は銃砲頭として計一六度出陣し、紋附・上下・金一〇枚を拝領するとともに、給禄当高三五石（現石三三石七斗九升二合）のほか軍功賞典米三石を与えられた〔三八〕〔四六〕。「家禄・賞典禄」は第六大区の軍功賞典高史料である。

「副戸長書類」は岡本大作が北秋田郡第二大区六小区の副戸長を勤めた時の取調書・記録類である。「その他」は大坂の陣の記録や曲田中山村野帳の写などがあるが、いずれも杉山久藏などの作成・宛名となっており、大作の継祖母の弟が久藏であるから、史料の混同があったかもしれない。同じく安政五年佐藤信量の蝦夷地道中記（「一三一」「一二九」）も他家史料と思われる。

『岡本家』

僅かであるが「家」に関する史料を配列した。「知行」は明治元・二年の「知行高取立帳」、「家政」は安政五年以降の金銭出入帳類である。「日記」のうち「古来々之日帳」（「二七」）、「万日帳」（「一八」）は延宝七、八年のものである。「袖日記」「袖廻裡」と題する雑記は、「東邑記」「南邑録」とともに地域研究に有用であろう。

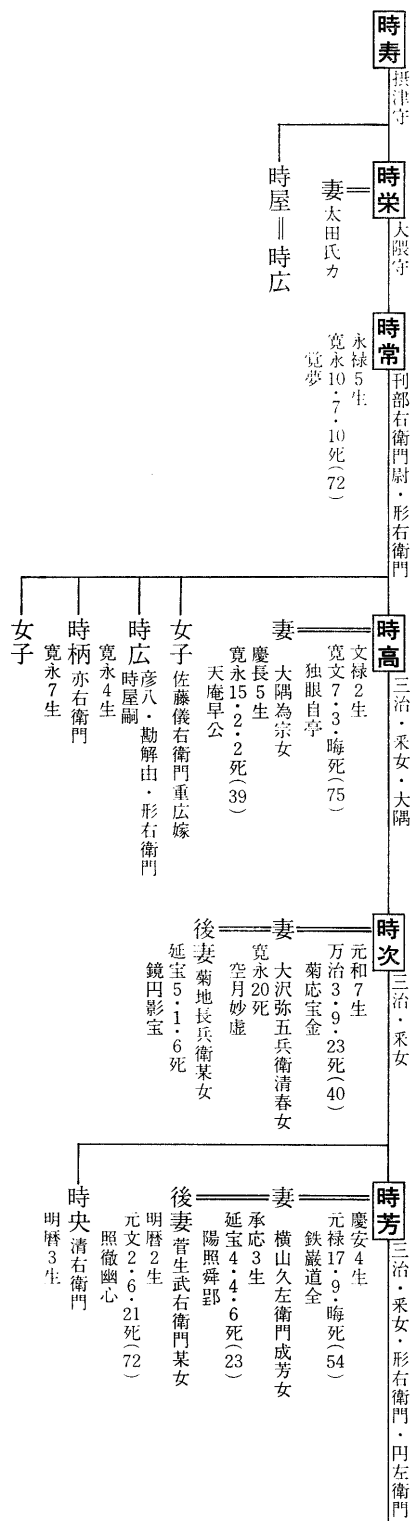
『書籍』

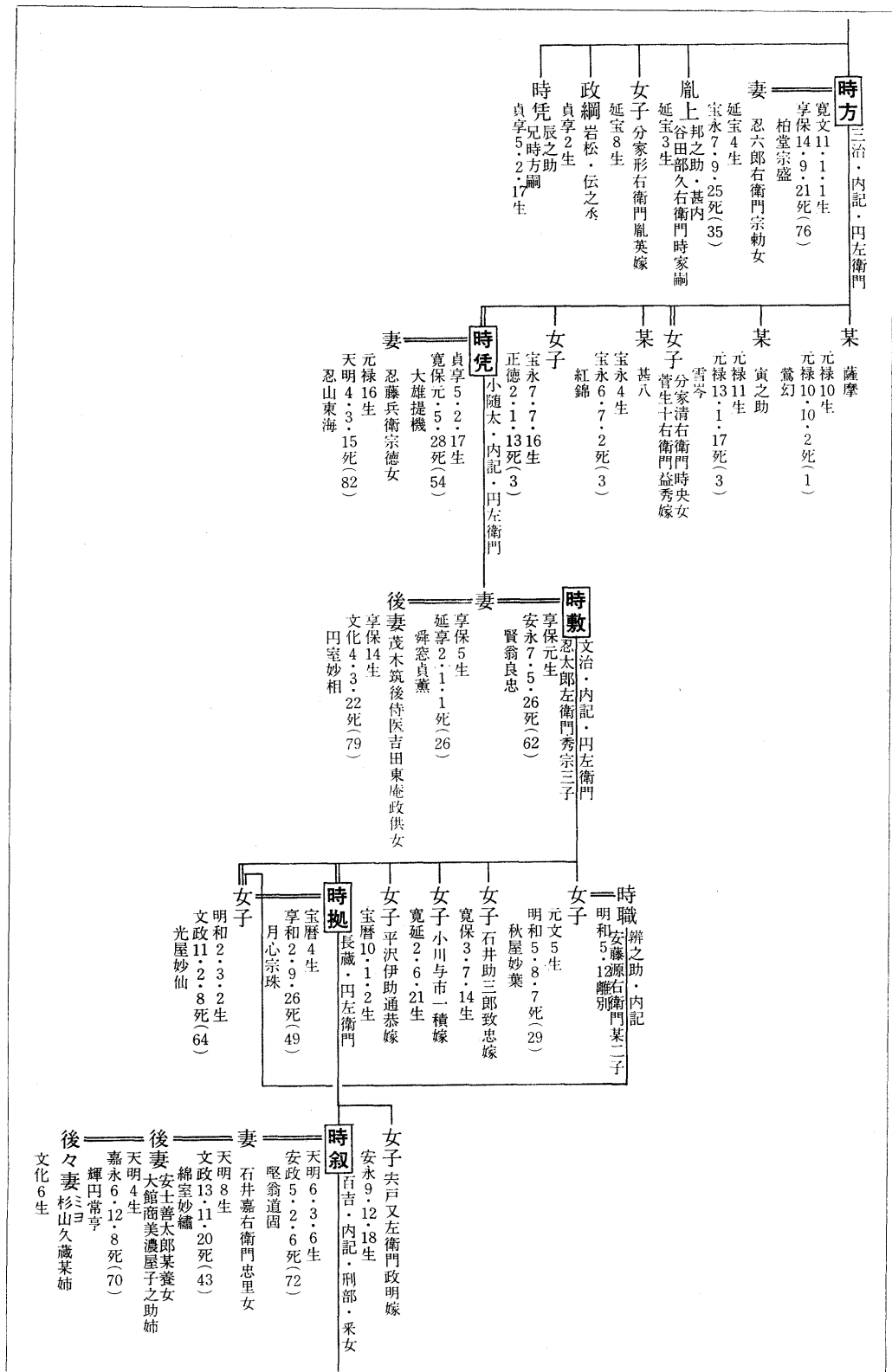
『秘伝書』と『その他』に分けたが、『秘伝書』は兵法に関する写本を主とし、ほかに火薬・薬法、検地法などがある。『その他』は雑多で纏りはないが、刀剣・礼式に関する写本がある。最後に往来物を配列した。

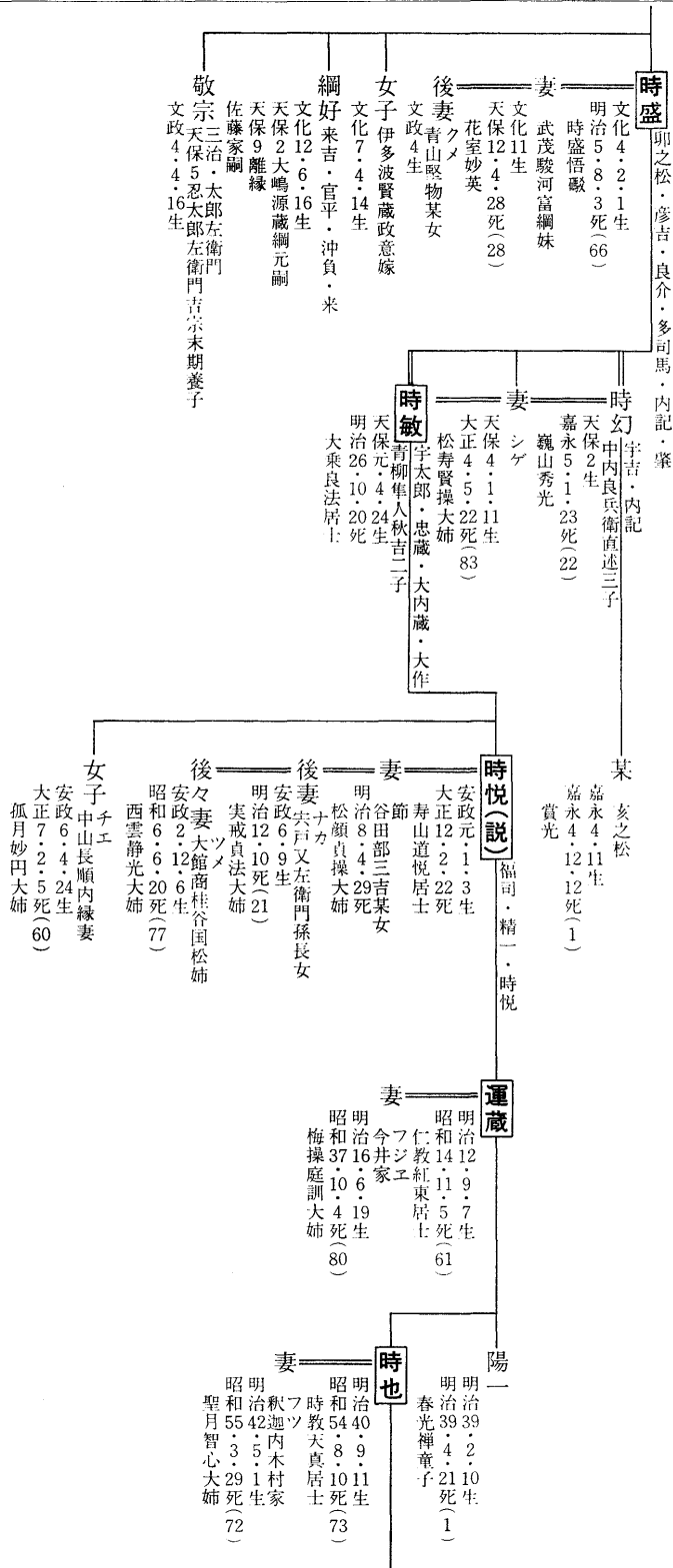
〔付記〕

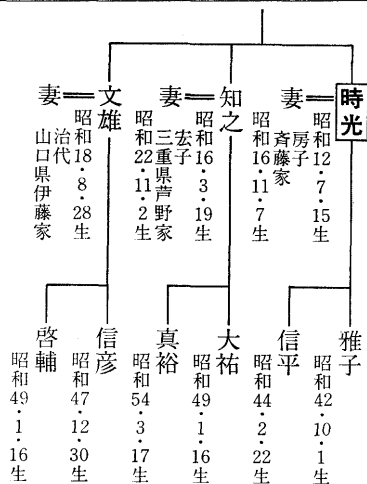
本目録所収の三文書の整理および目録の作成は大野瑞男が担当し、整理の一部は相京真澄の協力を得た。また各文書の旧蔵者の小貫瑞夫・武茂信雄・岡本時光の諸氏をはじめ、中田易直（中央大学教授）・山中良二郎（秋田県立秋田図書館）・石田真（石田病院長）・荒谷卓次郎（大館木材株式会社、荒谷家文書旧蔵者）の諸氏、秋田県立秋田図書館・大館市史編纂室にも協力を戴いた。記して深甚なる謝意を表する。

十二所岡本氏系図



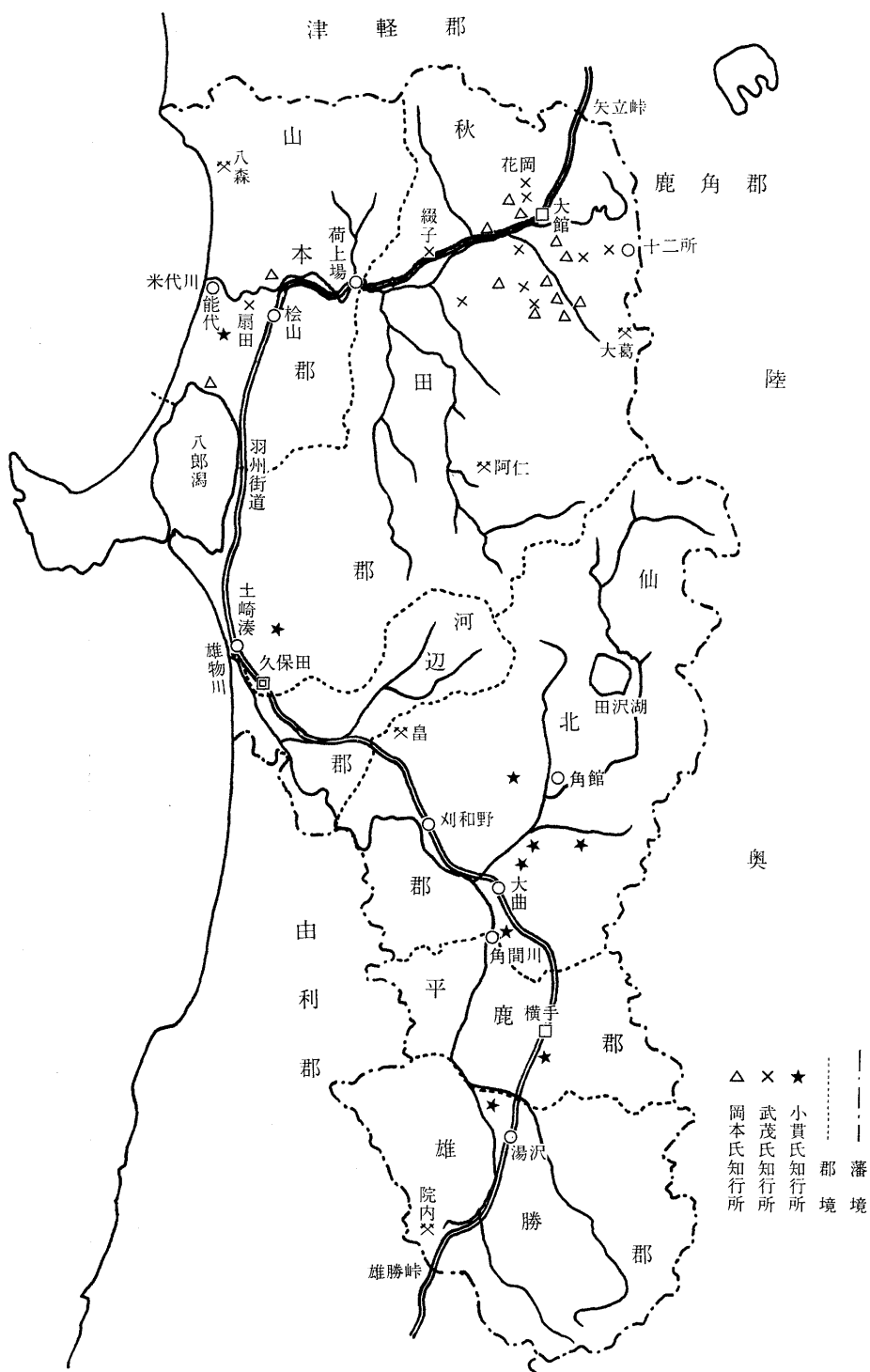






(注) 秋田県立秋田図書館所蔵および岡本時光氏所蔵「新調系図」
 岡本時光氏の教示による。

小貫家・武茂家・岡本家文書関係略図



佐竹氏歴代藩主系譜

(佐竹氏歴代事蹟略表・佐竹家刊、『秋田県史』第七巻による)

六	五	四	三	二	一	歴秋 代田
義 真 ^{まさ}	義 峯 ^{みね}	義 格 ^{たか}	義 処 ^{すゐ}	義 隆 ^{たか}	義 宣 ^{のぶ}	諱
左吉 徳寿丸 次郎	初名義恭 仙寿丸 求馬	千代丸 源次郎	徳寿丸 次郎	能化丸 四郎次郎	徳寿丸 次郎	称 号
義 堅	義隆子 吉岐守義長	義 処	義 隆	義重子 岩城忠次郎貞隆	義 重	父 諱
享保十七年 八月四日	元禄三年 九月十三日	元禄七年 十二月十一日	寛永十四年 八月二十一日	慶長十四年 正月十四日	元龜元年 七月十六日	生 誕
元文三年 四月十二日立嫡 寛保二年 四月十九日承祖	正徳五年 九月十二日 継宗家	元禄十三年 十一月十九日 立嫡		寛永三年 四月二十五日 養子		承養立 祖子嫡
寛延二年 十月六日	正徳五年 九月十二日	元禄十六年 八月十二日	寛文十二年 二月九日	寛永十年 三月二十六日	天正十四年	家 督
從四位下 侍 從 左兵衛督	從四位下 侍 從 右京大夫	從四位下 侍 從 大膳大夫	從四位下 侍 從 右京大夫	從四位下 侍 從 修理大夫	從四位上 侍 從 中將 右京大夫 遷封于出羽秋田	位 爵 職 封地
松平加賀守吉 徳女 盛徳院	黒田伊勢守長 清女 円宗院		松平出羽守 直政女 宝明院	南淡路義章女 光聚院	初那須資胤女 正洞院 次多賀谷重經 女大寿院	夫 人 附 法 名
宝暦三年 八月二十日	寛延二年 八月十日	正徳五年 七月十九日	元禄十六年 六月二十三日	寛文十一年 十二月五日	寛永十年 正月二十五日	薨 卒
二十二	六十	二十二	六十七	六十三	六十四	年令
通霄院 融山了本	円明院 月翁智心	天祥院 実蔵円真	徳雲院 不山宗見	鑑照院 天山良応	浄光院 傑堂天英	贈 称

十二	十一	十	九	八	七
義堯 ^{なか}	義睦 ^{ちか}	義厚 ^{ひろ}	義和 ^{まさ}	義敦 ^{あつ}	義明 ^{はる}
字君岳初名 宗胤又義 核・義就 龜三郎・清 三郎・左近	字伯章 雄丸次郎	字子德号健 初名義惠又 義英・雄丸 次郎・德寿丸	字子政 号泰峨 直丸次郎	初名義直 秀丸 次郎	初名義局 延寿丸 求馬
義処子叙胤五世孫 相馬長門守益胤	義厚	義和	義敦	義明	義隆子義長嫡子 壹岐守義道
文政八年 七月二十七日	天保十年 五月二十二日	文化九年 七月十七日	安永四年 正月元日	寛延元年 閏十月四日	享保八年 十一月五日
嘉永二年 二月二十六日 安政四年 七月二十日 継宗家	天保十三年 七月三日立嫡	文化十年 三月五日立嫡	安永七年 十二月二十五日 立嫡	宝曆三年 十二月二日立嫡	宝曆三年 九月三日 継宗家
安政四年 七月二十日	弘化三年 十一月四日	文化十二年 九月七日	天明五年 七月二十六日	宝曆八年 五月十一日	宝曆三年 九月三日
自從五位 至從二位 勳三等侯爵 侍從・少將 中將・參議・ 右京大夫 秋田知藩事	從四位下 侍從 右京大夫	從四位下 侍從 少將 右京大夫	從四位下 侍從 右京大夫	從四位下 侍從 右京大夫	從四位下 侍從 右京大夫
初佐竹壹岐守 義純女宝珠院 次藤堂佐渡守 高聽女真誠院 次青山下野守 忠良女後大婦	松平兵部大輔 豐資女 諒鏡院	初前田淡路守 利幹女瑤台院 次松平因幡守 齊稷女月鏡院	堀田相模守 正順女 仙松院	松平土佐守豐 敦女 貞明院	義峯女 光源院
明治十七年 十月二十三日	安政四年 七月朔日	弘化三年 九月八日	文化十二年 七月八日	天明五年 六月朔日	宝曆八年 三月十八日
六十	十九	三十五	四十一	三十八	三十六
顯德院 忠勲鳳瑞	憲諒院 文岳仁裕	宏德院 雍山道熙	天樹院 泰峨凌雲	源通院 泰嶽良清	恭溫院 德岩玄光

史料館所藏史料目錄 第三十三集

昭和五十六年三月二十五日 印刷発行

東京都品川区豊町一丁目十六番十号

国文学研究資料館内

編集者 国 立 史 料 館
発行者

東京都中野区中央四丁目八番九号

印刷所 株式会社 三 協 社